
魔法少女リリカルなのはINSIEME

カルタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはINSIEME

【Nコード】

N2565L

【作者名】

カルタス

【あらすじ】

なのはの最愛の弟、蹄来夢と来夢の親友であり恋人のロリアががんばる物語。

今は完結しまして、続編を書いています。

よかったらそっちの方も読んでみて下さいね。

主人公達の紹介（前書き）

生まれて初めての小説。

まずは、登場人物紹介です。

主人公達の紹介

ひずめ
らいむ
蹄来夢

この小説の主人公。

男だがはっきり言って女顔

髪・瞳の色は共に黒

魔力光の色は紺

魔力ランクはA A

魔導師ランクは陸戦A A A

現在の所属は陸士108部隊。(特別暗殺部隊の所属経験あり)

階級は一等陸士

年齢は16歳

誕生日は4月28日

身長は171cm

魔法術式はヒズメ式とミッド式

デバイスはヒズメ式アミーコデバイスの「ロリア」

バリアジャケットは紺色のズボンに白のシャツ、その上に紺色に白のラインが入った七分袖のロングジャケット。更にその上にフェイトを意識した白いマント。

性格は温厚で滅多に怒らない。

淋しがり屋。

フェイトのファン。

好きな物

なのは（姉として）

甘い物（特にチーズケーキ）

ロリア

嫌いな物

ピーマン

虫

解説

なのはとは義理の姉弟で、なのはが7歳の時に高町家の一員となる。

（この時来夢は5歳）

高町家に来る前は妹が1人いたようだが、来夢自身記憶が曖昧でよく覚えていない。

11年前の夜、高町家の前に倒れているのをなのはの父、士郎が発見したあと来夢の記憶がはっきりしないこともありひきとられた。

13歳になるまでは魔法が使えないようにリンカーコアが特殊な魔法で封印されていた。

ロリア・フォルティス

来夢の親友であり一応恋人

ヒズメ式アミーコデバイス（ヒズメ式ではデバイスと言われるがミッド式のデバイスとはちがいで人間）

身長は165cm

年齢は16歳

瞳の色は黒

髪の色は薄い茶色で長さは肩より少し長いくらい。
普段はポニーテール。

魔力光の色は紺

魔力ランクはA

魔導師ランクは総合A

魔法術式はヒズメ式とミッド式

所属は常に来夢と同じ

階級は二等陸尉レアスキルがあるため

普段はスカートをはくことが多い
青系が多い

バリアジャケットは来夢と同じ。

唯一の違いはロリアはミニスカートだという点。

性格は来夢と同じく温厚。

精神年齢はあまり高くない。

淋しがり屋。

来夢に対してはささいなことで怒り、我が儘な一面も見せる。

好きな物

甘い物（特にチーズケーキ）

来夢いじり

嫌いな物

犬

キムチ

解説

来夢が高町家に来る前から一緒にいるが、

来夢にかけられた封印が解けるまでは、

ロリアも人形に封印されていた。

先祖代々受け継がれているレアスキルを持っていて来夢のデバイスになることができる。

管理局に提出した書類ではデバイス扱い

主人公達の紹介（後書き）

紹介が長過ぎましたかね？

少しでも興味を持ってもらえたら幸いです。

では、また次の話で

第1話 帰郷（前書き）

第1話です。

お楽しみ下さい

第1話 帰郷

「帰ってきたぜ！海鳴りに！」

俺、ひすめ蹄来夢は大声で叫んだ。

「はあ、ずっと電車や飛行機に乗ってたのに何でそんなに元気なの？来夢は……」

俺が元気に叫んでいると隣にいる俺の親友であり恋人の、ロリアが疲れた声で聞いてくる。

「だって、9年ぶりになのは姉さん達と会えるんだよ？テンション上がるよ！」

そう、9年前から昨日まで俺はイタリアにいた。そして今日、9年ぶりに故郷に帰ってきたのだ！

大好きな家族に会える。テンション上がらない方がおかしいだろ。

「あつそ……」

相変わらずロリアのテンションは低い。いつもはすげー高いのに。どうしたんだろ？

「そんなにうれしいなら早く行こうよ。なんか食べないと死ぬ……」

ああ、お腹が空いてたのか。

「よし！じゃあ行こう！」

こうして俺達は実家を目指して歩き出した。

- なのはside -

今日は待ちに待った来夢が帰って来る日。嬉しさのあまりいつもより2時間も早く起きてしまった。

「まだかな……」

思わず口に出してしまった。

その時、

カラン カラン

お店のドアが開く音がした。

「来夢!!!」

急いでドアのところに行く……

そこには私の親友であるフェイトちゃんとはやてちゃんが立っていた。

「……………フェイトちゃんとはやてちゃんか……………」

「今、明らか残念な顔したやろ!!!自分で呼んどいて
そつ、2人を呼んだのはなのはだった。」

「い、いや、別に残念な顔なんてしてないよ!」

「まあ、ええわ。ところでまだきとらんの?来夢君」

「うん……………」

「絶対、私達の方が遅いと思ったのに」

「うん……………ほんと遅いなあ……………どうしたんだろつ……………」

- side out -

「ああ、つかれたよ……。おんぶしてよ来夢」

「俺も疲れてんだよ!」

「すごく元気に見えるんだけど……………」

「う、うるさい!」

ロリアの言う通り本当は疲れてない。ではなぜ疲れたフリをしたか。

ロリアをおんぶするのが恥ずかしかったからだ。ロリ

アは女の子だ。

しかも来夢と同じ歳。つまり16歳。

恥ずかしすぎる……………

そんなことを思っているとロリアがもつと恥ずかしい提案をしてくる。

「お姫様抱っこでもいいから……………」

「アホか!!! 恥ずかしすぎる!!!」

「お願いだよ。一生の」

こいつは一生に何度一生のお願いを使うつもりなんだろう…

「はあ、しかたないな… おんぶしてやるよ」

「ほんと? ありがとう 来夢大好き」

はあ、俺ってやっぱあまいな…

- なのは side -

フェイトちゃんとはやてちゃんがきてからもう30分…

「遅過ぎる… 事故にあったのかも… もしや、誘拐? ちよつとさがしてくる!」

「ちよつと待ってよ、なのは。来夢君ももう16歳でしょ? 大丈夫だよ。」

フェイトがそう言った時、元気な少年の声が店内に響いた。

「ただいま!!!」

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t

第1話 帰郷（後書き）

どうだったでしょうか？

これからは週に1度は必ず投稿しようと思っています。

ちなみに、最後のはイタリア語で「次回に続く」って意味です。
（あってるかな？）

なにかおかしいところがあったらどんでん言ってお下さい。

では、また。

第2話 再会（前書き）

第3話です。

第2話 再会

「ただいま!!」

俺はおもいつきり店のドアを開けた。1秒でも早く姉さんに会いたくて。

しかし、ドアを開けた瞬間、俺の思考は停止した。

俺の脳内シミュレーションでは

『久しぶり、なのは姉さん!』

『おかえり、来夢!大きくなつたね。』

みたいな感じになるはずだった。

はずだったのだが……

今、俺の目の前にはなぜかなのは姉さんの顔がある。しかもドアッブで。

あれ?どうなつてんだ?

思考が追い付かないまま俺はなのは姉さんに抱き着かれた。

それはもうすんごい勢いで…

「ぐはっ…」

大ダメージ!!

あ、今ので思考がさらに……

そこで俺はあることに気がついた。あれ?何か柔らかいものが俺の胸に押し付けられている。なんだろ?

俺は使い物にならない脳で必死に考える。そしていつもの倍の時間をかけてやっと考えがまとまる。

ああ、これはきつとなのは姉さんの胸だ。うん。

「つて胸!?姉さん!」

「えっ?何?」

「胸が!なのは姉さんの胸が!」

姉さんの顔がみるみる赤くなっていく。そして…

「にやああああ……!!!!」

ドスツ！！

なのは姉さんの叫び声と共に変な音がした。
ん？なんだ？

そして、俺は考える間もなく意識を失った。

- フェイトside -

お店のドアが開いた瞬間、なのはが入ってきた女の子に抱き着いた。
「ただいま！！」って言ってたからきつとあの子が来夢君なのだろう。

あれ？でも、なのはは弟だって言ってたような…
そう思いフェイトははやくに念話を送る。

『ねえ、はやて。なのはが来夢君は弟だって言ってたっけ？』
『うちもそう思ってたんやけど、どうやら聞き間違いだったみたいやね。女の子にしか見えへんし』

結局二人は来夢が女だということに納得した。

その時、ドスツ！！というすごい音が店内に響いた。
驚いたフェイトが音の方をみるとそこには、顔を真っ赤にし、拳をにぎりしめたなのはと白目をむいて倒れている来夢がいた。

- side out -

目を開けると3人の女性が俺の顔を覗き込んでいた。
ロリアとなのは姉さんと知らない人。きつとなのは姉さんの友達だろつ。

そう思い俺は起き上がる。鳩尾がやけに痛い。これが失神した原因だと確信する。

すると、なのは姉さんが謝ってきた。

「ごめんね、来夢。嬉しくてつい…」

「別にいいよ。もう大丈夫だし」

「うん、ありがとう」

「で、こちらの方は？」

「あ、こちらは…」

と、そこで奥からもう1人姉さんの友達がお茶を持ってやってくる。

「っ！？ふえ、ふえ…」

「っ」「ふえ？」「っ」

「フェイトさん！？」

なのは姉さんのもう1人の友達はなんと俺が大ファンであるフェイト・T・ハラオウンさんだったのだ！

「え？私のこと知ってるの？」

「はい！大ファンです！！握手して下さい！！！！」

「あ、えと、まあ、握手くらいなら…」

「よつつつつしゃああああ…！！！！！！！！」

ついに握手しちゃったよ！フェイトさんと！もう一生手を洗いません！！！！

- ロリア side -

ああ…来夢が暴走しちゃってる。みんなは何が起こったのか分かってないみたいだし私が止めなきゃ！

「来夢！落ち着け！」

ダメだ…いつもなら止まるのに…
ならこれでどうだ！

「来夢のバカ…！！！！」

止まらない…

くっ、こうなったら奥の手だ。

「ふえ、ふええええんっ！来夢なんて嫌いっ！大っっ嫌いっ！！！！」

「「え？」」

今のはなのはさんが驚いた声と来夢がショックを受けた声。ほかの2人も、どうしたんだ？という顔をしている。

「ごめん！ロリア。俺が悪かった！」

来夢は少し泣きながら私に土下座してきた。

そこまでしないでいいんだけど…

「反省してるならさっきの言葉は撤回してあげる」

「ありがとうございます！心の底から反省しております！」

- s i d e o u t -

ロリアの泣き声と「来夢嫌い宣言」にはすごく弱い。

昔、大喧嘩したことがあるから…

今、ロリアは泣きまねがすごい恥ずかしかったとか言って怒っている。

しかし、今、俺はロリアに構っている場合ではない。

俺は今とても重大な問題に直面している………はあ………

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t a

第2話 再会（後書き）

小説を書くのがこんなに難しいとは……
正直ナメてました。

でもこの調子で頑張っていけます。

では、また。

第3話 ばれちゃった……（前書き）

話はあまり進展しません……

第3話です。

第3話 ばれちゃった……

俺は今とても重大な問題に直面している…

それは何か？

それは…

俺が魔法を使えるということ、そして管理局員だということがなのは姉さんにばれてしまったのだ…

このことでロリアに散々責められた。

「私には絶対ばらすなとか言っというて結局自分ではらしてるじゃん！！バカじゃないの！！まあ、私は関係ないから来夢がどうだろうがどうでもいいけどね！」

うっ……

その通りなんだが…本当にその通りなんだが……

もう少し言葉を選んでくれても……

オブラートに包んでくれても良かったんじゃないかな？

酷いよロリア……

でも今はショックを受けてる場合じゃない。ほんとに……

なのは姉さんがものすごい笑顔で俺を見ている…

怖いよ……

そして、遂になのは姉さんによるお話し（尋問）が始まった……

「さあ、来夢？お姉ちゃんに隠してた事を全部吐くのか？」

吐くって言うっちゃってるよ…

自分の事「お姉ちゃん」って言ってるし……

「返事は？」

「はい！！」

絶対に精神がもたないよ……

「で、どこから話せば……」

「お姉ちゃんの話聞いてた？最初から全部 言ったでしょ？」

「はいっ！言っていました！すみませんでした！！」

「謝るのはいいからはやく話して」

「はい……」

こうして俺は洗いざらい話し始めた。

俺が初めて魔法に関わったのは13歳の時。

その時俺はイタリアにいた。

小学校に入学する前に俺は外国の学校に行きたいと言ったのだ。理由は忘れたが……

そして、父さんの知り合いがいるイタリアならいいといわれ、俺はイタリアに行った。

俺がイタリアに行ってから6年半が経った13歳の誕生日の夜、俺

が高町家に来た時から持っていた人形が突然本物の女の子になったのだ。

それがロリア。

そして、ロリアが人間の姿になったと同時に俺のあやふやだった記憶がはつきりした。

本当の両親の事。

どこかにいる妹の事。

魔法の事。

そして、俺がヒズメ式の 唯一の継承者だという事。

そして、俺は妹を捜すことにした。

新しい友達、ロリアと一緒に。

「こんな感じです」

「だいたいわかったけどどうして隠してたの？」

「えっと、姉さんに心配かけたくなくて……」

「そう……でも管理局にいるってだけですごく心配だよ。なにがあるかわからないし」

「ごめんね、なのは姉さん。でも、誰になんと言われようと俺は管理局を辞めない。絶対に」

これだけはゆずれないのだ。

「何でっ！？別に管理局じゃなくても……」

いや、管理局じゃなきゃダメなんだ。
なぜなら……

「俺はなのは姉さんに憧れて管理局員になったんだ!!」

「え?」

「俺が初めてミッドチルダに行った時、なのは姉さんの事を聞いた。
管理局のエースだって。」

「ニューズではなのは姉さんが事件を解決してる映像が流れてた。
かっこよかった。すごく。」

「俺も姉さんみたいになりたいと思った。」

「だから、毎日魔法の練習をして管理局に入った。」

「なのは姉さんみたいなエースになるってのは俺の夢だ。」

「だから絶対に管理局は辞めない。」

「そうだったんだ……もう来夢も子供じゃないんだよね……ごめんね、
怒ったりして」

「いいよ。心配してくれてる証拠だからね」

「うん。じゃあ、みんなの所に戻ろうか?」

そして俺と姉さんは3人の所に戻って来た。

「ええ話やったな」

「本当にそうだったね」

「でしょ！来夢の管理局に入った理由」

ロリアの奴しゃべりやがったな…

「おい、ロリア」

「ふあっ！？ら、来夢！？」

「おまえ、しゃべっただろ」

俺はロリアをおもいつきり睨んだ。

「あ、えっと、うう、その、うっ、うっ、ごめんなさい……」

これ以上睨んだらマジで泣きそうだ。

「まあ、いいや。じゃあ、自己紹介させてもらいます。

跡 来夢です。階級は一等陸士。魔導師ランクはAAA。所属部隊は陸士108部隊。普通の魔導師が使うデバイスは使いません。ヒズメ式アミーコデバイスの「ロリア」が俺のデバイスです。魔法術式はヒズメ式とミッド式です」

俺の自己紹介が終わると他のみんなも順番に自己紹介をした。

「ところで、何で来夢ちゃんは女の子やのに自分のこと俺って言うん？」

え？女の子？？

「私も気になってたんだ。なんでなの？」

フェイトさんまで……………

「いつときますけど俺は男です！」

「「ええ……………!？」」

二人が驚く。

酷いよ……………泣きそう……………

「ごめんな？来夢君」

「ごめんなさい……………」

「べつにいいですよ……………」

「許してくれるんか。優しいなあ〜来夢君」

「いえ、あなたを許すとは言ってません。許すのはフェイトさんだけです」

「差別や……………」

「いいえ、区別です」

「同じや……………」

「まあまあ、二人共落ち着いて」

「許してあげて。はやても悪気があった訳じゃないから」
うん、どつしめづ。

「まあ、姉さんとフェイトさんがそう言っなら……」

俺はしぶしぶはやてさんを許した。

「あの、来夢君……」

「あ、来夢でいいですよ」

「そう？じゃあ来夢……あの……ね？もし良かったら私の事も姉さんっ
て呼んでくれないかな？せっかく親しくなっただし」

「え？いいんですか」

「うん……いいかな？」

「はい！！喜んで！！」

なんか一気に親しくなっちゃったよ！

「あと、来夢は私の弟になったんだから敬語もやめてね？」

「はい！……じゃなくて、うん……」

フェイトさんってこんなキャラだったんだ。
ていうか姉さんって呼ぶの恥ずかしいな……

「ところで、アミーコデバイスとかヒズメ式って何なの？」

俺がフェイトさん……フェイト姉さんのことを考えてるとなのは姉さんが質問してきた。

「まあ、簡単に言うと俺のご先祖様が考え出した魔法形式とデバイスのこと」

「へー、そんなの初めて聞いたよ」

「で、詳しく言うとなんや？」

みんな興味津々なようだ。

「ちょっとまって。今説明するから」

説明するためにロリアを呼ぶ。

…が返事がない。

「ロリア？」

俺がロリアを捜してるとなのは姉さんが寄ってきた。

「ロリア、リビングで寝てるみたい」

返事がないと思ったら寝てたか。

「ありがと、姉さん。俺が使う部屋はどこかな？」

「前に使ってた部屋だよ。場所、覚えてる？」

「うん、大丈夫。それとヒズメ式の説明だけど、ロリアがいたほうがわかりやすいと思うから明日まで待ってくれるかな？」

「了解。みんなには私から言っておくね。」

「ありがとう」

俺はなのは姉さんにお礼を言い、ロリアが寝てるリビング格に向かう。

「うつぶせかよ……」

ロリアはうつぶせでソファーに寝ていた。

「うーん、どうやって俺の部屋まで運ぼう……」

俺が悩んでいるとロリアが寝返りをうつて仰向けになった。よし、これで運べる。

俺はロリアの体の下に手を入れ抱き抱える。

まあ、お姫様抱っこだ。

30秒もかからず俺の部屋に着いた。

ロリアをベットに寝かせると苦しそうな顔で俺の名前を呼んでいた。悪い夢でもみてるのかな？

俺はロリアの頭を撫でてやる。

すると苦しそうな顔は消えまた寝息をたて始める。

その寝顔を見ていたら俺も眠たくなってきたので床に寝転がる。

そして、俺は1分もしない内に深い深い眠りに落ちて行った……

C
O
N
T
I
N
U
A

A
L
L
A

P
R
O
S
S
I
M
A

V
O
L
T
A

第3話 ばれちゃった……（後書き）

「主人公とデバイスの紹介」のロリアの設定を少し変えました。けっこうめちやくちやな設定ですが受け入れてもらえると思います。

では、また

第4話 騒がしい時間(前書き)

今回も全く話しが進みません。

それでもよければどうぞ

第4話 騒がしい時間

俺は今、何者かにまたがられ目隠しをされている。だから目を開けても何も見えない。

そして、俺の目を隠している犯人は楽しそうに声をあげる。

「だ〜れだ」

まさか現実でこんなことする奴がいるなんて…

そして、犯人ことロリアは再び声をあげる。

「だ〜れ〜だ」

なんて答えればいいんだ？わからないふりをすればいいか。ロリアは精神年齢低いし。

「わからないな〜。もう一度聞かせて？」

こんなもんか？

すると案の定のってきた。

「しょうがないな〜。もう一度だけだよ？」

「OK」

そして、ロリアはまた声をだす。今度は俺の耳元で。

「だ・れ・だ」

「うおっ!？」

予想外のその声に俺は驚く。
急に大人っぽい声出すなよ!
そして、俺は答えを告げる。

「ロリアだろ？」

「あつたり〜」

ふう…朝から疲れた…

「ロリア、そろそろ俺の上からおりてくれる？」

「なんで？」

え?なんでってそりゃ…

「重いから」

「え?重い?私が？」

「他に誰がいるんだよ」

「うう…来夢のバカ…お姉ちゃん達に言い付けてやる〜」

ロリア半泣きしながら部屋を出て行った。

何なんだ?

てかお姉ちゃんって誰だよ…

そんなことを考えてるとロリアが戻ってきた。
デバイスを手にしたやけに笑顔のなのは姉さんを連れて……………

あのあと俺はなのは姉さんとロリアにボコられた。
もう立てないよ……………

俺の隣には殴り疲れて寝ているロリアがいる。
疲れるほど殴るなんて……………

30分程して痛みも和らいできたのでロリアを起こす。

「ロリア、起きろ。」

「うにゅ〜」

起きねえ……………

しょうがない。少しかわいそうだがやるか……………

俺はロリアの耳元で叫んだ。

「起きろ……………!!」

「きゃ……………!!」

バキッ!

「ふっ……………」

ロリアが咄嗟に突き出した拳が俺の顔面にクリーンヒットした。
今日は散々だな……………

- ロリア side -

私は今、リビングで翠屋のチーズケーキを食べている。すごく美味しい。

あとで来夢にも持ってってあげようかな？

来夢は今部屋でお昼寝中。 もう夕方だけど…

私が回復魔法をかけてあげてる途中で寝てしまった。

「はあ、暇だなあ…」

私はつぶやく。

するとお店の方からなのはお姉ちゃんがやってきた。

「あ、ロリア。来夢は一緒じゃないの？」

「うん。来夢は部屋で寝てるよ」

「そう。ねえロリア？明日からお店を手伝ってくれない？」

「え？でも、私何すればいいかわからないし…」

「大丈夫だよ。教えてあげるから」

「ほんと？それなら私、やってみたい！」

正直興味はあったし、お姉ちゃんが教えてくれると言っているので手伝うことにした。

「ありがとう。明日からよろしくね」

その日の夕食は私となのはお姉ちゃんの2人で食べた。来夢は死んだように眠っていて起きて来なかった…
来夢がいないとつまらない…
そして私は明日に備えてはやく寝た。

来夢のベットに潜り込んで…

- side out -

俺が目を覚ますとロリアは既に部屋にはいなかった。
あいつ朝は弱いはずなのに…もうそんな時間なのか？
俺はそう思い時計をみる。

「まだ8時じゃん」

いつもならロリアはまだ寝ている時間だ。
とりあえず、リビングに行ってみるか。
そう思い俺はリビングに向かう。

「いない……」

出かけたのか？

今度は店の方をしてみる。

……いた。

ロリアが働いてる…

「マジか？」

俺は信じられず目を擦る。

するとロリアが消えた。

はあ、やっぱり幻覚か…俺疲れてるのかな？

その時…

「うおう！？ロリア？」

突然ロリアが飛び付いてきた。

こいつ客がいないからって魔法使いやがったな。

「おはよ〜 来夢」

「おう。おはよう、ロリア。で、なんでエプロンをつけてるんだ？」

「見てわからないの〜？翠屋で働いてるんだよ。それよりも私かわいい？」

「ああ、すっごい可愛いよ」

まあ、エプロン着けてるだけなんだけど…でも可愛いのは素直な感想。

「ほんと？やった〜」

ロリアは跳びはねて喜ぶ。
ロリアがはしゃいでいるのを眺めているとなのは姉さんが声をかけた。
きた。

「おはよう、来夢」

「おはよう、姉さん」

「来夢も手伝ってくれるかな？今、お母さんとお父さんは旅行、お兄ちゃんも忍さんと旅行、お姉ちゃんは友達の家にお泊りに行ってしばらく帰ってこないんだよね。
だから、頼めるかな？」

「いいよ。どうせ暇だしね」

「ありがとう。じゃあ、そのエプロンを着けて早速お願いね」

「了解」

返事をしたところで俺はまだ朝食を食べてないことを思い出した。

「あ、姉さん。店のチーズケーキ1つ食べていい？まだ、朝食を食べないんだ」

「うん。しょうがないな。1つだけだよ？」

姉さんは少し悩んだあと許可をくれた。

「よっしゃ！いただきます！」

俺が食べようとするのとロリアが近づいてきて一言。

「ずるいー！」

「は？」

俺が困っていると姉さんが助けしてくれる。

「ロリアはさっききたべたでしょ？昨日もおやつと夕食の後にたべたし」

「はーい…」

マジかよ！そんなに食ってたのか。羨ましい。
つうかそんなに食ったら太るだろ…

「太るぞ、ロリア」

俺は一人でチーズケーキを食べまくったロリアに容赦ない言葉をかけた。

「うえ！？いや、大丈夫だもん！チーズケーキは別腹だし！」

「別腹は関係ないよ」

攻める。

「つう……あ！私、太らない体質だよ！！」

「現実逃避か？前、太ったって嘆いてただろ？」

さらに攻める。

「もう！彼女に優しい言葉をかける気はないの！？」

「彼女だろうが俺が寝てる間にチーズケーキを食べまくる奴にける言葉はない！！」

言い切ってやった。

「うう〜…………お姉ちゃん…」

もう返す言葉が思い付かないのか姉さんに助けを求めようとする。

…………が、反応がない。
どうしたんだ？

ロリアも不思議そうな顔をしている。

その時、姉さんが今まで聞いたことのないほど低い声を発した。

「…彼女？」

これは…………ヤバイ！

姉さんの後ろに真っ黒なオーラが見える気がする。
なのに…

「そうだよ！私と来夢は恋人だよ。昨日も一緒に寝たし」

ロリアは平気な顔で言った。

あいつは空気を読めないのか！？

絶対に否定した方が良かっただろ！

てか、一緒に寝たとか俺知らねえし！

「へ〜…一昨日お話ししたとき、隠してたこと全部って言ったよね？なんでその時教えてくれなかったのかな？……………」

「いや、べつに隠してた訳じゃ…」

「あの時間かせてくれなかったんだから同じだよ…」

ヤバイ！

姉さんの目がヤバイ！！

どうにかごまかさないと…………

俺が考えていると、店のドアが開き客が入って来た。

カラン カラ〜ン

「いらっしやいませ〜」

俺は挨拶しながら姉さんに念話を送る。

『客が来たから話しはあとでね』

ふう…これで一先ず生き延びられた。

『しょうがないね。じゃあ、夜は時間もあるしゆっくりお話ししようか』

え？

『もしも逃げたりしたらあることないこと、主にないことをフェイトちゃんに教えちゃうよ』

マジかよ!?

それはダメだよ!!!

せっかく親しくなったのに! 「姉さんって呼んで」っていわれたのに!

嫌われちゃうよ!

そして俺はなのは姉さんによる「お話し」と言う名の死刑が執行されるまで何度も時計を確認し終始ビクビクしながら接客を続けた。

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t a

第4話 騒がしい時間（後書き）

日常の風景を描くのは難しいです。

俺は戦闘シーンの方がうまくできそうだな。

わからないけど……

次回は来夢がヒズメ式の説明をする話しになると思います。

では、また

第5話 ヒズメ式（前編）（前書き）

少し遅くなりました。

第5話です。

第5話 ヒズメ式（前編）

あの日

俺とロリアがなのは姉さんと「お話し」をしたあの日から5日があった。

あの日の「お話し」は今までで一番凄まじかった。
マジでトラウマになった……

でも、なんとか許してもらえた。

ただし、ロリアを泣かせたら俺はスターライトブレイカーと言うすごい魔法でドーーーーーン！！らしい……（なんで俺ばかり……）

まあ、その話はどうでもいい。

今日はフェイト姉さんとはやてさんが家に来てる。

来てる理由は俺からヒズメ式について聞くため。

俺とロリアは明日、108部隊に戻らなくてはならない。

特別休暇が終わるのだ。

だから、その前に話を聞きたいらしい。

俺達は今店のテーブルに座ってケーキと紅茶を食べている。（翠屋は休みだ）

「じゃあ、お願い」

「はいよ」

俺は一旦紅茶を飲む手を止め話し始める。

「うーん、じゃあヒズメ式の発祥から話すね」

「「「はい」」」

なんかみんな緊張してるな。

「まず、ヒズメ式を作ったのは蹄家7代目当主の蹄来蔵^{ひづめ だいらん}。」

来蔵はその頃日本に入ってきた鉄砲を使った闘い方を主体にした魔法形式を開発しようとした。

それがヒズメ式だ」

俺は紅茶を一口飲む。

「その頃はまだ技術があまり発展してなかったからデバイスは杖型しかなかったらしい。

つまり、まずは銃型のデバイスを作る必要があった。

しかし、来蔵はデバイスを作る技術をしらなかった。その時も代々受け継がれていた古い杖型デバイスを使っていたらしいしね。

来蔵はデバイス作りに挑戦したが案の定失敗に終わった。

何度やってもダメで先代が遺したデバイスのパーツもなくなり来蔵は完全に諦めていた」

「来蔵、質問いいかな？」

フエイト姉さんが遠慮がちに聞いてきた。

「うーん」

「うん。」

えっと、来蔵は異世界の存在を知らなかったの？異世界に行ってパ
ーツをそろえれば良かったんじゃない？」

「たしかに」

フェイト姉さんの疑問になのは姉さんも納得している

「来蔵は異世界の存在はちゃんと知ってたよ。でも、来蔵は補助魔
法がほとんど使えなかったらしいんだ。だから諦めた。」

「なるほど……」

「ほかに質問は？」

……返事はない。

「ないなら続きを話すね。」

来蔵は完全に諦めて毎日普通に生活していた。

ある日の夜、そんな来蔵の前に突然魔法陣が展開され、女の人
が現れた。

それがロリアの先祖であるカレン・フォルティス」

「へー、ロリアちゃんってフォルティスっていうんか？」

「そうだったんだ」

「私も知らなかったよ」

あれ？3人共初めて聞いたような発言をしている。

「ロリア！もしかして自己紹介してないのか？」

「あ、忘れてたよ」

そうだったのか…

後でちゃんとさせよう。

「まあ、ロリアの紹介は後ですから、今は話しを続けるね」

「え〜、自己紹介めんどくさいよ〜。いいじゃんやらなくて」

ロリアが抗議してくるがスルー

「えーと、どこまで話したっけ？」

「カレンさんが転移してきたとこだよ」

なのは姉さんが教えてくれる。

「ありがとう。」

カレンはイタリア人だということ。

魔法が使えるということ。

次元犯罪者に襲われて魔法を使い逃げてきたことなどを来蔵に教えた。

そして、自分はその次元犯罪者に追われているから助けて欲しいと頼んだ。

来蔵は二つ返事で了承した。自分の魔法で人を助けられることが嬉しかったから…

そして、来蔵もヒズメ式を開発しようとしていること。

それには銃型デバイスが必要なことを話した。
カレンはその話しを聞き助けてくれるお礼に協力すると申し出た。
自分のレアスキルがあればヒズメ式は完成するといいい……」

はあゝ疲れた。

俺は冷めた紅茶を飲み干す。

「疲れたから続きは少し休んでから話すよ」

「『え〜』」

抗議の嵐！

「たのむよ。こんなに長く喋ったことないんだ」

「しょうがない。1時間だけ待ってあげるよ」

「ありがとう、みんな」

俺はお礼をいい部屋に戻る。

ロリアは姉さん達と話してるし、1時間だけ寝るか。

俺はロリアに1時間後に起こしてくれと頼むとベットに潜り込んだ。

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t a

第5話 ヒズメ式（前編）（後書き）

だらだらした説明になってしまいました……
これと同じ様なのがもう1話続きます。

では、また

第6話 ヒズメ式（後編）（前書き）

お待たせしました。

今回もダラダラと説明です。

では、ごうござ

第6話 ヒズメ式（後編）

俺はきつかり1時間後にロリアに起こされた。

眠気ざましに熱い紅茶を1杯飲んでからまた話し始める。

「えーと、カレンのレアスキルのおかげでヒズメ式はすぐに完成した」

「ねえねえ、そのレアスキルってどんなものなの？」

なのは姉さんがみんなを代表して聞いてきた。

「ああ、カレンのというよりはフォルティス家のレアスキルという方が正確かな？」

「そうだね」

ロリアが俺に同意する。

「そんなのいいからどんなスキルなのか早く教えてよ」

フェイト姉さんが急かす。

「はいはい。そのレアスキルは《コンパニニョアルマ戦友》コンパニニョアルマ》コンパニニョアルマ》と行って契約した相手からリンカーコアに魔力を流してもらったことによって自分の体をデバイスに変えることができるスキルなんだ」

「『えっ!?!』」

みんな驚いている。

「まあ、実際に見た方がわかりやすいかな？」

俺はそう言いロリアとキスをした。

「「「ちよっ!?!?」「」」

いちいちうるさいな。

「んっ…」

ロリアが小さく声をあげる。

その瞬間ロリアの体が光り出す。

光りが収まった時、俺の手には1つの拳銃型デバイスがおさまっていた。

「どう?これがフォルティス家に代々受け継がれるレアスキル《コンパンニョアルマ》だよ」

「え?ってことはその拳銃がロリアちゃんなんか?」

「そっだよ。ロリア、ちよっと喋ってみて」

《もう来夢ってば強引。いきなりみんなの前でキスするなんて》

「この通りロリアです」

《ひどっ！！スルーなの？私の言ったことスルーなの！？》

「はあ〜」

みんなポカンとしてる。

「どうしたの？姉さん達」

「まさか人間がデバイスになるなんて思わなかったからびっくりしちゃって…」

「ふ〜ん」

「ねえ、来夢？」

フェイト姉さんがショックから復活し、話し掛けてきた。

「何？フェイト姉さん」

「私がロリアに魔力を流してもロリアはデバイスになれないの？」

「うん。契約者である俺の魔力にだけ反応するからね」

「へ〜」

フェイト姉さんは納得したようでまた紅茶を飲み始めた。

「続きを話して良いかな？」

「はい」

「いいで」

「じゃあ、話すね。もうすぐ夕食の時間だからおおまかに話すよ。あ、ロリアは戻っていいよ」

《は〜い》

ロリアは返事をして人間に戻った。

「カレンと来蔵がヒズメ式を完成させた2週間後にカレンを襲った次元犯罪者が襲ってきた。

結果は来蔵達の圧勝だった。それほどヒズメ式は強力だったんだ」

「へ〜、ヒズメ式ってそんなに強いんだ。ねえ、来夢？今度、模擬戦しない」

フェイト姉さんが提案してくる。

「うん。また今度ね」

俺はそう言っただけで紅茶を飲もうとしたが、いつのまにかカップが空になっていたので諦めてまた話し始めた。

「次元犯罪者を倒してからもカレンと来蔵は一緒に暮らした。

そして、カレンはだんだんと来蔵に惹かれていったんだ。

ある日カレンは自分の想いを来蔵に告げた。

しかし、来蔵はその想いに応えなかった。

その後カレンはイタリアに戻った。

これで2人の話は終わり」

「「「……………」」」

誰も言葉を発しない。

「質問は？」

俺が聞くとはやてさんが質問してきた。

「なんで来蔵はカレンの想いに応えなかったんや？」

「さあ？それは俺にも分からない」

みんなが残念そうな顔をする。どうやらみんなそのことが気になっていたらしい。

「他には？ないならヒズメ式のことを詳しく説明するけど」

「うん。いいよ」

「まず、ロリアは人間だけどヒズメ式ではデバイスなんだ。まあ、来蔵が勝手に考えただけなんだけど…
だから管理局に提出した書類でも俺のデバイス扱いなんだ」

「え…人間なのに……」

フエイト姉さんが泣きそうな顔をする。

「私はなんとも思ってないよ。デバイス扱いならずと来夢と一緒にいられるしね！

それに書類上でデバイス扱いなだけで周りの人は普通に接してくれ

るよ」

「そっか…そうだよな」

なんか話しが変な方向に……

「そんなのいいから話し続けるよ」

「そんなのなんてヒド〜イ」

スルー

「次はヒズメ式と他の魔法術式との違いを説明するね」

「またスルーなの〜！？構ってよ〜」

…スルー

「細かい違いは沢山あるけど主な違い魔法陣とカートリッジかな？」

「うう…来夢が無視するよ〜……………」

……スルー

「ミッド式やベルカ式は術式によって魔法陣の形が決まってるけど、ヒズメ式は個人によって魔法陣の形が違うんだ。

例えば、俺の魔法陣は二重円の中に四角形を二つ組み合わせた八角形があつてその中に更に円があるけど記録によると来蔵の魔法陣はベルカ式とほとんど同じだったらしい」

「……………（くるくる）」

……スルー

できない……

「悪かった。」

俺はロリアの頭を撫でる。

「ふふっ」

ロリアは機嫌を直して俺に寄り掛かってくる。

俺はロリアの頭を撫でながら話しを続ける。

「次はカートリッジについてだね。」

ベル方式カートリッジが一時的に魔力を増大させるという補助的な効果なのに対してヒズメ式カートリッジはカートリッジ自体を弾丸として撃つんだ」

「へ」

「それからヒズメ式カートリッジは魔力を吸収して中に溜めておく性質がある特殊な鉱石を蹄家9代目当主の来斬らいざんが考案した特別な加工方法で作った金属でできてるんだ」

「そのカートリッジ見せてくれない？」

またフェイト姉さんだ。

こっゆうの好きなのかな？

「いいよ。ロリア、もう一度【コンパンニョアルマ】を使っよ」

「りよ〜かい」

俺達は再び唇を重ねる。

そして、拳銃になったロリアからカートリッジを取り出す。

「これが、ヒズメ式カートリッジだよ」

「へ〜、本物の銃の弾そっくり」

「じゃあ、ちよつと撃ってみるね。誰か結界魔法使える人いる？」

いないようだ。

「いないみたいだから任せたよロリア」

「うん」

銃口の前に魔法陣が出現し、そこを中心に紺色の結界が広がっていく。そして、その結界は翠屋を包み込んだ。

「なのは姉さんは戦技教導官なんでしょ？ターゲットとか出せるかな？」

「うん。できるよ」

なのは姉さんが桃色のターゲットを出してくれた。

「よし！みんなちよつと下がって」

俺はみんなが離れたのを確認するとターゲットを狙って

パンツ！！！

撃った。

「「「おお……」「」」

「ロリア、戻っていいよ」

ロリアが人に戻る。

「こんな感じ。以上でヒズメ式の説明は終了！
はあ、やっと終わった」

「じゃあ、夕食にしようか。フェイトちゃんとはやてちゃんも食べていきなよ」

「うん」

「いや、うちはリイン達がいるし、今日は遠慮しとく」

「ならしょうがないね」

「うん。来夢君とロリアちゃんの出会いの話とか聞きたかったんやけど」

「ああ、それなら姉さん達がミッドに戻ってきた時にでも話すよ」

「了解や。またね、みんな」

そう言うってはやてさんは帰って行った。

その日の夕食もすごくおいしかった。

フェイト姉さんは帰ってしまい、なのは姉さんは風呂に入っていて、ロリアはもう寝てしまったので、今俺は準備をしている。
明日ミッドにいく準備。

準備も終わったし、そろそろ寝ようかと思いきや電気を消す。

その時、俺の前に薄紫色の魔法陣が現れた。

なんだ！？これはミッド式？……いや、これはヒズメ式だ。

なんでヒズメ式の魔法陣が？今、ヒズメ式を使えるのは俺だけのはずなのに。

そんなことよりこれは転移魔法だ。

俺は念のため構える。

魔法陣が強く光る。

来るっ！！

来なかった…

そこに現れたのは俺と同じ歳くらいで全身傷だらけの女の子だった。

「おい！！大丈夫か！？」

俺は駆け寄って声をかける。
すると、女の子が言葉を発した。

「……………やっと……やっと会えた……………お兄ちゃん……………」

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t a

第6話 ヒズメ式（後編）（後書き）

どうだったでしょうか？

今回でほのぼのした話は終わりです。

では、また

第7話 蹄来夏（前書き）

遅くなりました。

1週間もかけたのに今までで1番の駄作かもしれません……………

では、第7話どうぞ

第7話 蹄来夏

俺は今悩んでいる。

原因は昨日の夜、俺の前に突然転移してきた女の子だ。

「うーん、どうしよう…」

俺はリビングで1人呟く。女の子は今俺の部屋でロリアが治療している。

『来夢、ちょっと来て』

悩んでるとロリアが念話で俺を呼ぶ。

『了解』

返事をして部屋に向かう。

「どうしたんだロリア」

「ちょっと、この子のことです…」

ロリアはいつになく真剣な表情だ。

「なにかあったの？」

「うん。実は治療した時にこの子の体を少し調べたの」

「ちょっと!? 何やってんだよ。全く知らない子だぞ？」

「ううん。違う。知らない子じゃないよ」

「え？」

そういえば、転移して来た時お兄ちゃんとか言ってたような…
お兄ちゃん？

「まさか……」

「そう、たぶん来夢が考えてることは正解だよ。
この子の左胸にも来夢と同じヒズメ式を習得すると浮かび上がるヒズメの紋章がある」

「ってことは、その子はほんとに俺の妹……」

「うん。来夢の妹、来夏ちゃんだよ」

- 来夏 side -

またあの時の夢を見た。私の目の前でお父さんが殺された時の夢…

……
私はどうしたんだっけ？

確か追われてる途中で転移して……

「あっ！」

そうだ。お兄ちゃんを見つけたんだ。

やっつ……

「うっ……」

起き上がろうとするけど体が重くて起き上がれない。
はやくお兄ちゃんに教えなきゃ！
でも起き上がれない。

その時部屋のドアが開いた。

- s i d e o u t -

俺達が部屋に戻ると来夏は起きていた。

「よお、来夏。体の調子はどうだ？」

「お兄ちゃん！……」

「うおっ！？どうしたんだ？大声出して」

「はやく助けにいかなきゃ！……」

「どうしたんだよ。落ち着けよ」

「お母さんが！……」

相当、錯乱しているようだ。

「ロリア」

「わかった」

ロリアが来夏の額に手を当てると少しずつ来夏は落ち着いてきた。さすがロリア。補助魔法は最強だな。

「落ち着いたか？」

俺は来夏に聞く。

「うん。」「めんなさい……」

「いいよ。で、何があったんだ？そんなに傷だらけで」

「うん。えと、話しの前に確認したいんだけどお兄ちゃんの記憶は戻ってるよね？」

「ああ。戻ってる」

俺は13歳まで記憶が封印されていた。親父（本当の）の手によって。

来夏はそのことを言っているのだ。

「じゃあ、話すね。私が13歳の時に私達は捕まったの」

「は？誰に」

「《プロジェクト》って組織よ」

「私その組織知ってる！禁術の開発とか人体実験ばっかやってる組

織でしょ？」

おお、まさかロリアが知ってるとは…

「えと、そちらの方は？」

そういえばロリアのことを紹介してなかったな。

「こいつは、ロリア・フォルティス。俺のヒズメ式デバイスであり恋人だ」

「ああ、あなたが…」

ん？

「ロリアの事知ってるの？」

「少しね。お父さんに聞いたんだ…」

来夏の顔が暗くなる。

どうしたんだろう？

「まあ、いいや。続きを話してくれる？」

「うん…捕まった私達は実験や拷問を繰り返された」

「逃げようとはしなかったのか？親父はヒズメ式は使えなかったけどミッド式は結構強かっただろ？たしか」

「魔力がないお母さんを人質にとられたの…」

「なに!？」

「目的のためなら手段を選ばないって聞いたよ」

ロリアが教えてくれる。

「なんでそんな奴らを管理局はほっとくんだ!」

「それは分からない」

くそっ!

後でフェイト姉さんあたりに聞こう。

「続きを…」

「うん。捕まってから1年ぐらいたった時、実験中の事故で火災が起こったんだ。私達はその混乱にじょうじて逃げようとした。でもダメだった…」

「なんでだ?」

「お母さんを助け出すのは簡単だった。見張りも全員消火活動に参加してたから。」

だから、入口の警備も薄いと思った。でもその考えは甘かった……」

「警備が薄くなかったのか?」

「うん。むしろ、普段より人数が多かった」

「考えは読まれてたってことか」

「多分ね」

「それでどうしたんだ？」

「戦った」

「なんでだよ。諦めるべきだっただろ！」

「普段より多いといっても私とお父さんでなんとかなる人数だったから」

「でもっ！！」

「お兄ちゃん知らないから！実験がどんなに酷いものだったか……何度死にたいと思ったか……だから……だから！戦わなきゃならなかった！何も知らないのにそんな事言わないでよ！！！」

「っ……ごめん……」

「あ、いや……えと……こっちこそごめんなさい。興奮しちゃって」

「いや、それよりも続きを」

「うん……ミッド式のお父さんが接近戦、ヒズメ式の私が後ろから援護射撃という作戦をとったの」

「良い作戦だと思うぞ」

俺は素直にそう思った。

「うん、私が提案したの。射撃には自信があったから……でも、失敗した」

「ダメだったのか……」

「絶対にできると思った。でも、いざ撃とうとしたら体が震えた。もし逃げられなかったらずっとこのままなんだと思ったら怖くなった。でも、そんな考えを振り切って私は撃った。それが戦っているお父さんの足にあたった」

「え？」

「お父さんは一瞬動きが止まった。その隙を相手は見逃さなかった。私達はまた捕まってしまった」

「なるほど。話はわかった。来夏が回復したらすぐに父さんと母さんを助けに行こう！」

俺はどうか休暇を延ばしてもらおうと通信を開く。

「違うの……」

「ん？」

「まだ、話は終わってないの……」

「あ、そうだったのか。わるい」

「私達がまた捕まった後、お父さんは殺された……」

「へ？」

「お父さんは私の目の前で殺された。」

みせしめだつて……次こんなことしたら今度は母親がこつなるぞつて

……」

「つつ！？」

「私が失敗したから……」

私のせいでお父さんは……うっ……ひぐっ……」

来夏はついに泣き出してしまった。

「……………」

俺はなんて声をかければいいのかわからなかった。

「大丈夫だよ。来夏ちゃんは悪くない。私と来夢が絶対にお母さんを助け出すから。だから安心して」

俺は信じられなかった。

ロリアが来夏を慰めている。

「うっ……う、うわあああん！うっ、うっ……」

来夏はロリアに抱き着いて泣いた。

この一週間でロリアも成長したな。

来夏をロリアに任せて俺はそつと部屋をでた。

再び俺の部屋。

今この部屋には俺とロリア、来夏、そしてなのは姉さんがいる。

今はロリアとなのは姉さんの紹介とレアスキルの説明が終わったところ。

「これで説明は終わり」

「なるほど。ところでなんで《コンパンニョアルマ》を使う時にキスするの？リンカーコアに魔力を流すだけなら手を繋ぐだけでも出来るでしょ？」

来夏からの鋭い指摘。

「そうなの！？」

なのは姉さんは知らなかったようだ。

「うん。まあ、そうなんだけどキスするのが一番はやくリンカーコアに魔力が伝わるんだ」

「へー、そうなんだ」

来夏は俺の言葉を素直に信じてしまった……

「今のは嘘だ。キスはただのノリ。普段は軽くハイタッチするだけだよ」

「そーなの？お兄ちゃんの嘘つき！」

……………なんだこの初めての感覚は。

妹に嘘つきって言われただけなのにすごいショックだ……………

俺が1人でショックを受けているとフェイト姉さんが部屋に入ってきた。

「遅くなってごめんね」

「いや、こっちこそごめん。調べて貰っちゃって」

俺はフェイト姉さんに《プロジェクト》について調べてもらったのだ。

「ううん。弟の為だもん」

フェイト姉さんは笑顔でそう言ってくれる。

やっぱ照れるな。弟って…………

「じゃあ、早速話すね」

「あ、ちょっとまって。話を聞く前に来夏に自己紹介してもらおうか」
「う」

「あ、そうなの？」

「うん。じゃあ、来夏よろしく」

「了解。」

初めまして。蹄来夏ひすめらいかです。兄がいつもお世話になってます。年齢は15歳。魔法術式はヒズメ式。デバイスは持っていません」

「来夢の妹なら私の妹でもあるってことだね」

「そうだね」

なのは姉さんの言葉にフエイト姉さんも同意する。それを聞いて来夏は照れていた。

「好きに呼んでいいからね。あと敬語もいらないよ」

「じゃあ、お姉ちゃんで……………」

来夏は恥ずかしそうに呟く。

「うん！」

姉さん達はとても嬉しそうだ。

「フエイト姉さん、調べてくれた事を聞かせて」

「うん」

フエイト姉さんの顔が真剣になる。執務官の顔だ。

そして、一度大きく息を吸い話し始めた。

C
O
N
T
I
N
U
A

A
L
I
A

P
R
O
S
S
I
M
A

V
O
L
I
T

第7話 蹄来夏（後書き）

はあ…なんでこうなっちゃったんだろう……

少しシリアス気味にしようと思ったのに見事に失敗しました……

どうやらシリアスもダメなようです……

ここでお知らせを、

次話からは定期更新にしようと思います。

毎週、水曜日と土曜日に更新します。

という訳で次回は5月26日に更新します。

では、また

第8話 準備？（前書き）

ふう、なんとか予定通りに更新出来ました。
かなりギリギリだけど…

まあ、ともかくどうぞ

第8話 準備？

「プロジェクトは管理局で指名手配中の組織なんだ。私も何度か捜査に関わったことがある」

「なんで今だに捕まってるないんだ？」

管理局ならすぐに捕まえられるはずだ。

「それがね、反応があつた場所に行くともういないんだよ」

「「「「え？」「」「」」

みんな訳がわからないという顔だ。

「どうゆう事なの？フェイトちゃん」

「そのまんまの意味だよ。その場所にいた形跡はあるのに着いた時には既にいないんだ」

「たまたま……じゃないんだよね？」

ロリアが聞く。

「うん。1回や2回じゃない。毎回なんだよ」

どうゆう事なんだ？

管理局相手にそんな事ができるとは思えない。

「それともう1つ。プロジェクトの構成員のほとんどが元管理局の
研究員なんだ」

「マジかよ!？」

「信じられないと思うけど本当なんだ」

何故なんだ?信じられない事ばっかだ。

「そんな奴らからどうやって母さんを助け出せば……」

「そのことは大丈夫だよ」

「え?大丈夫って…?」

俺はフェイト姉さんの言葉に首をかしげる。

「プロジェクトは指名手配中だって言ったでしょ?だから常に捜査
対象なんだ」

へ?わけがわからん。

「だから何?」

「来夢を捜査に参加させる」

「……ええええー!?!」「」「」

話を聞いていた全員が驚いた。
心の底から。

「そんな事できるの!?!」

来夏が食いつく。

「うん。ちょうど人員不足だしね。割と簡単にいくと思っよ」

「なるほど。ありがとう!姉さん!」

「うん!役に立てて嬉しいよ」

よし!早速準備をしよう

「来夏、体の具合はどうだ?」

「うん、まだちょっときついな」

「そうか。じゃあ、俺ちよっとミッドに戻るよ」

「え?なんで?」

「俺、今日部隊に戻らなきゃいけないんだよ」

「そうなんだ...」

来夏が少し寂しそうな顔をする。

うつ...!そんな顔しないでくれ!!
罪悪感が.....

「来夢はいつ帰ってくるの?」

俺が罪悪感と闘っているのとフェイト姉さんが聞いてきた。

「うーん？明々後日には帰ってこれると思うけど……どっして？」

「明日、来夢が捜査に参加できるようにお願いしてくるからさ、明後日一緒に挨拶しに行こう」

「ああ、そうか。わかった。待ち合わせとかはどうするの？」

「私が迎えに行くよ。108部隊だよな？」

「うん」

そろそろ行くか。

「ロリアとなのは姉さん、来夏の世話よろしく」

「任せて！」

「気をつけてね」

「ロリア、転移魔法を頼めるか？この前みんなに見せたのが最後だったんだよね。カートリッジ」

「了解。じゃあ、やるよ？」

「おう。じゃあ、行ってきます！……」

「……………」

みんなに見送られながら、俺は紺色の光に包まれ転移した。

俺は今、隊舎の前にいる。

「ふう、久しぶりだな」

俺は3年程旅をしていたので3年ぶりだ。

まずは部隊長に挨拶しに行くか。

迷った……

部隊長室は何処だ!?

誰かに聞くか。

その時

「あれ？来夢君？」

声をかけられた。

ん？この声は

「ギンガ!!!」

「やっぱり来夢君か。久しぶり」

「おう。久しぶり」

俺とギンガは同じ年ということもあり結構仲が良い。

「ところで、さっきから何してるの？キョロキョロしてるけど」

「うつ……えと……迷いました……」

自分の部隊の隊舎で迷うとか恥ずかし過ぎる……

「あつ、そうなんだ。お父さんの所に行くんでしょ？ついてきて」

「ありがとう」

そして、俺はギンガについて歩き出した。

「そういえば、ロリアは？」

ロリアも大の仲良しだ。

「ロリアは家に置いてきた」

「そうなんだ…会いたかったな」

「また今度な」

俺達が話していると部隊長室に着いた。

コンコン

「失礼します」

俺はノックをしてからドアをあける。

「おう、来夢。久しぶりだな」

「お久しぶりです。部隊長」

「まあ、座れよ」

俺は座る。

「どうだったんだ？妹は見つかったか？」

「はい。」

で、そのことに関連してお話があります」

「なんだ？もう休暇はとれねえぞ」

「違いますよ。部隊長はプロジェクトという組織を知っていますか？」

まあ、知ってるだろ。

「おう、あの指名手配中の組織だろ？」

「そうです。その組織にですね、俺の母親が捕まっているらしいんです」

「なんだって！？それは本当か？」

「はい。それで、プロジェクトの捜査に参加したいんです。いいでしょうか？」

「なるほど。別にこっちは大丈夫だが、参加できるのか？」

「はい。部隊長の許可さえもらえれば」

「わかった。許可しよう」

「ありがとうございます！！」

「でも、どうやって捜査官でもないおまえが捜査に参加するんだ？」

「そういえば……」

「俺、捜査官じゃないしな……」

「どうするんだろ……」

話も終わりギンガと一緒に俺の部屋に向かっている。

何故、ギンガと一緒にと言うと部屋の場所を忘れたからだ……

「そういえば、スバルは元気？」

ギンガの妹であるスバルとは何回か会ったことがある。

「ええ。とっても元気よ」

「そっか」

お、着いた。

「ありがとう、ギンガ」

「どういたしまして。そういえば、来夢君はいつまでこっちにいるの？」

「とりあえず、明々後日には一度戻るよ」

「そうなんだ。じゃあ、また明日ね。おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

ギンガと別れて部屋に入る。

「はあく、疲れた……」

俺はそう呟いてベッドにダイブする。

それから、プロジェクトの事を考えようとしたがその前に瞼が完全にくっついた。

まさか……

まさかこんなことになるなんて……
起きたら11時なんて……

「来夢君？起きてる？」

どうやらギンガが起こしに来たようだ。

「今、起きた」

昨日からギンガの世話になってばっかだな。
と思いながら返事をする。

「中に入っても良い？」

「いいけど」

俺はドアを開ける。

「どござ」

「お邪魔します」

俺とギンガはテーブルを挟んで向かい合わせで座る。

「何か用？」

「お父さんに報告するから今後の予定を聞こうと思って」

「ああ。えーと、今日はノアさんの所に行くよ。それで、明日は本
局。で、明後日の夕方に帰るよ」

「わかった。お父さんに言っておくね」

「おっ。よろしくな」

ギンガが戻ったのでまた1人になった。

もう昼だし昼飯食って出かけるか。

そう思い俺は食堂に向かった。

今日はカレーを食べた。
うまかった。

- フェイトside -

「失礼します」

「あら、久しぶりね。ハラオウン執務官」

「お久しぶりです。トレック執務官」

「今日は何の用？」

「はい。今日はお願いがあって来ました」

お願いとはもちろん来夢の事だ。

「お願い？何かしら？」

「プロジェクトの捜査に陸の隊員を1人参加させてもらえないでしょうか。捜査官ではないんですけど……」

「捜査官じゃないのに？何故？」

「その隊員の母親がプロジェクトに捕まっているらしくて…血縁関係はありませんが一応私の弟なので信用はできます」

「そうなの…わかったわ。話は通しておきましょう」

「ありがとうございます！」

よかった！

「明日、弟を連れて来ます」

「ええ、待ってるわ」

「では、失礼します」

ふう、緊張した…
でも、よかった！

- フェイトside out -

俺は今、レールウェイに乗って移動中だ。

俺が管理局に入ってからずっと俺のデバイスを整備してくれている
ノア・コースターさんの所に行く為に。

はあ……すげー眠い……

着くまで寝ようかな。

そう思い、座席に座ろうとしたところで俺は気付いた。

そういえば、ロリアいないんだった。

1人で起きる自信ないな…

で、結局着くまで立ってることにした。

「はあ、やっと着いた……」

俺の目の前には明らかに研究所です。というような建物がある。

眠いしはやく受け取って帰ろう。

俺が今日ここに来た理由は俺のデバイス『チエスター』を受け取る為だ。

3年間ずっと修理していたのがやっと直ったらしい。

「こんにちはー！」

……返事がない。

研究室か？

「ノアさん！」

いた。

何か作業をしているようだ。

終わるまで待つてるか。

音がやんだ。

「お久しぶりです、ノアさん」

「おお！久しぶりじゃないか、来夢君！また会えておねーさんはうれしいぞ」

この自分のことをおねーさんと言っているのが俺のデバイスの整備をしてきているノア・コースターさんだ。

「今日もまた派手なドレスですね…」

ノアさんはドレスを着ている。

別に今日に限ったことではなくいつもだ。

しかも、作業中もドレス。

きっと、ドレスを着て作業する人なんてこの人ぐらいだろう。

「ありがとう」

いや、褒めてねえし。

「で、今日は何の用だ？」

「もちろん、チェスターを取りに来たんですよ」

「そうか、そうか。今回も会心の出来だ」

「そうですね」

「ああ、壊れる前とまったく同じだ。記憶もな。それから、前に君が言っていた機能も付けておいたぞ」

「ほんとですか！？ありがとうございます！」

前に俺が言っていた機能とは他のデバイスとリンクする機能の事だ。

「チェスターはどこです？」

「ん？そこらへんにあるだろう？」

ちよっ！？

「俺の大事なデバイスですよ！？」

「私のじゃないし」

くそっ！

どこだ、チェスター。

俺は捜しまわる。

「あっ、チェスター」

見つけた。

ゴミに埋もれてたけど…

《お久しぶりです。主》

「おう。久しぶり、チェスター」

「見つかったかー？」

遠くからノアさんの声が聞こえる。

「見つかりましたー！」

俺は返事をして、ノアさんの所に戻る。

「チェスターの事で説明しておきたいこともある。お茶にしよう」

「はい」

俺達は小さなテーブルでお茶を飲む。

「で、説明しておきたい事ってなんですか？」

「うむ。まず、リンクの事だが今の所はロリアとしかリンクできない。他のデバイスとリンクしようとするとぶっ壊れるから」

「そうなんですか」

「あと、ロリアの形態に合わせてチェスターの形態も自動で変化するようにした」

「それは、助かります」

ノアさんはお茶を飲み干し2杯を入れている。

「他には？」

「ない」

「は？」

「ないってどうゆづ」

「そのままの意味だ。説明してきたかった事はそれだけだ」

「たった2つじゃん!？」

「もっとあると思ってたのに！」

「文句があるのか？」

「いえ、ないです……」

「目がこえー！」

「そうか、なら世間話でもしようじゃないか」

「はあ………」

世間話は夜まで続いた。

そして、いつのまにか俺は泊まっていくなことになっていた……

「おやすみ、来夢君」

「おやすみなさい」

俺が使う部屋の前で別れようとする。

「あつ、そつだ。明日、起こしてもらえませんか？」

「？何か、用事でもあるのか？」

「ええ、まあ」

「まあ、いいだろう。おねーさんに任せておけ。9時ぐらいでいいか？」

「はい。お願いします」

「じゃあ、また明日」

ノアさんは自分の部屋に戻って行った。

俺は部屋に入ってからギンガに連絡をとり、泊まっっていく事を伝えた。

そしたら、そうゆう事はもっとはやく言えと怒られた。

それから、10分ほどギンガに怒られ、そのお説教が終わった瞬間、俺は深い眠りに落ちて行った。

C
o
n
t
i
n
u
a

a
l
l
a

p
r
o
s
s
i
m
a

v
o
l
t

第8話 準備？（後書き）

サブタイトルが思いつきませんでした。
だから、今回のタイトルは適当。

登場人物の名前考えるのも大変。
だから、適当。

では、次の更新は5月29日です。

第9話 捜査の為に（前書き）

ごめんなさい。

更新が4分遅れました…

そして、凄まじく短いです。

では、さようなら………

第9話 捜査の為に

俺は今、时空管理局本局近くの駅でフェイト姉さんを待っている。

遅いなあ……

待ち合わせ時間から20分はたってる。

南口じゃなくて北口だったか？

そう思って北口に行こうとした時、黒い車が俺の前で止まった。

うわっ！？なんだこの車。超こえー！！あっ！窓開く！！

絶対関わらない方がいいな。

俺がそう思いそこから立ち去ろうとした時

- フェイト side -

ふう、やっと着いた。

道路が渋滞していて20分も遅れてしまった。

来夢は………いた！

来夢を見つけて車で近付く。

声をかけるため、窓を開けようとすると来夢が驚いた顔をして後退りしている。

えっ？何で？ちょっと！私だよ！？

「来夢！！」

急いで窓を開け声をかけた。

- フェイトside out -

「来夢！！」

俺が逃げようと後ろに下がると車の窓が開き声をかけられる。

「フェイト姉さん！？」

車から顔を出したのは待ち合わせ相手であるフェイト姉さんだった。

「その車、フェイト姉さんだったの！？」

「そうだよ。なのに来夢ったら逃げ出そうとするんだもん……」

フェイト姉さんが悲しそうに呟く。

「だって、真っ黒だし…窓も曇りガラスみたいになってるし……」

マジで怖かった……

「そうなんだ……」

いや、ちょっとショック受けすぎだろ。

「あ、でもよく見るとカッコイイね」

「そうでしょ！ー！きっと来夢は分かってくれて信じてたよ！ー！
信じてたって……そんなにか……」

「うん……まあ、はやく行こつよ」

「そうだね！ー！」

自分の車を褒められたのが嬉しかったのかフェイト姉さんのテンションが上がった。

「じゃあ、乗って！ー！」

「うん……」

俺は車に乗り込む。

「どれくらいかかるかな？」

「ここからだともう5分ぐらいかな」

お、フェイト姉さんのテンションが戻った。

「来夢はどこかに行ってたの？」

フェイト姉さんがそういえば、と聞いてくる。

「俺のデバイスの整備をしてくれてる人のところに行ってたんだ」

「来夢のデバイス？」

「うん」

俺は右手の中指につけてある指輪を見せる。

「へ〜、これが来夢のデバイスなんだ」

「名前はチエスター」

『はじめまして。フェイトお嬢様』

「お嬢様!？」

「そうゆう性格なんだ」

そういえば、ロリアもお嬢様って言われて驚いてたな。

ロリアは「お嬢様はヤダ!」って言って、呼び捨てにさせてたけど。

「フェイト姉さんはお嬢様でいいの?」

「うん! いいよお嬢様」

あれ? 嬉しそうだな。

フェイト姉さんはそうゆう趣味なのか?

それともロリアがおかしいのか?

「どじがいのの？」

「チエスターの声、男の人だし。執事みたいでなるほど。」

それからも何故か執事の話が続いた。

緊張する……

俺達は今、俺を捜査に参加させてくれると言う執務官の人の所に向かっている。

「着いたよ」

ふう…どんな人なんだろう。

「失礼します」

「どじぞ」

部屋には優しそうなおばあさんがいた。

「来夢、挨拶して」

「うん。はじめまして。蹄来夢一等陸士です！」

「プロジェクトの捜査に参加したいそうですね」

「はい」

「捜査に参加できるようにする事はできませんが、あなたは捜査官ではありません。なので、何かあった時にこちらでどうにかすることはできません。それでも参加しますか？」

母さんを助ける為だ。

「はい。参加させて下さい」

「そうですね。では、今日中に話を通しておきます。明日から捜査に参加して下さい」

「はい！ありがとうございます！」

「では、失礼します」

「良かったね」

「うん。ありがとう」

「じゃあ、明日からがんばろうね」

「うん」

「よし」

絶対に母さんを助け出してみせる！

C
o
n
t
i
n
u
a

a
l
l
a

p
r
o
s
s
i
m
a

v
o
l
t

第9話 捜査の為に（後書き）

短かったですね。

次回はちゃんと書きます。

えー、次回の更新は6月2日です。

では、また

第10話 捜査開始!! (前書き)

もう、言う事はこれだけ。
遅れてすみません…

まあ、11分ですが。

では、ごうごう

第10話 捜査開始!!

よし！カートリッジも作ったし、準備完了だ。

準備を終えた俺はロリアに通信を入れた。

「よお、ロリア」

『あつ、来夢！』

ロリアが嬉しそうな顔をする。

「今日から捜査に参加するからそっちに帰れなくなった。悪いけど今からこっちに来てくれないか？」

『わかったよ。今すぐ行くね』

「おう。待ってるな」

そい言って通信を切ろうとするとロリアがストップをかけてきた。

『ちょっと、待って！来夏はどうするの？連れてく？』

うーん…

「いや、来夏はなのは姉さんに頼もう」

『わかった。じゃあ、待っててね』

通信を切る。

5分後。

ロリアが到着した。

「よお」

「2日ぶりだね」

『お久しぶりです、ロリア』

「あ、チエスター！久しぶり〜」

ロリアはいつもテンション高いな。

「早速行くぞ」

「うん。本局に行くんでしょ？歩きで行くの？」

「いや、今日もフェイト姉さんが乗せてってくれるって」

「今日も？って事はもしかして昨日も？」

「ああ、昨日も乗せてってもらったけど？」

「彼女を放っておいて他の女とドライブか！！？」

ロリアがいきなりキレた。

「いや…他の女って…姉だぞ？」

何を言ってるんだこいつは……

「血は繋がってないでしょー!!」

「そんな事言われても……」

俺がどうしたもんかと悩んでいるとチエスターが助け舟を出してくれた。

『まあまあ、落ち着いて下さいロリア。2人きりだった訳ではないんですから。それに、主の言う通りフェイトお嬢様は姉なのですから』

「ありがとう、チエスター」

『それに、フェイトお嬢様は主の事をなんとも思っていないよ。主はただの弟です。それ以下であったとしてもそれ以上だという事は絶対にないでしょう。だから安心して下さい』

「そうなの…？まあ、チエスターがそう言うなら……」

「ちょっとまって！なんなんだよ。ひど過ぎだろ、チエスター！」

なんだよ、「それ以下であったとしてもそれ以上だ」という事は絶対にない」って！

『そう言われましても…事実ですよ？』

「事実だからって言っていていい事と悪い事があるだろ！」

くそっ……主に向かって毒舌すぎだ、コノヤロー！

「チエスター、表へ出る！」

『私は主の指に付いているので主が出ないとできません』

そうだった！

「じゃあここでいいや。さっきの言葉を撤回しろ！」

『だからあれは事実なのです。事実を受け止めて下さい、主』

「事実なんかじゃない！弟以上でも以下でもないなら分かるが、お前は以下って言っただろ！！！」

『はあ……では、そこにいるフェイトお嬢様に直接聞いてみたらいかがですか？自分は弟以下なのか、と』

え？

「そこにいる？」

『はい。入口の所に』

入口の方を見るとア然とした顔のフェイト姉さんが立っていた。

「あ、いや、今は、えーと、何て言うか……」

『主はフェイトお嬢様にどう思われているのかが気になるそうです』

言いやがった!?

こいつ、あっさり言いやがった!?

「どう思ってるか？来夢は私の大事な弟だよ。それ以下でも以上でもない」

「ほらなっ！以下じゃないってさ！」

『ちっ…っ』

ちっ!?

お前デバイスだろ！

それ以前に主に舌打ちすんなよ!!

「あっ、終わってる」

いつの間にかいなくなってたロリアが戻ってきた。ギンガを連れて。

「何でギンガを連れて来たんだ？」

「2人の喧嘩を止める為に決まってるでしょ！」

元々の原因はお前なんだけどな…

「終わったんなら私は戻るね」

「おう。悪かったな」

ギンガはフェイト姉さんと何回か言葉を交わして戻って行った。

「ギンガと知り合いなの？」

少し気になったのでフェイト姉さんに聞いてみる。

「うん。何年か前にあった空港の火災の時に私がギンガを救出したんだ」

ああ、そういえばギンガが話してたような気がするな。

「じゃあ、行こっか」

俺達は外に停めてあったフェイト姉さんの車に乗り込んだ。

115

「本日よりプロジェクトの捜査に参加させていただきます。 蹄来夢
一等陸士です！」

「同じくロリア・フォルティス二等陸尉です！」

俺達は捜査本部に入り、早速挨拶をする。

「俺はレイル・デュアリス。三等陸尉だ。よろしくな！」

「モコ・エルグランド一等陸士です。よろしくお願ひします」

金の短髪に碧眼の少年 レイルと栗色のショートヘアーでエメラル

ド色の眼をした少女　モコが挨拶を返してくれた。

俺は室内を見渡す。

人はあまり多くない。

10人くらいだ。

「あの、他の人達は…」

「ああ、プロジェクトの捜査担当はここにいる奴で全員だぜ。みんな忙しくてな」

「そうなんですか」

「おい、俺とモコはお前と同じ年だからさ、敬語はやめろよ」

「あ、そうなの」

「そちらの方はハラオウン執務官だよな？」

「そうだよ」

「はじめまして。何故ここに？」

「俺達を送っ」「この捜査の指揮を私がするからだよ」「え？」

「そうなの！？聞いてないよ！」

「だって、言っていないもん」

「じゃ、軽く説明を。基本はここで待機だ。で、プロジェクトを見

つけたらその場所に急行。まあ、こんな感じだ。わかったか？」

「うん。ありがとう」

「ちなみに、現場に向かうのは俺とお前とあっちにいる数人だ。モコを始めとする残りの奴らはここからサポート。で、ハラウン執務官は状況によって」

「なるほど」

「あつ、そうだ。言い忘れてたけどプロジェクトはちゃんと拘束するんだぞ。間違っても殺しちゃダメだ」

「了解」

「じゃあ、私は仕事があるから行くね」

「あれ？フェイト姉さんは指揮をするんじゃないの？」

「まあ、それは名前だけ。事実上のトップはレイルだよ」

「そうなんだ」

「いや、トップとか言われると照れるぜ」

あれ？ロリアがいない。

「ロリアはどこ行ったんだ？」

「たぶん食堂じゃね？モコも一緒に。さっき楽しそうに話してたし」

「ふうん。じゃあ、食堂まで案内してくれない？」

「いいぜ」

俺達は仕事があると言つフエイト姉さんと別れ、食堂へ向かった。

「なんで食堂なの？」

「モコの奴、本局の食堂はつまいって言ってたからな」

へー。俺も食つてみたいな。

「そういえば、レイルとモコは同「ちょっとまって！」「ん？」

俺とレイルが話しながら歩いていると突然レイルが立ち止まった。

「どうした？」

「緊急通信だ！プロジェクトを見つけた。急ぐぞ！」

「お、おう！」

そして、俺とレイルは歩いてきた廊下を急いで引き返した。

俺とレイルが戻ると全員揃っていた。

「プロジェクトを見つけた。現場担当は急いで現地に向かえ！」

レイルがみんなに指示を出す。

「場所は第97管理外世界地球の日本、海鳴だ！」

え！？

海鳴だつて！？

もしかして、来夏が！

「よし！捜査開始だ！」

レイルの声を聞きながらみんなが転移していく。

「ロリア！来夏の所かもしれない！急ぐぞ！！！」

「え！？うん！」

「よし！チエスター、バリアジャケットを頼む！」

『了解しました。バリアジャケット展開』

「ロリア、コンパンニョアルマ！」

「うん！」

俺はロリアと軽くハイタッチをする。

ロリアはハンドガン型になる。

来夏！無事でいてくれよ！

俺達は全速力で海鳴に向かう。

来夏となのは姉さんの無事を祈りながら。

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t a

第10話 捜査開始!! (後書き)

はい、そろそろ戦闘が入ってきますね。

うまく書けるかな？

まあ、全力で頑張ります。

次回の更新は6月5日です。

第11話 襲撃と手掛かり（前書き）

なぜか驚異的なスピードで仕上がったので更新日ではないですが更新しました。

勿論、土曜日にも更新します。

では、ごきげん。

第11話 襲撃と手掛かり

- 来夏side -

私は今、お店の手伝いをしている。

ちよつどお客さんが少ない時間帯で今、お店にいるのは私となのはお姉ちゃんだけだ。

「ひま〜」

「そうだね。でも、もうすぐお昼だからすごく忙しくなるよ」

「うん」

「!?!?」

その時私となのはお姉ちゃんは異変に気付いた。

「これは…結界!?!?」

翠屋を真っ黒な結界が包んでいた。

もしかして、プロジェクトが!?!?

何で?

まだ時間はあるはずなのに。

「来夏はデバイス持ってないんだよね?」

「うん…」

「じゃあ、私から離れないでね」

お姉ちゃんはそう言ってレイジングハートを起動する。

「もしプロジェクトなら襲ってくるのは機械だと思っ！」

「わかった」

私達はお店の中央に背中合わせで立つ。

キイイイイイン

どこからか金属を擦り合わせる様な音がする。

どっ？

その時、私の後ろにいるお姉ちゃんが声を上げる。

次の瞬間体に拳がめり込むドスッ！という音がする。

「お姉ちゃん！！」

後ろを振り返るとそこにお姉ちゃんはいなかった。
かわりに背の高い銀髪の女の人。

人間！？

プロジェクトじゃないの？

女性が口を開く。

すると、またあの音がする。

その音は目の前の女性から発せられていた。

いや、やっぱりコイツは機械だ。

来夏は口からの攻撃を避けるため、大きく跳び倒れているのはの隣に着地する。

「お姉ちゃん大丈夫!？」

「うん…ちょっと掠っただけだよ……」

お姉ちゃんはそう言ったけど大丈夫じゃないことは明白だった。

速く逃げないと!

お姉ちゃんをどうにか立ち上がらせる。

「来夏…後ろ!」

私達の後ろには口を開いたアイツが立っていた。

「っ!？」

気が付かなかった…

ヤバイ!逃げられない!

私は目をつむった。

………ん?

攻撃がこない。

目を開ける。

「っ!？」

声を出そうとするが出ない。

ガスだ。意識が……

完全に意識が飛ぶ直前に来夏が見たのは注射器、その中の緑の液体、そしてその注射器を射されている自分の腕だった。

- 来夏 s i d e o u t -

くそっ!!

遅かったか……

俺が来た時にはもうプロジェクトはいなかった。

「またか……また逃がしちゃった」

レイルも悔しがっている。

「レイル、来夏となのは姉さんの様子を見てくるよ」

来夏となのは姉さんは俺の部屋に寝かせてある。

「おう」

2人はまだ眠っていた。

俺達が到着した時、2人は眠っていた。

催眠ガスを吸ったせいらしい。

俺は来夏を見つけた時、安心したと同時に不思議に感じた。なんでプロジェクトは来夏を連れて行かなかったんだ？と

プロジェクトの目的は絶対に来夏だと思っていた。

だけど来夏は眠らされているだけだった。

目立った傷もなかった。

何故だ？

俺が頑張って考えてるとレイルが部屋に入ってきた。

「どうだ？」

「まだ、目を覚まさないよ」

「そうか」

「何かわかったのか？」

「ああ、この2人が倒れていた場所にこんなもんが落ちてた」

レイルはそう言って銀色の四角い機械を見せてきた。

「なんだ？それ」

「どうやらボイスレコーダーのような機械みたいだ。音声データも入ってる」

「そのデータは確認したのか？」

「いや、まだだ。お前と一緒に確認しようと思ってな」

「他の人達はいいの？」

「ああ。他の奴らは先に帰らせた」

「そうなんだ。じゃあ聞くか。チェスター、一応録音しておいてくれ」

『了解です』

「じゃあ、再生するぞ」

ゴクリ…

思わず喉が鳴ってしまった。

カチッ

レイルが再生ボタンを押す。

『……………時空管理局員共、お前らが俺達を追っているのは知ってる。そこで提案がある。取引をしよう。もしも取引に応じる

気があるのなら明日の午後6時、第34無人世界マウ克蘭に会い。ただし、1人だけだ………」

ブツツと音がしてメッセージは終了する。

「取引……」

「ねえ、どうするの?」

「俺的にはその取引、応じるべきだと思う。もしかしたら捕まえることができるかもしれない」

「そっか。レイルがそう言うならやろう。捕まえるためだ」

「おう」

「ん……」

来夏が起きたみたいだ。

「目が覚めたか?」

「お兄ちゃん!何でここにいるの?」

なんでって……

「そりゃあ、プロジェクトを追ってだ」

「そっか。ってプロジェクトは!?!?」

「俺達が来た時にはもういなかったぜ」

「そうなんだ。で、あなたは？」

「ああ、俺はレイル・デュアリスだ。プロジェクトの捜査担当」

「そうなんですか」

「出来れば敬語はやめてほしい。苦手なんだよ」

「そうなんですか。わかりました」

わかったって言うてるけどその返事自体が敬語だ。

「あつ！お姉ちゃん！お姉ちゃんは！？」

「お前の隣に寝てるけど」

「お姉ちゃん！」

来夏は突然姉さんの服を脱がせ始める。

「えっ！？何やってんの！？」

どンドン姉さんの服が…

「まあまあ。何かあるんだろう。俺達は見守ってようぜ！」

何言ってるのこの人！？

「馬鹿かお前！何が見守るだ！」

俺達が騒いでる間も来夏は姉さんの服を脱がせていく。

「だってよー。この機会を逃したら一生見れないぜ？なのはさんの裸！」

「黙れよ！そんなもん一生見なくていいだろ！」

「そんなもんだと！？なのはさんの弟だからって調子に乗りやがって！」

騒ぎ続ける。

まさかレイルがこんな奴だったとは…

「どけよ、来夢！見えねーじゃんか」

「ダメだ！てか見るな！」

「なんだよ！なのはさん独り占めか！？なのはさんはお前のもんじやねーぞ！」

「お前のもねーよ！」

「なのはさんはみんなのもんだー！！！」

「違えよ！！！」

「ない！？」

俺達がさらに騒ぎ続けると来夏が驚きの声を上げる。

「どづした？」

「お姉ちゃんの傷がないの」

「傷？そんなのあつたか？」

「いや、なかったと思うが……俺が見てやるよ」

レイルが傷を見ると言つて姉さんに近付く。

「つて、お前は近付くな！」

「なんでだよ！？俺は親切心から言つてるのに！」

「黙れ。お前のは下心だろ……」

はあ……さすがに疲れた……

「で、何で傷がないんだ？」

「たぶんそれはプロジェクトが傷を治したんだと思うぞ」

「マジで！？」

「ああ。プロジェクトは絶対に人を傷つけない。もし傷つけてしまつてもちゃんと治すんだ」

プロジェクトが！？

だって人体実験をしてるような奴らだぞ！？

「そんなはず…プロジェクトがそんなことする訳が………」
来夏も俺と同じ考えのようだ。

「まあ、良かったじゃねえか。傷がなくて」

「そうだな」

「ん〜」

なのは姉さんが起きた。

「あ、来夢来てくれたんだ」

「姉さん！ま「まで、来夢。俺が自己紹介する！」あ、うん」

レイルが割り込んできたせいで何を言おうとしたのか忘れてしまった。

「レイル・デュアリス三等陸尉です。プロジェクトの捜査担当をします」

「そうなんだ。よろしくね」

「はい！〜」

姉さんの笑顔を見てレイルの顔がだらしなく緩む。

「ところで、なのはお姉様と呼んでもいいでしょうか？」

何言っただ、こいつは！

「それはちょっと…」

「そうですか……………」

レイルは姉さんの返事を聞いてマジでへこんでる。

「じゃあ、なのはさんと呼ばせて頂きます」

「うん」

「それにしてもいい体してますね。なのはさん」

え？

「ふえ？」

そうだった。姉さんに裸だよって教えてあげようとしたんだった。

姉さんの顔が赤くなってく。

あ、これは俺が帰ってきたときと同じ反応だ。

「レイル！逃げるぞ！」

「え？なんでだよ！？」

「来夏！あとは頼んだ！」

第11話 襲撃と手掛かり（後書き）

活動報告で書いてますがこの小説が1万PVを達成しました。

そこで、記念企画として読者の皆様からの質問に答えるアレをやる
うと思っております。

よくあるアレです。

詳細は活動報告に書いてあるのでそっちを見て下さい。

沢山の質問待ってます。

次回の更新は6月5日です。

第12話 襲撃の後に(前書き)

今回は話が進みません。

だからと言ってギャグってほどこでもないよっな…

まあ、とりあえずほどこ

第12話 襲撃の後に

俺は今、リビングで寝てたロリアを起こしてティータイムを楽しんでいる。

「ふう〜平和だな〜。リビングは……」

ただ今隣の部屋ではなのは姉さんによる「お話」が行われている。

「お話」の相手は勿論来夏とレイルだ。
巻き添え喰らわなくてほんと良かった。

しかし、その平和を来夏がぶち壊しやがった。

「お兄ちゃん。お姉ちゃんが呼んでるよ」

ええー。俺は何もしてないのに。

俺は恐怖に身を震わせながら隣の部屋に向かう。

「入るよ。姉さん」

「どござ」

「何かな？今回俺は全く悪くないと思うけど……」

「そうかなあ？服を着てないことを教えてくれなかったんだから少しは悪いと思うけど」

そんなあ……………

「あ、でも来夢を呼んだのはお話しするためじゃないよ」

その言葉を聞いて心の底からホッとする。

「レイル君にね、さっき見た事は忘れてっってお願ひしてるのにヤダっつて言うの」

ああ、なるほど。

「それで？俺にどうしろと？」

「レイル君の説得を手伝ってほしいの」

「やだよ。面倒臭い」

「手伝ってくれないの？じゃあ、来夢もお話する？」

えええー！？

もう、これお願いじゃないじゃん！
脅しじゃん！！

「やります。全力でやらせていただきます！」

「ありがとう」

じゃあ、早速。

「レイル。さっき見た姉さんの裸は忘れるんだ」

ゴンッ！

「痛て！」

姉さんにいきなり頭を殴られた。

「裸って言わないで！恥ずかしいからー！」

そうゆう事は最初に言ってほしいよ。

「では改めて。さっき見た姉さんの一糸纏わぬ姿は忘れるんだ」

ゴンッ！

「痛て！」

姉さんを見ると満面の笑みだ。

ヤバイ！

何て言えば良いんだ？

『レイル、何ていえば良いんだ？』

俺は説得する相手であるはずのレイルに念話で助けを求める。

『うーん。エッチな姿とか？』

『いやいや、それはマズイだろ』

『そうか…じゃあ、ビーナスのような肉体とか？』

『それいいな！褒められてるっぽくて』

早速実行。

「レイル。さっき見た姉さんのビーナスのような肉体の事は忘れるんだ」

ガッ！！

姉さんの方を見るとレイジングハートを起動していた。

「来夢。後でお話しようね？」

ええ！？

いまのは絶対に大丈夫だと思ったのに……

「返事は？」

「はい……」

「でも、レイル君が忘れてくれるって言ったら来夢のお話も無しにしてあげる」

「ほんと！？？」

「うん」

よし！

「レイル！友達の為だと思ってあの事は忘れてくれ！頼む！！」

俺は必死に頼む。

「やだね」

「なんでだよ!？」

「来夢となのはさんの裸、ブツ!どっちの方が価値がある?答えは簡単。なのはさんの裸だ!ブォ!」

………こいつ…ドMだったのか……1回目の裸で平手打ちされたのに2回目を言うとは……
しかも、幸せそう……
さすがに引くよ。

「わかっただろ?俺に何を言っただって無意味だぜ。覚悟を決めてなのはさんとお話しろよ」

うん。どうしよう…

このままではなのは姉さんとお話だ。

「おい。忘れないと姉さんに嫌われるぞ」

これならどうだ!!

「何を言ってるんだお前は。そんな訳ないだろう?」

何だ、この自信は。

どこから湧いてくるんだ?

くそっ！それなら、姉さんに直接言ってもらおう。

「姉さん。レイルの事嫌いって言うてくれない？」

「え？でも……」

「言わないと忘れてくれないよ？」

「うん。わかった」

なのは姉さんはレイルの前まで行く。

「なんですか？なのはさん」

「あのね……レイル君に言いたい事があるの」

「遂に告白ですか？」

だからその自信はどこから湧いてくるんだよ……

「ううん。違うの。あのね……」

「はい？」

「さっきの事忘れてくれないレイル君なんて大嫌いつ……！」

「！？」

おお……これは、これは行けるぞ！

「なのはさん……シンデレレですか？シンデレレなら早くデレないと」

な、なにいいいい！？

これでダメって、どんだけポジティブなんだよ！

くそー！！もう他に打つ手がない……

このままでは本当にお話だ。

「姉さん、ちょっと外に出ててくれない？レイルと交渉するから」

「あ、うん」

なのは姉さんが出て行ったのを確認してから俺は話し始める。

「なのは姉さんの小さい頃の写真は欲しくないか？」

「え？マジで！？くれるの！？」

予想通りの反応だ。

「ああ、ただし条件がある」

「条件？何だ？」

「姉さんの裸は忘れる」

「はあ！？お前本気で言ってるのか？」

「いや、姉さんの前では忘れたふりをしろってことだよ」

「なるほど」

「どうだ？この条件のむか？」

「よし！交渉成立だ」

よし！

これでお話は無しだ！

「姉さんに見つかりとマズイからミッドに戻ってから渡すな」

「おう。頼んだぜ！」

その後もレイルと喋ってたらなのは姉さんが呼びに来たので俺達はリビングに向かった。

「　　と言つ訳なんだ」

夕食の後、姉さん達にプロジェクトからのメッセージの事を話した。

「で、マウ克蘭に行くのは来夢が良いと思ってるんだね？レイル君は」

「はい。メッセージでは俺達がプロジェクトを追ってるのを知っていると書いていました。だから、個人の能力も調べられる可能性があります。でも、昨日捜査に参加したばかりの来夢なら能力がばれて無いかもしれません」

さっきまでとは全然違うな。

「なるほどね。レイル君の言ってる事は正しい。私はそれでいいと思うよ」

「俺もそれでいいぞ」

ここで俺は疑問がうかぶ。

「1人って言われたけどロリアは連れて行っていいのかな？」

「どうだろうな」

「私がデバイスになってればバレないんじゃないかな？」

確かに。

「うん。それでいい」

「そういえば、姉さんは明日からまた仕事だよね？」

「そうだよ」

「じゃあ、来夏も俺達と一緒に来いよ。捜査には参加できないけどな」

「うん！」

「それじゃ、俺達は明日の朝ミッドに戻るぞ。7時くらいかな」

「了解。じゃあ、寝るか」

「うん。おやすみ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

みんなが就寝のあいさつをして自分の部屋に戻って行った。

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t a

第12話 襲撃の後に（後書き）

どうも、カルタスです。

今回はあとがきに誰か登場させてみようかな？というところで、来夢とレイルを。

「どうも、主人公です」

「準主人公です」

いや、レイルは主人公じゃないから……

「え！？違うの！？」

「お前は変態なギャグキャラだろ」

そう、来夢の言う通り。

「だって、主役っばいだろ？俺」

ああ。最初ももっとクールなキャラにするつもりだったんだ…でも、書いてるうちにどんどん変態なギャグ野郎になっていったんだ。

「へー、それでレイルはこんななのか」

「じゃあ、今からでも最初の設定に戻せ！」

それは嫌だ。

「は？何でだよ！？」

今の方が書いてて楽しい。

「なにい！？」

おっと、あとがきなのに長くなってしまった。
来夢お知らせ頼む。

「了解。えー、次回の更新は6月9日ですよ」

はやく仕上がればもっと前に更新するかもしれません。

「俺はなんかないのか？」

ない。

「扱いがひど過ぎる！！」

「うるさいなあ」

では、また。

「さようなら」

「覚えてろよ！この馬鹿作者！」

第13話 休日には模擬戦を（前書き）

はやく仕上がったので更新です。

今回、来夢の初戦闘シーン。

では、どうぞ

第13話 休日には模擬戦を

「じゃあ、来夏はロリアとモコの部屋な」

「うん。よろしく！モコ」

「こちらこそよろしくです」

今は来夏の部屋を決めたところだ。
ちなみに俺はレイルと一緒に。

「さてと、今日は取引があるからな。それまでは暇だろう」

「そうだね」

「ってことで今日は休みだ！！」

『イエーイ！！』

レイルの休み宣言に捜査本部にいる全員が歓喜の声を上げる。

「休みって言われてもな……」

やる事がない……

「ロリア達はどうするんだ？」

「私達は3人でショッピングにでも行こうかな？」

そうか…

「じゃあ、俺は1人か…」

「まてよ！俺がいるだろ！！」

なんかレイルが騒ぎ出した。

「だって、レイルと2人つてのもな…」

「ひどっ！べつにいいじゃんかよ」

ええー。

「じゃあ、なんかやる事あるのか？」

「おう！」

レイルは満面の笑みだ。

絶対にろくな事じゃないな…

そして、レイルは高らかに叫んだ。

「模擬戦やろうぜっ！」

で、結局模擬戦をすることになり俺達は今トレーニングルームにいる。

「いいか？時間は30分。撃墜するか相手がギブアップしたら勝ちだぞ！」

はあ……
めんどいな。

まあ、暇つぶしにはなるけど。

「いいよ」

「じゃあ、行くぜ！！」

レイルはデバイスを起動し騎士甲冑を展開する。

それは、あんなのを甲冑って言うていいの？
とゆう感じの甲冑だった。

まず、黒い半袖シャツを着ている。

その上には袖なしの白銀のロングジャケット。

手には銀色のグローブ。

下は、七分丈の黒いズボン。

そこからは銀色のチェーンが2本下がっている。

そして、デバイス。

あれは…ダガーか？

どうやらレイルのデバイスの基本形態はダガーのようだ。

俺もチエスターを起動する。

今回はロリアが出かけてしまったのでチエスターを使う。

普段、チエスターにはサポートをしてもらっているがロリアがいな
い時は武器になってもらう。

「ひとまずハンドガンだ」

《わかりました》

チエスターは一般的な拳銃の形になる。

「行くぞ！」

レイルに向かって叫ぶ。

「来い！！」

レイルも叫び返す。

パンツ！ パンツ！ パンツ！

来夢は立て続けに弾丸を撃ち出す。

しかし、レイルはそれをいとも簡単にナイフで弾く。

「こんなもんか？ヒズメ式ってのは！」

弾が遅いか……

「チエスター、カートリッジを【ソニック・ムーブ】に変更してく

れ

《了解。Change Cartridge【Sonic Move】》

チェスターのマガジン部分が一瞬光る。

パンツ！ パンツ！ パンツ！

来夢は先程と同じ様に続けて3発撃つ。

しかし、先程とは明らかに違うところが1つ。
それは、弾丸の速さ。

肉眼では確認できない程の速さだ。

「！？ダゲ！」

《Load Cartridge》

レイルは一瞬驚いた顔をしたがすぐに自分のデバイスであるダゲライトを二刀流にする。

そして、またしても弾丸を全て弾く。

！？今のは見えてないはずなのに！

「今度はこっちの番だ！」

レイルは叫びながら来夢に向かって走る。

「リボルバー！カートリッジを【転移】に変更！」

《Mode Revolver・Change Cartridge
e【Metastasis】》

チェスターがリボルバー型に変わる。

そして、来夢はチェスターを自分の頭に向け引き金を引こうとする。

だが、引く前に接近したレイルがダグライトを突き出す。

くっ……間に合わないか……

来夢は片手でプロテクションを張りレイルの斬撃を受け止める。

そして、空いてる方の手で引き金を引く。

パンツ！

銃声が鳴り響き、来夢がその場から消える。

「何!？」

レイルは周りを見回す。

いない。どこ行きやがった……

その時レイルは背後に気配を感じ振り返る。

「ちっ……気付かれたか」

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

今度は6発。

装填できる全てのカートリッジを撃ち出す。

しかも超至近距離。

「くっ……！」

さすがのレイルも全ては弾けずプロテクションを張る。

そして、そのまま後ろへ跳ぶ。

「スモールダガー！！！」

レイルの周りにとても小さい 例えるならばハムスター程 短
剣が現れる。

そして、それが来夢に向かって放たれる。

来夢はプロテクションを張り防ぐ。

が、ダガーはプロテクションに当たった瞬間爆発する。

その爆風のせいで来夢は吹き飛ばされる。

「がっ………！！」

そして、来夢の身体は壁にたたき付けられる。

「くそっ…チエス」

来夢はチエスターに指示を出そうとした。

しかし、最後まで言うことはできなかった。

何故なら、銀色に光るダガーが首に突き付けられていたからだ。

「へへっ…俺の勝ちだな！」

「はぁ……負けました……」

あのもも5回程模擬戦をした。今は本部に戻ってきている。

「はぁ…結局1回も勝てなかった……」

「へっ！残念だったな！」

「結構自信あつたのにな」

「そっぴゃあ、あのいろんな弾は何なんだ？」

「ああ、あれはねヒズメ式カートリッジだよ」

「ヒズメ式カートリッジ？ベルカ式とは違うのか？」

「うん。ヒズメ式はカートリッジ自体を撃ち出すんだ」

「へ。で、あのいろんな効果は？」

「あれはあらかじめカートリッジに魔法を込めてるんだ」

「は？意味がわからん」

レイルって頭悪いんだ…

姉さん達はこれだけで理解してくれたのに。

「だから、カートリッジにあらかじめ魔法を込めることによってその魔法の効果を弾に付加できるんだ」

「ん〜」

ええ〜！？もしかして、今の説明でわからなかったのか！？
頭悪過ぎ……

「まあ、いいや」

いいのかよ！？

「ロリア達帰ってこないね」

「まだ20分あるからな。大丈夫だろ」

「どうやって行くの？」

「今マウ克蘭の近くにいた次元航行艦船に転移、そこからマウ克蘭に降りる」

「そうなんだ」

「ただいま〜」

「ただいまです」

マウ克蘭への行き方を聞き終わったところでロリア達が帰ってきた。

「おかえり」

「はあ、疲れた…」

「私達はもう寝ます…」

「買い物だよな？」

「買い物に行ってきたんだよな？」

「疲れすぎだろ!？」

「おいおい、これからプロジェクトとの取引だぞ。特にロリア。お前は現地に行くんだぜ」

「ええ、めんどくさい」

「べつにいいよ。俺にはチエスターがいるし」

「ひど!?!そこは説得するところでしょ!」

「意味わかんねーよ!」

「まあまあ、2人共落ち着いて下さい」

モコが仲裁に入ってくれる。

「あゝ、やっぱりロリアは待機」

レイルがいきなりロリア待機宣言をする。

「ええゝ、なんでゝ？」

「だってロリアには待機モードがないだろ？取引場所に武器持って行くのはマズイ」

たしかに。

「まあ、そうゆう訳だから取引に行くのは来夢とチエスターな」

「了解」

「私達は？」

「ロリアと俺は次元航行艦船で待機。他の奴は全員ここで待機」

『了解！』

「よし！じゃあ、行くか！」

「おう！」

「っと、待った」

何なんだよ！！

「来夢、この指輪付けといて。そっちでしてる会話が全部本部に送

「らねてくるから」

「うん。わかった」

「…じゃあ、行くぜ…！」

C
o
n
t
i
n
u
a

a
i
l
l
a

p
r
o
s
s
i
m
a

v
o
l
t

第13話 休日には模擬戦を（後書き）

どうも、カルタスです。

「来夢です」

「レイルだぜ！」

あれ？なんでレイルいるの？
呼んでないけど……

「なんかついてきたんだ」

…そうですか……

「お前らが俺を仲間外れにするからだ！……！」

わかった、わかった。

仲間外れにしてごめんなさい。
だから騒がないで……

「おう。わかればいい」

そういえば、今回は来夢の初戦闘シーンを書いたんだけど。

「ああ、俺が5戦5勝のアレな」

「その言い方結構傷つくんだけど……」

「それにしてもやっぱり俺はすごく強かったんだな！」

それは違う！

「え？」

「何が違うの？」

あれは決してレイルがすごく強かった訳じゃない。

来夢が接近戦に慣れてなかったからレイルがすごく強く見えるだけだ！

「なるほど」

「やっぱり俺の扱いはそうなのか！？」

ああ、すまないな…

「すまないと思ってんなら設定を変える！」

嫌だ！

「また、この展開か…」

とゆうか来夢の方が本当は強いってだけで、レイルが弱い訳じゃない。

「あ、そうなの？」

そうなの。

「じゃあ、いいや」

「いいんだ……」

「そういえば、質問は来たのか？」

……

「来てないの？」

……はい……

「やっぱりな。1万ぐらいで調子に乗るからだ、馬鹿作者」

お前は黙れ！

出番減らすぞ！

「ごめんなさい……！」

「はあ……どっちも馬鹿だな……」

とゆう訳で質問が1通も来ていません……

お願いします……！！

僕になんか送って下さい！

「かなり必死だな……」

「うん……」

だって……

1通も来ないのは結構ショックなんだよ……

「もう、こんな作者はほつといて。

お知らせ行きます」

「次回の更新は6月9日だぜ！」

「それから作者がかなりショックを受けてるんでなんでもいいんで質問を送ってくれると嬉しいです」

「もう、ヒズメ式ってなんですか？とかでもいいぜ！」

「いや、それはダメだろ……」

「じゃあ、ロリアのスリーサイズは？とか」

「まあ、そうゆうのならいいと思います。

とゆうか大歓迎だと思います」

「って訳でよろしくな！」

「では、また次回」

「「およろしく」」

第14話 取引（前書き）

1万PV記念企画の事が活動報告に書いてあります。
見てみて下さい。

第14話 取引

俺は今マウ克蘭の指定の場所に立っている。
プロジェクトはまだ来ていない。

取引って何をするんだろう？

「やあ」

「!?!」

来夢が取引について考えていると目の前に突然人が現れる。

「取引に応じてくれるようだね。嬉しいよ」

男？は不気味な声で喋る。

変声器を使っているようだ。

さらに、仮面もつけている。

「は？まだ応じるとは言っていないけど？」

来夢は普段より低い声で答える。来夢は犯罪者　つまり自分の敵
と話す時には普段より低い声で口調を変えて喋るようになっている。

「あれ？？そうなの？？」

「ああ。まずは話を聞く」

「そっだなんだ」

こいつの口調がすごくムカつくんだが……

「こっちも忙しいんだ。さっさと話してくれ」

「まあまあ、じゃあまずはその指輪をこっちに渡して貰おうかな？」

「なんでだよ」

「それさ〜盗聴器だよね〜？」

「なっ…!?!？」

「ばれてる!?!？」

「僕に嘘は通じないよ〜」

「…………ほらよ」

来夢は指輪を渡す。

それを仮面は踏み潰す。

「じゃあ、そろそろ話そうかな〜」

『チエスター、録音頼む……………チエスター?』

チエスターから返事がない。

「あ、そのデバイス使えなくしてあるからね〜。録音しようとして

も無駄だよ？」

くそっ……………

「まあ、デバイスが起動されてると使えなくすることができないんだけどね」

「どうしてここまでする？」

「それはね、これが取引じゃないからだよ」

「取引じゃない？なら何でここに来させた」

「君と話しがしたかったからだよ」

「俺と？誰がここに来るかわからなかったのにか？」

「ははっ、わかってたよ。君が来ることはね」

わかってた？

「なんでだ？」

「それはね、頼んだからだよ。君を来させてくれるようにね」

頼んだ！？

誰に？

「スパイってことか…？」

「そつだね」

ここに来るのを俺に決めたのはレイルだ。
つてことは……

「レイルか……？」

「大正解」

仮面をつけているせいで表情は読めない。

「考えてるとこ悪いけど話すよ？」

……今はこいつの話に集中しよう。

「ああ……」

「率直に言おう。僕らは君がほしい」

「……………」

「……何か勘違いをしているようだね。僕の言いたいことはこうだ。
君の能力、ヒズメ式ちからを研究したい」

「は？やだよ」

「嫌だ…か。君は断れないはずだよ？」

「嫌だ」

「僕らは君の母親を人質にしてるんだよ？」

「っ!?!」

「君には僕らに従うという選択肢しかないはずだ」

くそっ……! そうゆう事かよ!

「じゃあ、どうすればいい。俺を研究できたらお袋を解放してくれるのか?」

「いや、それだけじゃない。君の妹にもおとなしく研究されてほしい」

来夏も!?

「本気で言ってるのかよ……俺に母親と妹、どっちか選べって言うのかよっ!?!」

「まあ、そうなるね」

「くっ……………」

俺には……

俺には選べない……

「今すぐに決めるとは言わないよ。そうだな、1週間あげよう。もし母親を選ぶなら1週間後のこの時間に君の故郷、海鳴に妹と一緒に来てね」

「……………」

「無視？酷いな。ま、そうゆう事だからね」

そう言い残し仮面は転移した。

「お、どうだったんだ？」

早速レイルが聞いてくる。

「あ、うん。もっと偉い人がくると思ってたみたい。俺には用ないってさ…」

俺は咄嗟に嘘をついた。

さっきまで普通に話していたレイルが急に信じられなくなってしまった。

「？そうか。ならしかたないな。戻るぞ」

「どうだったの？お兄ちゃん」

来夏も聞いてきたがレイルの時と同じような説明をした。

「そうなんだ……………」

「みんなー！今日はもう休んでいいぞー」

レイルが解散を告げみんなが部屋に戻っていく。

「はぁ………」

部屋に戻って来てベットに倒れ込む。

俺はどうすればいいんだろう……

考えれば考える程わからなくなっていく。

閉じていた目を開けるとレイルが覗き込んでいた。

「うえ！？」

「なんだよその反応は！かなり傷ついたぞお！」

「あ、ごめん……」

「いや、そんな素直に謝られても………」

いつも通りに喋れない。

「どうしたんだ？ほんとにはあいつに何か言われたんだろ」

「えっ？……」

来夢は「何でわかる？」と続けようとしてやめた。

レイルはスパイなんだから知ってて当然か……

「悩んでるなら聞いてやるぜ?」

「…うん。ありがとう…でもいいよ」

「そうか?まあ、話したくなったら話せよな」

「うん…」

そう言ったレイルは部屋の明かりを消す。

「おやすみ」

「…おやすみ」

ただ今、朝の4時半。

この3日間は仮面に言われた事をずっと考えていてほとんど眠れていない。

まあ、考えただけでほとんどまとまらなかったが…

「あ、おはよう。お兄ちゃん」

「おはよう。随分早いな」

「コーヒーでも飲もうかと食堂に行くと来夏がいた。

「うん。また見ちゃったんだよね…お父さんの夢」

「そうか…」

「お兄ちゃんはどうしたの？」

「目が覚めちゃったんだ」

来夏からの返事はない。
代わりに俺の事を睨んでくる。

「どうかしたか？」

「最近あまり寝てないでしょ！」

「いや…そんなことないぞ…？」

「うそ！隈できてるよ？」

「えっ！？マジで？」

洗面台の鏡を見る。

「あれ？隈なんてないけど…」

「ひっかかったわね」

うっ……はめられた…

「あ、ああ、寝てないさ！それがどうした！」

来夢は盛大に開き直る。

「どうしたの？悩み事でもあるの？」

「あ、えと、いや、べつに悩み事とかは……」

こんなに童謡してたら認めてるも同然だ。

「お兄ちゃんは嘘が下手だね〜顔に出まくってるよ？」

「……………」

「悩み事なら聞くよ？妹なんだし」

どうしよう……

一応来夏にも関係あることだし……

でも、話したら自分も行くって言い出すだろうな……

どうにか俺一人で解決しようと思ってたのに……

「もしかして自分一人で解決しようとか思ってたんじゃないの？」

「……………」

ダメだ……

来夏には敵わない。

「……わかった。話すよ」

「うんー！」

「
実は
」

C
o
n
t
i
n
u
a

a
l
l
a

p
r
o
s
s
i
m
a

v
o
l
t

第14話 取引（後書き）

どうも、カルタスです。

「来夢です」

「ロリアだよ」

はい。本編でレイルが微妙な立場になってしまいました。
で、来夢がレイルと普通に喋れないと言うので今回はロリアを連れて来ています。

「早速だけどアンタに言いたい事があるの!」

え…何でしょうか…?

「私セリフ少くない?」

そうでもないんじゃない…

現に今は来夢より喋ってるし。

「本編の話だよ!」

アー、キコエナイ。

「……潰すわよ……」

ハッ、1人じゃ戦えないくせに。

「フーーーーー！！私だつてこれから1人でたた

」

ちよっ！？

それネタバレだから！

それ以上言っちゃダメだよ！！

「ロリア落ち着け」

「うう……………」

ふう…………

「そういえば、質問はきた？」

……………

「きてないんだ！ざまあみろ！！」

黙れ。

「きてないって事は企画は消滅か？」

そうかもしれない。

てか、そうなる気がする。

「残念だったね。ドンマイ！」

笑いながら言うなっ！！

「2人は騒いでるのでまたしても俺がお知らせします。」

今回の更新は6月12日です。
それから質問まだ募集してます」

「どんどん送ってね 私のスリーサイズとか趣味とか知りたいですよ？」

さて、そんな物好きはいるのだろうか？

「黙りなさい！！」

「えー、では今回はこの辺で。さようなら」

「じゃあね」

ではでは。

第15話 レイル・デュアリス

「 て訳なんだ… 」

来夏は話を聞いて混乱しているようだ。

「 来夏、大丈夫か？ 」

「 うん… 」

「 …… 」

「 …… 」

沈黙が続く。

1分程沈黙が続いた後、来夏が決心したように大きく頷いた。

「 私も行くよ！ 」

「 え！？でも、俺1人で行こうと… 」

「 それじゃあ、お母さんが……殺されちゃうかもしれないじゃん… 」

「 でも、俺が 」

「 だから、私も行く。それで、お母さんを助けてどうにか逃げる 」

「 だけど、それじゃあ来夏が 」

「よし！それで決まり！」

「いや、まてよ」

「じゃあ、もう一眠りしてくるね」

「……………」

完全にシカトされた…

なんか勝手に話を進められ、勝手に決まってしまった。

「はあ…俺も寝よっかな」

コーヒークップを戻し食堂から出る。

「おう、来夢。早いな」

そこにはレイルが立っていた。

「お、おう」

「どうしてこんな早いんだ？まだ5時だぜ？」

「え、いや、あんま眠れなくて」

「ふうん」

「レ、レイルはどうしたの？」

「あゝ、俺も眠れなくてな」

「そうなんだ」

あー！もう！レイルとうまく喋れない。

「俺、寝るから。じゃっ」

「あつ、ちよつとまてよ」

「え？何かな」

「お前さあ、俺のこと避けてない？」

「え、べつにそんな事ないと思うけどっ」

……少し声の上擦ってしまった。

「今だっですぐ別れようとするし」

「うっ……いや、今は……えと……」

「お前の言動がよそよそしくなったのはプロジェクトとの取引から帰ってきてからだ。アイツに何言われたんだよー！」

「それは……」

言えない……

「言えないのかよー！」

「……………」

「そうかよ……………わかった。もう聞かない」

レイルは舌打ちをして去っていった。

「みんなー聞いてくれ」

プロジェクトの出現に備えて本部で待機しているとレイルが話し始めた。

「今日から蹄来夢一等陸士を捜査から外す」

「はぁ！？どうゆうことだよ」

「お前は俺を信用できないみたいだからな。大事な時に指示を無視されても困る」

「っ……………！」

来夢はレイルの胸倉を掴もうとした手を止める。

「それだけだ。仕事に戻ってくれ」

「ねえ、どうゆう事なの？」

「さっきも言った通り来夢は俺のことを信用してないらしいからな」

「なんで？2人共仲良しじゃん」

「そう思っていたのは俺達だけだったみたいだな……」

レイルは悲しそうに呟く。

「え……？」

「お兄ちゃん。どうなの？」

もしかしたら…全部俺の誤解なのかもしれない。
レイルの悲しそうな顔を見てそう思った。

「レイル…少し話したい」

「……………」

「……………」

俺はレイルと2人で自分達の部屋にいる。

ノリで話したいと言っちゃったけど、何を話そう……

いきなり「スパイですか？」って聞くのもなあ……

来夢がいろいろ考えているとレイルが口を開いた。

「お前は俺がプロジェクトのスパイなんじゃないかって疑ってるんだろ？」

「!？」

「ばれてる!？」

「もつめんどいから言っけど俺はスパイだぞ」

「ふん………ええ!？」

てつきり「俺はスパイじゃないぞ」とか言うのかと思ったのに。まさか自分からばらすとは……

「なんでばらしちゃったの？俺が通報するかもしれないのに」

「話を聞いてくれると思ったからな」

「話？」

「ああ。俺の過去と現在いまと未来の話。聞いてくれるか？」

「…うん」

・レイルside・

「俺はものごころついた時から研究施設にいたんだ。だから、父親

も母親もわからない」

来夢が驚いた顔をする。

「そこでは毎日のように体を弄られた。今でも傷が残ってる」

俺は来夢に背中を見せる。

「俺はずっとそれが 体を弄られるのが当たり前の事だと思ってた」

「え……?」

「ものごころついた時からずっとそうだったからな」

「そうなんだ」

「でな、そう思ってたんだけどある日自分がされてる事は普通じゃないってことを知るんだ」

「なんでわかったの?」

「研究員に言われたんだ。この世界には困ってる人を助ける管理局というのがあるんだよ。でも、君の事は助けてくれないようだねって」

「なんで?自分達が悪い人だって教えてるようなもんじゃん」

「さあな」

確かに、不思議だな。

「その数年後に俺は研究施設から逃げ出したんだ」

あの時逃げなかったらどうなってたんだろっな、俺。

「これで、過去の話は終わりだ。今からするのは現在いまと未来の話だ」
過去を話した事はあったけど、現在いまと未来の事を話すのは初めてかもな…

- レイルside out -

「さっきも言ったが俺はプロジェクトのスパイだ」

「……なんで…なんでスパイなんて」

来夢は今にも泣きそうな顔で呟いた。

「俺は、人の体を研究に使う奴らを許せない。誰も俺みたいなことにはなつてほしくない。
だから…潰す！」

「だからって何でプロジェクトに…」

「俺のやるつとしてるのはそれだけじゃない」

「？」

「俺をあの組織から救ってくれなかった管理局も潰す！全てだ」

俺は何か声をかけようと思ったけどレイルの本気の間を見てかける言葉がわからなくなった。

「……………これが俺の全てだ」

「ねえ、なんでプロジェクトなの？」

「あいつらは研究に人を使わないからだ。そして、みんな俺と同じ。管理局を恨んでるからだ」

え？

今レイルは「研究に人を使わないから」と言った。確かにそう言った。

でもプロジェクトは来夏や父さん、母さんをさらってる。

しかも、人体実験を毎日のようにやっていたと来夏が言っている。

どうも俺の知ってる『プロジェクト』とレイルの言ってる『プロジェクト』が同じとは思えない。

あるとすれば、別の『プロジェクト』。

それか……………レイルが騙されている。

「レイル、少し確認したいんだけど」

「いいぜ。何だ？」

「レイルの言ってるプロジェクトって構成員がほとんど元管理局の
研究員？」

「ああ、なんで知ってたんだ？」

フエイト姉さんの教えてくれた事と合ってる。
ってことは

「レイル！騙されてるよ！」

「は？何言ってたんだ？」

「俺が捜査官でもないのにこの捜査に参加した理由を言ってたなかつ
たよね」

「ああ……」

「それはね、俺の母さんがプロジェクトに捕まってるからなんだ」

- レイルside -

「それはね、俺の母さんがプロジェクトに捕まってるからなんだ」

は？

今、来夢はなんて言った？

「母さんがプロジェクトに捕まってる」だと？

そんなはずない！だって俺達は人を傷つけない組織なんだ

「来夏と父さんも少し前まで捕まってて毎日のように実験されてた」
人を傷つけないって言ったのに！

「父さんは逃げようとして殺された」

「そんな…そんなはず……ない……」

「本当なんだ」

「俺は…そんな組織に手を貸してたのか……」

「俺の言う事を信じるのか？」

「ああ、お前はもう俺の親友だからな」

「うん。ありがとう」

- レイルside out -

「じゃあ、プロジェクトを抜けるんだな？」

「ああ。そして、プロジェクトを潰す」

「よし！…これからもよろしくな！…！」

「おう！…！」

俺達はおもいつきり拳を突き合わせた。

C
o
n
t
i
n
u
a
a
l
l
a
p
r
o
s
s
i
m
a
v
o
l
t

第15話 レイル・デュアリス（後書き）

どうも、カルタスです。

「来夢です」

今回は来夢だけです。

「よろしく」

それにしても良かったな。レイルがダークサイドから帰還して。

「ダークサイドって…」

俺レイルが1番好きなんだよね

「ええ！？主人公を前にして言う事じゃないだろっ！！」

まあまあ、もちろん来夢も好きだぞ。

「気持ち悪いわっ！！」

来夢1人だとテンション高いね。

「うっ……」

まあ、いいや。

今回はもう終わりにしよう。

「うん。」

「次の更新は6月16日です」

「そういえば、1万PV達成記念企画は質問がこなかったから消滅だよ」

「軽いな!？」

「まあね。」

「てゆうか、まだ×切り日じゃないじゃん。たしか明日だよな?」

「そうなんだけどさあ。」

「あと1日だけじゃん。」

「もうこないかな...?」って。

「諦めたのか...」

「まあ、あと1日あるので何かある方は送って下さいね。ではでは。」

「さよなら〜」

第16話 ある休日、あるカフェで

レイルと話をしてから4日。

普段、俺達は毎日何人かずつ交代で休みをとっている。
今日は俺が休みの日。

「今日も模擬戦するか？」

そして、レイルも休みの日……

「なあなあ〜どうするんだよ〜」

はあ……話すとやっぱり少しウザいな。

「俺は用事があるんだよ」

「用事？なんだよ」

「ああ」

俺はこの後後悔する。

なんで教えてしまったのか、と。

「姉さん達と会うんだよ」

「姉さん？てことはなのはさんに会うのか!?!?」

「あ、ああ」

「もしかして、フェイトさんも？」

「そうだけど……」

「俺も連れてけ！」

え……

「拒否したい」

「なんでだよ！？いいじゃんか！！！」

「い・や・だ」

「な・ん・で・だ！？なのはさんとフェイトさんはお前のもんじゃねーぞ！！！」

「お前のもねえよ！！！」

「なのはさんとフェイトさんはみんなのもんだあー！！！」

「違いよ！！！」

あれ？前もこんな会話しなかったか？

「なあー頼むよー」

「うげえよ」

「お願いします!!」

レイルがいきなり土下座をしてきた。

「…お前、プライドないのか……?」

「2人の為だ」

いや、2人の為にはなっていないよ……

「お願い!」

「あー、もうわかったよ。今、姉さんに聞いてみるから」

来夢はレイルから離れ通信を開く。

「あ、なのは姉さん」

『来夢、どうしたの?』

「今日の事なんだけどさあ、レイルも会いたいって言ってるんだだけ…」

少し声を落として言う。

『レイルくん?べつにいいよ』

「あ、そう?じゃあ、後でね」

別れを告げ通信を閉じる。

「レイルー、姉さんダメだつてえー!!」

「嘘つくな! いったって言うてただろ。聞こえてたぞ!」

ええ!?

聞こえてたの!?

「美女の声は聞き逃さないぜ、俺はな!」

なんて奴だ……

「参りました」

「おう! はやく行こーぜ!」

こうして、2人は本局を出た。

ここはとあるカフェ。

1番奥の席には来夢とレイルが座っていた。

「少し早く来過ぎたな」

「まあ、待たせるよりはいいんじゃないかね?」

「まあな」

「そういえば、なんでなのはさん達と会った？」

「べつにたいした理由はないよ。最近会ってなかったから会おうかな？って」

「ふうん。俺は居ていいのか？」

「なんで来てから聞くんだ……まあ、居てもいいよ」

「そうか。じゃあ、なんか注文するか」

レイルはメニューを広げる。

「うん。腹減ったな……」

「俺、アイスコーヒー」

「うん……」

レイルは唸り続ける。

「早くしろー」

「待ってくれよ。よし。これにしよう」

レイルが選んだのはチョコレートパフェ。

「すみません」

近くのウェイトレスを呼ぶ。

「えーと、アイスコーヒー2つとチョコレートパフェ」

「パフェのサイズはどうなさいますか？」

「1番でかいの」

「ジャイアントサイズですね？かしこまりました」

ジャイアント……

「レイル、食べるのか？ジャイアントって言ってたぞ」

「大丈夫だ。ジャイアントって言っても普通のパフェの2倍のサイズとかな」

それでも充分でかいが…

「こちらアイスコーヒーになります」

「苦っ！」

「そりゃコーヒーだからな」

「そつえば、俺コーヒー飲めないんだっつた」

「はあ！？」

「じゃあ、何で注文したんだよ！」

「なんかノリで」

何のノリだ……

「てかパフェ遅くね？」

「確かに少し遅いな」

その時、それは現れた。

「!?!」

「こちらチヨコレートパフェジャイアントサイズになります」

「なっ!?!」

レイルもかなり驚いているようだ。

「これは……」

完全に想像以上だった。

まず、容器がおかしい。

普通のパフェは縦に長い。

しかし、これは…横に広い。

直径40cmはあるだろう。

テーブル一杯だ。

その上にアイスやらフルーツやらクリームやらが積み重ねてる。

『盛り付けられている』ではない。

『積み重ねてる』だ。

「ヤベエな……」

「ああ……」

「手伝ってくれるか……?」

「ああ……」

これは2人でもキツイかもしれない。

「……とりあえず食ってみるか」

レイルがスプーンを取って口に運ぶ。

「……うまい」

「そうか」

「……うまい……」

叫ぶほどうまいようだ。

「どね」

俺も一口食ッる。

「……うまい」

「うまいっ!!」

叫ぶほどうまかった!

それから10分後。

「お待た

「ごめんね。遅く

「あ、姉さん

「……何をしてるの……?」

「何って、パフェを食べてるんだけど?」

「それはわかるんだけど……」

「まあ、座ったら?」

「あ、うん

「で、それは何?」

「なのは姉さん、さっきからそればっかだね。これはパフェだよ

「いや、大きさがパフェではないような……」

「やだなあ、フェイト姉さん。パフェだよ」

「これこの店で1番でかいパフェらしいですよ」
「レイルが簡単に説明する。」

「そうなんだ」

「2人も食べてよ」

「いいの?」

「はい。俺達だけじゃキツイんで」

「そう。じゃあ、いただきます」

「いただきます」

さあ、この2人はどんな反応をするんだろう?

「これは……」

「とつても……」

「「美味っ!!」」

姉さん達の声がそろった。

おお……まさかの「美味」
しかもシンク口。

「……………」

「……………」

「姉さん？」

「……………」

「……………」

ダメだ…反応しない。

「すいませ〜ん。メロンソーダ」

隣ではレイルがメロンソーダを注文していた。

「お前コーヒー残ってるぞ？」

ほとんど飲んでないし。

「それは後で飲むよ」

「あつそ」

「はあ〜おいしかった」

「「ちそつさま」

ん？

今、食後のあいさつが聞こえたような…

姉さん達の方を見る。

「なにいいい!？」

「どうしたんだ？」

「パ、パ、パフェが！」

「パフェがどうかし
」

レイルも言いながら姉さん達の方を見る。

そして、気付く。

「「パフェがない!？」」

そう。パフェがなかったのだ。

姉さん達の前(と言っても容器がでかいので俺達の前でもある)には空の容器だけが残っていた。

「マジかよ…」

「俺達4分の1くらいに10分かけたんだぞ!？」

「ああ
」

つまり残りの4分の3をこの短時間
15分くらいで完食したのだ。

「どうしたの？そんなお化けを見たような顔して」

この時の俺とレイルは同じ顔をしていただろう。
そして、同じ事を考えていた。

化け物だ……と。

だからこうなった。

「2人共、今と……っても失礼な事考えてたでしょ？」

「いえ、滅相もない」

「怪しいなあ」

姉さん達の目が、目があ！

「怒らないから正直に言っつて？」

「……」

「執務官つぼく吐かせることも」

「「ごめんなさいっ！！正直に言います！化け物だと思いました！」

またしても見事にハモった。

「へえ……化け物……」

「これはお仕置きが必要だよね？なのは」

「うん。お話しなきゃね。フェイトちゃん」

姉2人は頷き会っている

「ここじゃあ他の人に迷惑がかかるからそろそろ行くつか」

ヤバイ！

『レイル、なんとかここに居続けるぞ！』

『おう！』

俺達はここにいれば大丈夫だと判断した。

「姉さん、俺達朝から何も食べてないんだ。だから、ちょっと待っててくれない？」

「お昼ご飯なら私達で作ってあげるよ。もちろんお話の後にね」

「ここで食べたいんです！」

「レイルくんは私の料理食べたくないんだ……」

「あ、いえ、そうゆう訳じゃ……」

『来夢。俺には無理だ。後は頼む』

はあ！？

俺にも無理だからっ！！

「早く行こう？」

うー。何か考えなきゃ。

『レイル、ごめん！尊い犠牲になってくれ』

『え！？何！？何なの犠牲って！』

レイルの声を見殺して話し始める。

「姉さん。報告があります」

「何かな？」

「レイルがこの前の裸は良かったとか次の標的はフェイトさんだぜとかほざいてます」

「ええ！？」

「その事は忘れてくれるって言ったよね……？」

「レイル、標的ってどうゆう事かな……？」

「えーと、そんなこと言ってませんよ？」

その言葉を聞いて2人は来夢に視線を向ける。

「レイルは嘘をついてる。きつとこいつの脳内では今2人は服を脱

がされてるはずだよ」

「「……………バインド」」

レイルが桜色と金色のバインドによって拘束される。

「じゃあ、私達はレイルくんとお話してくるから」

「うん。じゃあね、なのは姉さん、フエイト姉さん」

「ら、来夢！助けてくれ！」

「俺は本局に戻ってるからなー」

来夢はレイルの「呪ってやるー」という言葉を聞きながら合掌するのだった。

そのレイルはというと次の日の朝「俺は俺、パフェはパフェ……………」
という謎の言葉を呟きながら帰ってきた。
傷だらけの体で……………

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t

第16話 ある休日、あるカフェで（後書き）

どうも、カルタスです。

「レイルだ……」

あれ？テンション低くない？

「だれのせいだよ！？」

俺のせいじゃないよ？

だれかのせいにするならやっぱ来夢じゃないかな。

「これ書いてるのお前だろ！！」

なぜパフェの話かと言うとパフェが食べたかったから。

「人の話聞けよ！」

でもアレを完食するとはなのはとフェイト、本当に化け物だよね

「デイバイン……」

「トライデント……」

とレイルが言ってた……

「ブレイカー……」

「スマツシャー!」

「ぎいやああああ!」

ふう…危なかった…

はい。お知らせー

次回の更新は6月19日です。

あと10話ほどで完結する予定です。

そして、Strikersをベースに続編を書こうと思っています。

では

第17話 アジトへ

「行ってくる」

俺と来夏、ロリアは今から海鳴に向かう。

「おう。あいつらのアジトについてたらこのスイッチで信号を送れよ」
レイルはそい言ってプレスレット型のスイッチを渡してきた。

今日の事はレイルとモコ、姉さん達にだけ教えた。

「りょーかい。で、信号送るとどうなるんだ？」

「その信号を元に俺がアジトに転移する」

「そうか…やっぱ、みんなに言ったほうがよくないか？」

「いや、少人数のほうが動きやすいと思う」

「そっか。じゃあ、頼むな」

「おう。気をつけるよー！」

レイルに一旦別れを告げる。

そして、俺達は光に包まれ海鳴に転移した。

「えー、海鳴に到着しました」

「お兄ちゃん、何言ってるの？」

「実況」

実況したくなつたから実況しました。
ただ、それだけです。

「今日の来夢はいつもに増して変だね」

いつもに増してって…

俺はいつも変だったのか。

知らなかった…

「まあ、さすがにちょっと緊張してな…」

「指定された時間まであと10分だね」

「うん。ロリア、【コンパニョアルマ】」

パンツ！

手を打ち合わせるとロリアが光に包まれ銃に変化する。

「ねえ、何でデバイスになるの？」

「何か、俺と来夏以外の人間がいたらまずいかなって」

「大丈夫だと思うけどなあ」

「そういえば、昨日は何してたの？お兄ちゃんとレイル」

「パフエ食ってた」

「「パフエ…？」」

「ああ、ちよつとクラナガンのカフェに行ったんだけどさ」

「男2人で？」

「いや、姉さん達と」

「うおい！？彼女に黙って女と楽しくお茶会か！？」

「そこでレイルが店で1番でかいパフエを頼んだんだよ」

「へへ、どれくらいだったの？」

「無視すんなあ！！」

あー、うつせえ。

「んーと、これくらい」

来夢は手で大きさを示す

「直径40cmくらいかな？けっこう大きいね」

けっこう？

かなりの間違いだろ？

「むーしーすーんーなぁー！ー！」

「でも、これくらいなら30分あれば食べられるかな？」

えー！？マジで！？

「みんなそんなに食べれるの！？」

「うーん…人によるけど甘いもの好きならいけるんじゃないかなあ？」

……………実況の来夢です。

スクープです！驚愕のスクープです！

女性はみんな化け物なのです！

「お兄ちゃん…今、とー…つても失礼なこと考えたでしょ？」

「いえ、べつに」

「しかも、全ての女の人を敵にまわしたね」

「う…無視…ぐす…しない…でよお…うう」

「ふっ、デバイスを持ってない妹など恐れるに足らず」

「デバイスだけが武器だと思ったら大間違いだよ 体だって立派な武器」

来夏が格闘家みたいなこといつてる…

「いくよー」

来夏が拳を振り上げる。

そして、その拳は俺の顔面に向かって

とんでこなかった。

「ぐふっ！」

今の声は何だ？

「あれ？お兄ちゃんじゃない人殴っちゃったみたい」

え！？

さっきまで誰もいなかったぞ？

そう思った来夏は自分の足元を見る。

そこには頬を腫らした金髪の女が倒れていた。

「誰？」

「おあ？」

「……………もう、いいよ……………」

ロリアが拗ねた。

「ごめんな、ロリア。今度パフェ奢ってやるから機嫌直してくれよ」

「ほんと……？」

「ああ」

「うんっ！」

ロリアは扱いやすかった。

「殴っておいて無視しないでくれる？」

「あ、ごめんなさい」

「まあ、いいわ」

「ところで、あなた誰ですか？」

「私？私はムーン。プロジェクトよ」

「ええ！？私、プロジェクトの人を殴っちゃったの！？ごめんなさい！！どうか、お母さんを殺さないで下さい！！」

来夏がすごい勢いで謝り始めた。

「心配しなくても殺さないわよ。大事な人質だもの」

それを聞いて安心したようだ。

「それより早く俺達を連れてってよ」

「あら。妹より母親を選んだのね」

「さっさと連れてけ」

「ちょっと、お兄ちゃん……」

来夏は俺の言葉遣いが気になるようだ。

「こいつは親父の敵だぞ？言葉遣いなんて気にするな」

「……うん」

「じゃあ、行くわよ」

「おう」

「はい」

3人は白い光に包まれた。

「ついたわよ」

「ここが、プロジェクトのアジト……」

何かお城みたいだ。

「はあ、疲れた。転移魔法はあまり得意じゃないのよね」

「そんなことはいい。俺達が来たんだ。早くお袋を解放してくれ」

「じゃあ、拘束させてもらっつわよ」

ムーンは俺達の腕を何かの機械で拘束する。

「そのデバイスは私が預かるわ」

「ああ」

「じゃあ、ついてきて」

俺達はムーンに続いて歩く。

「ついたわよ」

「お母さん……！」

「来夏……」

お袋は肌が異様に白く、喋るのも辛そうだ。

「はい。約束通り解放したわ」

お袋を拘束していた機械が外れる。

「よし。お袋を転移させるぞ。ロリア頼む」

「うん」

結局ばれて人に戻ったロリアが転移させる。

「よし。これでいいな」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

「ああ」

「あんた達もちゃんと約束守りなさいよ」

「わかってる」

「そう。なら、この部屋に入っててちょうだい」

部屋に入ると真っ白な空間が広がっていた。

「病院みたいだな」

「うん…」

「じゃあ、明日までじっとしててね」

「え？今日は？」

「今日は忙しくてね」

「そうか。わかった」

「はい…」

「じゃあね。あ、そうそう。この部屋監視されてるから2人で変なことしちゃダメよ」

「なっ…！し、しねえよ！妹だぞっ！」

「うう……／＼／」

「うふふ。じゃあねー」

ムーンは笑いながら部屋を出ていく。
ロリアはデバイスになれるので他の部屋らしい。

「ねえ、お兄ちゃん。レイルは」

「ちょいまち」

『そつゆづ話は念話でな』

『あ、うん。レイルはいつ呼ぶの？』

『うん。明日かな？』

『そっか』

.....

「暇だな」

「そうだね」

「寝るか」

「ねる!？」

「あ、ああ」

何か来夏が驚いていた。

「どうしたんだ？」

「だって私達兄妹だしやっぱそうゆうのはまずいかなって監視されてるみたいだし。あ、でもでも監視されてなかったらいいって意味じゃなくて」

……早口で喋りだした。
ついていけねえ……

「じゃあ、俺寝るわ」

……ま、いつか。
来夏はほつとこう。

俺は部屋の隅にあるベッドに潜り込んで目を閉じた。
病院みたいな臭いがした。

そして、来夏の独り言をBGMに俺は眠りについた。

C
O
N
T
I
N
U
A

A
L
I
A

P
R
O
S
S
I
M
A

V
O
L
T

第17話 アジトへ（後書き）

どうも、カルタスです。

惜しいっ！！！！

惜しかったぜ、日本！！

次のデンマーク戦に期待！！！！

ふう……

このおかしなテンションでわかる通りワールドカップの日本VSオランダを見てました。

いやー、ほんと惜しかったですねえ。

試合中について、叫んでしまいましたよ。

次回の更新は6月23日です。
感想なども待ってまーす。

ではでは

第18話 実験

ゆっさゆっさ

「うっん。気持ち悪い」

目を覚ますと何故か吐き気がした。

ゆっさゆっさ

「お兄ちゃん起きて」

「ああ、来夏。頼む。揺らさないで……」

「お兄ちゃんが起きないからでしょ」

「ごめん。　　うっ……」

口を開いたら胃の中身をぶちまけてしまいそうだ。

「まったく……」

俺が必死でたえていると来夏が背中を摩ってくれた。

「やっと起きた〜?」

声のする方を見るとムーンが笑顔で立っていた。

「ありがとう、来夏。で、お前は何の用だ?」

「お仕事の時間よ」

「仕事？」

「あなた達の研究よ」

ヤベエ。

もうそんな時間かよ。

レイルに信号送ってねえ。

「どうしたの？何か焦ってるようだけど」

「いや、べつに」

「そつ？じゃあ、行きましょ」

俺と来夏は部屋を出て、ムーンについていく。

歩きながら気になっていた事をムーンに聞くことにした。

「なあ、お袋は転移させちゃったぞ？」

「は？だから何？」

ムーンも来夏も意味がわからないという顔をしている。

「だから、お袋はもう人質じゃないんだぞ？」

「何言ってるの？お兄ちゃん」

「お袋はもう安全な場所に転移させた。だから、俺達は心置きなくプロジェクトを潰せるぞ」

「あつ！」

来夏もやっとわかったようだ。

「気付かなかった訳じゃないだろ？」

「あら！ほんと。全然気付かなかったわ。どうでしょう？」

ムーンは明らかに演技だとわかるような口調だ。

「てめえ……」

「そんなに睨まないでよ」

「……………」

こいつの口調、絶対わかってた。

何だ？何か考えがあるのか？

「あ、そうだ。ムーンさんの名前って本名なんですか？」

来夏はムーンに話し掛けている。

ムーンの性格もあってプロジェクトにもかかわらずあまり警戒心を抱いていないようだ。

「私の名前？偽名よ。コードネームって言うの？」

「そうなんですか」

「本名を教える」

「なあ〜に？私の本名が気になるの？でも、あなたはあんまタイプじゃないからごめんね〜」

くっ…こいつといい、この前の仮面の奴といいプロジェクトの奴はむかつく。

「あんたみたいなおばさん興味ないよ。まったく…」

「何ですって！？まだ36よ！」

「36歳は完璧おばさんだ。ま、レイルなら歳は気にしないと思うけど」

「レイル…！？」

ん？何か『レイル』に反応したな。

「あんた達が管理局に潜入させたスパイだろ？もしかして知らない？」

「あ、いいえ。そんなことないわよ。知ってるわよ」

「そうか？」

かなり動揺してるな。

「ま、もう味方だけだな」

「味方？てことは私達を裏切ったの？」

「そうだぞ。残念だったな」

「そつ…」

ムーンは安心したように息をはいた。

こいつ、どっか嬉しそうだな。

裏切られたのに、何でこんな顔してるんだ？

「おい、ム」

『ねえ、お兄ちゃん』

俺がレイルの事を聞こうとすると来夏が念話で話し掛けてくる。

『なんだ？』

『ムーンさん、レイルとどんな関係なんだろう？』

来夏も俺と同じ事を思ったようだ。

『うーん、何かありそうだけど…聞いてみるか』

「おい、あんたレイルとどうゆう関係だ？」

「ちょっと、お兄ちゃんストレート過ぎ！」

「そうか？で、どうなんだ？」

「…べつに何も無いわ……。顔と名前を知ってるだけ。それだけ」

怪しい……

怪しすぎる……

「ほんとか？おま」

「着いたわよ」

「お、ああ」

話してるうちに研究室についてしまった。

「じゃあ、私はこれで」

ムーンは逃げるように研究室から出ていく。

それと入れ代わりに数人の研究員が入って来る。

「あなたがヒズメ式の継承者ですか」

「ああ」

「早速、研究させてもらいます」

「あのさあ、研究するのはいいんだけど今日は俺だけでいいかな？」

「はい？2人共って聞いてますけど…」

「そうなんだけどさあ、俺の妹調子悪いみたいなんだよね。だから、今日は俺だけで頼む」

「うーん、なら1人で2人分こなしてもらいます」

「わかった」

「ちょっと、お兄ちゃん!？」

「大丈夫だ」

「でも……」

「これたのむな」

半泣きの来夏にレイルから貰ったブレスレットを渡す。

「これ……」

『タイミングを見計らってレイルを呼んでくれ』

『……うん。わかった』

「準備ができたなら診察台に寝て」

「りょーかい」

俺は服を脱ぎ、診察台に上がった。

来夏 s i d e

来夏は今走っていた。全速力で。

早くさっきの部屋に戻ってレイルを呼ばなきゃいけないのに！

しかし、どれだけ走っても目的地は見えてこない。

はやい話が迷った。

迷子になった。

もうっ！！

わかんないよー！

どうやったなら戻れるの！？

来夏の目に少しずつ涙が溜まっていく。

その時、来夏の視界にある案内が映った。

あ！

あそこなら誰にも見つからないかな？

数十秒立ち止まって考える。

よし！

来夏は人がいない事を祈りつつそこに入って行った。

来夏 side out

「 あ がっ 」

悲鳴が声にならない。

来夢は今、身体に電気を流されていた。

そのせいで、先程から失神を繰り返している。
電撃により失神し、電撃によって目覚める。
これの繰り返しだ。

実験開始から数十分。

来夢が何度目かの目覚めを迎えた時、ようやく電撃が止まった。

「はあはあ……」

「まだへばらないで下さいね。まだまだ続きますので」

「……ああ……だい……じょうぶ……だ」

来夏達はずっとこんな事をされてたのか。
知っていればもっと早く助けたのに……

「次は戦闘データをとらせてもらいます。ついてきて下さい」

研究員の声を聞き、来夢は我に帰った。

「…わかった」

研究員についていくとそこにはまたしても白い空間が広がっていた。しかし、今までとは比べものにならないほど広い。

「それでは、始めます。中に入って下さい」

来夢は中に入る。

すると、何もなかった空間に人が現れた。

「今からあなたにはそれと戦ってもらいます」

「それ？」

「はい。それです」

「人と戦うのか？」

「いえ、それは我々が開発した戦闘人形です」

「そうか、わかった」

「では、測定開始」

研究員の声を合図に戦闘人形は来夢に襲い掛かってくる。

来夏 side

よかった、誰もいない。

来夏は周りを確認し、プレスレットのスイッチを押す。
その瞬間、目の前に銀色の魔力が集まり始める。
そして、バリアジャケットに身を包んだレイルが転移して来た。

「よお、結構遅かったな」

「レイル、早く行こう!」

「あ、ああ。ところで、来夢は?」

「実験されてる!」

「!?!よし、行こう!」

「あれ?いない...」

来夏とレイルはさつきまで来夢がいた研究室に来ていた。

「さつきはここにいたんだな?」

「うん...」

来夏の返事を聞いたレイルは部屋を物色し始めた。

「何してるの?」

「何か手掛かりが残ってないかと思ってな。 お、あった」

「はっ！」

「これ、スケジュールだな。うーんと、今は第2測定室か」

「第2測定室？どこだろう」

「ここはな、実験をするための部屋が集まっているフロアだ。だから、上のフロアを探せば見つかると思う、たぶん」

「そうなの？じゃあ、早く行こう！」

「おう！」

2人は研究室を出て、来夢のもとへ走り出した。

来夏 side out

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t

第18話 実験（後書き）

どうも、カルタスです。

サブタイトルが思いつきません……
何故だ…

まあ、いつか。

次回の更新は6月26日です。

ではでは

第19話 覚醒

「がはっ…！」

くそっ…あんなのよけられねえよ……

今、来夢は戦闘人形と戦っていた。
いや、正確には逃げていた。

「何が戦闘データだ。チェスターもロリアもないのに、どうやって戦えばいいんだよ！」

そう、来夢はデバイスを持っていないのだ。
だから逃げるしかない。

他の魔導師ならデバイス無しでも戦えるかもしれないが、来夢はなんととっても実戦経験が少ない。
だから、逃げるしかないのだ。

『そろそろ、5分です』

スピーカーから声がする。

「まだ、5分かよ…！　　がっ！」

来夢は急接近してきた人形に反応できず腹部に蹴りを入れられ、壁までとばされる。

「いってえ……おわ！」

人形の動きは止まることなく、なおも攻撃を繰り返して来る。来夢はそれを紙一重でかわす。

「ほっ……やっ……うおっ……」

『 20分経過しました』

スピーカーからその声が聞こえた瞬間、人形が動きを止めた。

「ふう……死ぬかと思った……」

でも、痛みがないな……

『今から1分後に再開します』

「はあっ！？1分!？」

『ええ』

「早過ぎだろ!」

『……………』

「無視かよっ!」

『……………』

……もう、反論するのが馬鹿らしくなってきた。

『1分経過しました。再開します』

その声を聞き、来夢は前を向く。

そこには先程の戦闘人形が2体立っていた。

来夏 side

「ねえ…見つかったちゃうよ」

「うーん、俺がやるよ」

来夏とレイルは来夢がいると予想した2階にいた。

「え？やるって…」

「俺があいつらを潰す。ダグ、フォームツヴァイ」

『了解しました』

ダグライトが光り二刀流になる。

「ん？ああ、大丈夫だ。あいつら機械だから」

来夏の心配そうな顔を見たレイルは説明をする。

「じゃ、ここで待ってるよ」

言うと同時にレイルは駆け出す。

そして、目に見えない程のスピードで、しかし確実に機械人形を停止させていく。

「すごい……」

「終わったぞー」

「あ、うん」

来夏はレイルの傍まで駆ける

「分かれ道だけど、どっち行くの？」

「ん〜、俺のかんだと左」

「かん!？」

「だって道わからないし」

「じゃあ、左に行こう」

「おう」

私達は少し悩んだあと左に進むことにした。

その時、後ろから誰かが話し掛けてきた。

「ねえ……」

その声を聞き、レイルは相手の首にダグライトを突き付ける。が、相手の顔を見てすぐに下ろした。

「おまえ……」

来夏 side out

ロリア side

来夏とレイルが分かれ道に差し掛かる30分程前。

「それでは始めます」

「ねえ、来夢は？」

………また無視された。

さつきからどんなに話し掛けてもちゃんとした答えが返ってこない。

「何するの？」

白衣の人は私の質問を無視して私の手と足を固定し始めた。

「ねえ………」

怖い……

「ねえってば………！」

「いきます」

「っ!!」

突然体に衝撃が走った。

「いたいっ!」

今まで、来夢と離れたことなんてほとんどなかった。
たぶん大喧嘩した時だけだ。
だから、来夢がいない不安もこの痛みを増幅させていた。

「んーっ!」

激痛という程ではない。
でも、涙が出てきた。

「うっ…!!」

来夢。助けて。いつもみたいに。助けに来て。来夢。

「ぐっ…!!」

痛みが強くなる。

来夢は「来ないほうがいい」って言うてくれた。
だけど私はずいてきた。

恋人の母親の為。
大切な友達の為。

なにより、私の恋人　来夢の為ならがんばれるって…
がんばるって…

がんばりたいって…
そう思ったのに…

「ああっ!!」

なのに私は助けを求めることしかできないの…?

「やあっ…!!」

来夢がいないと戦うことも出来ないの…?

「ぐうあ……」

それじゃあ、ここにいる意味ないよ…

強くなりたい……

1人でも戦えるようになりたい……!!

来夢の恋人として…!

親友として…!

そして、パートナーとして…!

私は1人で戦える力が…

来夢の助けになる力が欲しい!!

そう願った瞬間。

心の底から願った瞬間。

手と足を拘束していた鎖が弾け飛んだ。

そして、自由になった私の両手は二丁の拳銃を握っていた。

ロリア side out

来夏 side

私とレイルの後ろに現れたのは

「ロリア!？」

拳銃を握ったロリアだった。

「おい、大丈夫か!？」

倒れそうになるロリアをレイルが支える。

「どうしたの?それにその拳銃…」

「ちょっと研究室から逃げて来たの」

「マジかよ!?!大丈夫だったか?」

「うん。新しい能力も手ちからに入れたしね」

「新しい能力ってそれか?」

レイルは拳銃を指差しながら尋ねる。

「うん。でも、今は来夢を助けないといけないから、説明は後でね」

「そうだね　ってなんで知ってんの？」

「んー、恋人だからかな？」

「いいなあ、そうゆうの。俺も彼女ほしー」

「ほんと。お兄ちゃんは幸せ者だなあ」

「えへへ。そうかな？」

「お、着いたみたいだ」

「っ!？」

そこには2体の戦闘人形を相手に逃げ回っているお兄ちゃんがいた。

「助けなきゃ！」

それを見たロリアが飛び出そうとする。

だが、それをレイルが手で制した。

「まで！あの人形はたぶん倒せない。来夢にはもう少し耐えて貰おう」

「でも……………」

『残り1分です』

「1分ぐらい来夢なら楽勝さ」

「うん…」

それからの1分間は凄まじく長かった。

『終了です』

その声で、戦闘人形が停止した。

「よし！行くぞ。来夏はここで待ってる」

「うん！」

レイルとロリアは部屋のドアを破壊し、突入する。

「なんだ、おま」

2人は最後まで喋ることも許さず、次々に機械研究員（命名、来夏）を破壊していく。
先程とは違い停止ではなく破壊。
それも粉々に。

「来夏！もういいぞ」

レイルに呼ばれて私は部屋に入る。

「お兄ちゃん、大丈夫！？」

お兄ちゃんは立ってるのも辛そうで、今にも倒れそうだった。

「ああ……だい……じょうぶ……」

「来夢!？」

ついに倒れそうになるお兄ちゃんをロリアが支える。

「ロリア、お兄ちゃんは？」

「大丈夫。気絶しただけ」

「そうか、よかった」

「これからどうするの?」

「そうだな……俺はプロジェクトを潰す。お前らは帰ってもいいぞ」

「ロリアはどうするの?」

「私は……私もここに残る」

「そう」

「来夏はどうすんだ?」

「私は……」

私はいても足手まといになるだけかな。デバイスもないし……でも、私だけ何もできないのも耐えられない……

やっぱり

「私も残るよ」

「うん！じゃあ、チエスターを使うといいよ」

「え？それじゃあ、お兄ちゃんのデバイスが…」

「大丈夫だよ。契約者である来夢なら私の作り出したデバイスを使えるから」

「そうなんだ、ありがとう」

「よし。じゃあ、来夢が起きたら反撃開始だな！」

「うん！！」

来夏 side out

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t

第19話 覚醒（後書き）

どうも、カルタスです。

一日遅れてごめんなさい。

言い訳を言うなら「忙しくって」ですかね。

出来はかなり微妙です…

次回の更新は6月30日です。

ここに来て文章構成がさらに下手になりましたが、最後までがんばります。

ではでは

第20話 対面

「もともと【コンパンニョアルマ】は【インスイエーメ】というスキルの一つなの」

俺達は今、ロリアに突如目覚めたスキルの説明を聞いている。

「意味がわからないんだけど…」

「つまり、私が持つてるスキルは【コンパンニョアルマ】じゃなくて【インスイエーメ】ってこと」

「はあ………」

余計わからん……

「ようするに、ロリアが持つてるレアスキルは【インスイエーメ】で、その能力の一つが【コンパンニョアルマ】。もう一つが新しく手に入れた能力ってことだな？」

「そうそう」

ロリアの代わりにレイルが説明してくれた。

「なるほど……」

「ねえ、その新しいやつの名前はなんて言うの？」

「名前？ないよ」

「え？ないの？」

「うん。そもそも、【コンパンニョアルマ】だって私と来夢が勝手につけた名前だもん。ねっ」

「ああ。まあ、正確にはロリアが1人でつけたんだけど」

「じゃあ、また考えるのか？」

「うん…また考えるのも面倒だなあ」

「じゃあ、今までの【コンパンニョアルマ】新しいのが【インスイエーメ】でいいんじゃない？」

「うん！それなら考える必要ないし」

「じゃ、決定」

「で、これからどうするの？」

「まずはチエスターを取り返そう。来夏が使うからな」

レイルの提案にみんなが頷く。

「そのあとは暴れるだけだ！」

『オーー！！』

うわ…つい拳を突き上げちゃったよ。

恥ずかし…

「そういえば、ここの研究員ほとんど機械だったんだな」

「そうだぞ。人間は20人くらいかな？」

「気付かなかったよ」

「じゃあ、ムーンさんも機械なのかな…」

来夏が少し寂しそうに呟く。

あいつは人間っぽかったけどなあ。
なんとなく。

「多分そいつは人間だと思う。コードネームを与えられてるのは人間だけだから」

そうなのか。

確かに、コードネームとか言ってたな。

「それで、機械は潰すとして、人間はどうすんだ？」

「そりゃ、捕まえる」

「了解。それじゃあ、行くか」

「……なあ、なんで誰もいないんだ…？」

「知らねえよ…」

「もしかして、逃げられたのかなあ…?」

全員が心配してることを来夏がさらりと言う。

「言うな!」

「ひゃいつ!」

レイルのあまりの剣幕にさすがの来夏も噤んでしまったようだ…

「それにしても、本当に誰もいないね」

「2階は一通り見たけどいないみてえだな」

「チェスターもいないしね」

「じゃあ、次は1階だな」

「その必要はないわ」

俺達が階段を下りようとする、下からムーンが現れた。

「どういう意味だ」

「下にも人はいないわよ」

「ほんとか?」

「レイル!？」

ムーンは今初めてレイルに気付いたみたいだ。
そして、明らかに動揺し始めた。

「ん? あんた俺のこと知ってんのか？」

「え、いいえ。スパイだったことと名前しか知らないわよ。ええ」

凄まじく嘘が下手だな。

こんな嘘でレイルが騙される訳

「そうか」

「騙されたああああ!？」

あんなので騙されるの!？

よくそんなんでスパイやってたな!!

「なんだよ。美女の言葉に嘘はねえよ？」

「知るかつ!」

「黙りなさい!」

俺がレイルにツッコんでたらムーンに怒鳴られた。

「あなた達は黙ってついて来て」

「どういづことですか？」

「私があなた達をボスのところまで連れて行くわ」

「そうなんですか。ありがとうございます。じゃあ、みんな行いづ
せー」

「いやいやいやいや」「疑いたくはないけど畏かもしれないよ？」

「そつだよ」

「もう少し疑うことを知りなさい」

全員でレイルを説得する。ムーンまで説得に回っている。

「まあ、いいじゃん。どうせ潰すつもりだったんだし」

「そつだけど…」

「どつでもいいから早くついて来てー！」

「はい」

レイルは元気に返事をして、ムーンについていく。

「俺達も行くか。レイルも何か考えてるだろうし」

「そつだね」

「うん」

こうして俺達もレイルの後を追った。

「ついたわよ」

「ここは」

「トイレ？」

「しかも、女子トイレだぞ」

「この中にボスがいるんですか？」

来夏は真剣に聞いているみたいだけど、たぶんそれはない。

「いいえ。ここからボスのところまで転移するのよ」

「へー」

「ところで、なんでお兄ちゃんとレイルは入口に突っ立ってるの？」

「だって、なあ？」

「ああ、女子トイレだし」

俺達もちゃんと男な訳で女子トイレに入るのには少し抵抗がある。

「そんなこと？誰もいないんだからいいじゃん」

「まあ、しょうがないな」

「そうだな」

無理に自分を納得させて、トイレに入った。

「早速転移するわよ」

ムーンそう言ってトイレの壁をいじり始める。

しばらくすると、トイレ全体が光りだし俺達は転移した。

転移した先もトイレだった。きっと女子トイレだろう。

俺達は早々にトイレを出た。

「さっきのアジトとほとんど変わらないね」

ロリアの言う通りほとんど同じ造りだった。

「ついて来て」

早足で歩き出すムーンを追う。

「あんださあ、もしかして俺達の味方だったりする？」

俺はずっと気になっていた事を聞く。

「そ、そんな訳ないじゃない。私は敵よ。敵以外の何者でもないわ」

味方が……

「じゃあ、どうして協力してくれるんですか？もしかして、裏切り者？」

「な、何を言っているの？」

「まあ、いいけど。それより、ボスってどんな奴なんだ？」

俺の予想だとデブでカエルみたいな顔をした奴なんだが。

「それは自分の目で確かめなさい。もう着いたから」

「はやっ！！」

「予想外！！」

「お兄ちゃんとレイル、うるさいよ」

「はい……」

来夏に怒られちゃった……

「入る前に一つ忠告しといてあげるわ」

「注意だろ」

「うるさいわね。すぐに捕まえようとはしない方がいいわよ。それと、コレを渡しておくわ」

ムーンはそう言って、来夏に見覚えのある指輪を渡した。

「チエスター！」

《皆様ご無事でなによりです》

「お前もな」

「よし、チエスターも戻ってきたし行くか」

レイルの言葉にみんなが頷き、扉を開いた。

「連れて来ました、ボス」

「ご苦労」

ボスは俺の予想に反していた。

デブでもなければ、カエルでもない。なかなかのイケメンだった。

「君達か。私の研究施設を破壊したというのは」

「ああ」

「俺達は《プロジェクト》を潰しに来た」

「そうかそうか。では、私は自分の研究を守る為に君達を潰すとし

「よし」

「やってやるさっじやねえか」

レイルはいつでも戦える体勢だ。

「しかし、その前に名乗らせて貰おう。私の名はハデス。《プロジエクト》のボスだ」

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t

第20話 対面（後書き）

どうも、カルタスです。

遂に《プロジェクト》のボス登場！
名前はいつも通り適当です。
カッコイイな〜と思ったやつ。

次回の更新は7月3日です。

では

第21話 傷付けられぬ戦い

「私は捕まる気などないよ。それに、君達に私を捕まえられるとは到底思えない」

「なんだと…!?!」

ハデスに気を取られている隙に俺達全員がバインドにかけられた。

「気付かなかつただろう? その程度で私を捕まえようなんて。私も舐められたものだ」

バインドを解こうとするが何重にもかけられていて、全く解けない。

「さて。君に問う。私に協力する気は?」

そう俺に聞く。

「ない」

「君は?」

「ないよ」

ロリアも首を振る。

「君は?」

「ないです」

来夏もロリアと同じ反応だ。

「君は？ ないか…」

最後のレイルは視線だけで拒否する。

「残念だ。協力してくれないなら君達に用はない。死んで貰おう」

「くっ……………！」

さっきからずっとバインドを解こうとしているのだが、いつこうに解ける気配がない。

むしろ、きつくなっているような気がする。

「解こうとしても無駄だよ。それは、私が考え出したトラップバインドというものでね、解こうとすればするほどきつくなっていくんだ」

なにっ！？

どうりで解けないわけだ。

「君達には死んでもらうが……………そうだな、戦えない相手と戦って貰おうか」

「戦えない相手…？」

「ああ。君には妹と戦って……………いや、殺し合って貰おうか」

「何言ってるんだ」

俺と来夏が殺し合うなんてありえない。

ハデスは俺を無視して今度はレイルの方を向いた。

「残った2人も殺し合って貰うよ」

「お前はさっきから何を言ってるんだ？お前が何をしたらって俺達が殺し合うなんて」

レイルが鼻で笑う。

「ふっ、こつすればいいのさ」

そう言ったハデスは懐から注射器をだした。
そして、それを 来夏とロリアの首に突き刺した。

「あっ………!!」

「くっ………!!」

その痛みに2人は顔を歪めて呻く。

「ロリア!!来夏!!」

「無駄さ。もう君の声は届かない」

「どっという事だっ!!」

「今のはまあ、いわゆる毒薬だ。それで、この2人の憎しみを増幅

させただよ」

「憎しみだと……？」

「そう。人は誰もが少なからず憎しみを持って生きている。嫉妬や怒り、悲しみなどの負の感情は全て最終的には憎しみになるのだよ」

「つまり、2人の俺達に対するそういう感情を憎しみまで増幅させ
たってことか」

俺はよくわからなかったけど、レイルは理解したようだ。

「理解が早くて助かる」

「それじゃあ、本当に俺達を殺しにくるぞ……」

「では、早速始めよう」

ハデスが指を鳴らすと俺は異空間に飛ばされた。
レイルはいない。

が、たぶんレイルも他の空間に飛ばされたんだろう。

そして、俺の他にもう1人。来夏がこの空間にいた。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんだけ……幸せに暮らして……憎い……
……お兄ちゃんが……憎い……憎い憎い憎い憎い……憎い……」

もう来夏の瞳は俺以外を映してはいなかった。

「やるしかないのか……チエスター、セットアップ」

《Set Up》

いつのまにか俺の指にはまっていたチエスターを起動する。

その瞬間、来夏が一直線に俺に突っ込んでくる。

「うあああああ!!!!」

速い!!!

俺は紙一重でその拳を避ける。

「チエスター、カートリッジを【バインド】に変更！」

《Change Cartridge【Bind】》

「はあああああ!!!!」

相変わらず突っ込んでくる来夏に向かって弾丸を連続で撃ち出す。

だが、来夏は全てをかわす。

そして、撃った体制のまま動けずにいる来夢の鳩尾に思いきり拳を突き出した。

「かはっ……………!!!!」

くそっ…

「チェスター、気絶させれば元に戻ると思っか？」

《恐らく、戻るかと》

「そうか」

どうにか気絶させないと。

「2丁リボルバー！弾は【ソニックムーブ】だ！」

《Mode Revolver・Two Hand Style・
Change Cartridge【Sonic Move】》

チェスターが2丁のリボルバーに変わり、カートリッジもソニックムーブに変更される。

「ソニック・バレット!!！」

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

これは俺の技の中で1番速い技。

こいつなら当たるはずだ。

「うつ……!!！」

思惑通り、全弾当たった。

パワーはかなり抑えたからダメージはほとんどないだろう。だが、弾が当たった衝撃で動きが止まる。

「今だ！ソニックムーブ!!！」

今度はカートリッジではなく、自分にソニックムーブを使用する。

高速で来夏に近づきチェスターで首の後ろを強打した。

「っ……っ！」

来夏が俯せに倒れた。

そこですかさずにバインド。

「ふう… なんとかなつたな」

来夢は疲れた表情でチェスターを待機モードに戻す。

「それにしても、どうやってここから《主！！》ん？どうした……
が…！」

来夢の脇腹を何かが貫いていた。

「何が……」

それは人の腕だった。

この空間にいる人間は来夢と来夏。

来夢は自分の腹を刺したりしない。つまりその腕はもう1人 来
夏のものであった。

「ふふ… お兄ちゃんには最後まで苦しみながら死んでもらうよ。ね
え… 痛い…？ 私達はずっとこれに耐えて来たんだよ？なのに… お兄
ちゃんは…」

「や…めろ…ぐっ…！」

来夏が腹の中で手を動かす。

《主！！大丈夫ですか！？》

「うるさいよ…。」

来夏は来夢の指からチエスターを抜き取り、踏み潰す。

「チエ…スター」

「もう、武器はないよ…？」

「ぐあっ…！！」

来夏は腕を勢いよく抜く。

そして、もう1度 今度は逆側を狙って手刀を突き出した。

レイルside

レイルも来夢とは別の異空間にいた。

「危ねっ！」

ロリアが撃ち出す弾丸を避ける。

何なんだよ。まさかほんとにロリアと戦うことになるなんて…

「ダグ、フォームツヴァイ」

ダグライトを二刀流にする。
そして、弾丸をはじいた。

「あー喋らないロリアってかなり不気味だな」

パンツ！ パンツ！ パンツ！

キンッ！ キンッ！ キンッ！

「うーん、どうしよう…」

来夢と違ってまだまだ余裕のようだ。

どうすっかなー？とりあえず、話してみるか

「おーい、俺を憎んでるんだって？」

「そう………」

「何でだよー。俺達友達だろ？」

「そうだけど………」

おっ、まだ友達って思ってくれてんだ。憎んでるのに。

「何でなんだ？」

「だって…レイルは来夢と仲良しなんだもん……」

「はい？」

「そのせいで私が来夢といられる時間が少なくなっちゃうんだもん……」

「も、もう一度言ってくれるか？」

レイルは聞き間違いかと聞き返した。

「来夢といられる時間が……」

「そんな理由で襲われてたまるかあああああ……！」

レイルは大声で叫ぶ。

どんな状況だろうとこんなことを言われたらツッコんでしまうだろう。

ましてやレイルである。ツッコまずにはいらなかった。

「そんな理由……？」

しかし、そのツッコミがロリアの癪に障ったようだ。

「手加減してあげようと思ってたけど、さっさと殺しちゃおう」

今、音符ついてたよ！？

絶対最後に音符ついてたよね！？

パンツ！パンツ！パンツ！

ロリアは銃をリボルバーに変え、連射してくる。

「スモールダガー!!」

それに対して、レイルはスモールダガーで応戦する。

「はぁ!!」

しかし、ロリアはそれを避けながら接近していた。

そして、レイルの頭目掛けて銃を横に振るう。

「ハッ、バカだなあ。俺に接近戦で挑むなんて」

レイルは銃を片方のダガーで受け止め、もう一方の柄でロリアの腹を突く。

「っ……!!」

つい膝をついてしまったロリアの脇腹を容赦なく蹴る。

いきなり蹴られたため、ロリアは受け身がとれず全身で地面にダイブする。

そして、そのまま意識を失った。

こうしてレイルは迅速に、しかしロリアへのダメージを最小に抑え気絶させて見せたのである。

レイル side out

C
o
n
t
i
n
u
a

a
l
l
a

p
r
o
s
s
i
m
a

v
o
l
t

第21話 傷付けられぬ戦い（後書き）

どうも、カルタスです。

先週の土曜日は更新出来なくてすみません。

どうも進まなくて……

もうすぐで完結なのに……

という訳で、もうすぐ完結な次回の更新は7月10日を予定してま
す。

ではでは

第22話 脱出！？（前書き）

お待たせしました。

では、ごうぞ。

第22話 脱出!?

「や、血、血が……」

来夢の耳に届いたのは自分の腹部が貫かれた音ではなく妹の悲痛な声だった。

「お、おい!どうしたんだよ」

来夢を貫ぬくはずだった来夏の腕は力無く垂れ下がっている。

「おいっ!」

来夢は脇腹の痛みも忘れて来夏を揺する。

だが、なおも来夏は同じ言葉を繰り返すだけ。

「どいしたんだっ……くっ……」

来夏に近付こうとした時、傷口から盛大に血が吹き出した。

「くそっ……なんで俺は回復魔法が使えないんだ」

補助魔法をロリアに頼り切っていたことを後悔しながらも、来夢は再び起き上がる。

それとは対象的に来夏は倒れ伏した。

「はぁ、はぁ……ヤダ。血が……ごめんなさい。私の、せいで。血が……」

呼吸は乱れ、その口から発せられる言葉もめちゃくちゃ。みるからにおかしかった。

「どうすればいいんだよっ!!」

来夢は懸命に考えを巡らす。傷口が痛み、考えは全くまとまらなかつた。

そのうえ、追い打ちをかけるように痛みが限界に達する。

そして、来夢の必死な抵抗も虚しく意識は闇に落ちていった。

レイルside

レイルの攻撃によって気を失っていたロリアが目を覚ました直後、二人のいる空間が崩れ始めた。

黒い空間がボロボロと崩れていき、そこからは白い空間が覗く。

「ロリアを気絶させれば出られると思ったんだけどな。甘かったか」

「来夢がまだ気絶させてないんじゃないの？」

「うん…」

俺達の行動に関係なくこの空間は崩壊するのかわかるとは、それじゃ、俺達がどんなに頑張っても抜け出せないのか？

まあ、相手は俺達を殺そうとしてるんだし、そう考えるのが自然か。

「何かわかった？」

「たぶん、俺達はこの崩壊に巻き込まれて死ぬ」

「…ええ！？ いや、いきなりそんなこと言われても」

「まあ、待て。ハデスは、この崩壊に俺達を巻き込んで殺すつもりだと思う」

「あ、そゆこと」

「そういうこと。で、俺は今からここを抜け出す方法を考える」

「じゃあ、私も何か気付いたら教えるね」

そう言ってロリアは少し離れる。

さて、どうすっかな。

空間の崩壊は今も着実に進んでいる。完全に白い空間になるまで10分もないだろう。

壊して脱出するのは無理そうだな……

防御魔法で崩壊に耐えるとか？ 可能性はあるけど絶対じゃないからなあ……

ひたすら可能性を搾り出していると、ロリアが声を上げた。

「レイルー！この壁壊したら出られるかなあ？」

……あ？壁だと？

さっきまで壁なんて

「ひゃあー!!」

「ロリア!？」

考えをまとめる間もなく、ロリアが小さく悲鳴を上げる。

レイルがその方向に目を向けるとさっきまでそこにいたはずのロリアの姿がない。

「おい!ロリア?」

まさか崩壊に巻き込まれたのか、と駆け足で壁に近付いた。

そして、調べるために壁に触れる。

その瞬間、レイルの手が壁を通り抜けた。それに続いて腕。その勢いそのまま半分まで通り抜ける。そして、ついにレイルの体は完全に壁を通り抜けた。

もしかしたら、異空間から抜けれるかもと期待したレイルだったが、そんなものはただの期待で終わった。壁を抜けた先もさっきまでと同じく崩壊しかけている異空間だったのだ。

「ここは……」

さっきまでの空間と違う所と言えば、少し離れた場所にレイルとロリア以外の人間が倒れていることだけ。

そして、そこではロリアがしゃがんで何かしている。

最初は何もわからなかったが、近付いて行くうちに人影がハッキリしていく。

それは、よく知っている二人

「来夢！ 来夏！」

レイルは全速力でその場所に近付く。

そこでは、ロリアが来夢を治療していた。

「どうだ？」

「うん……急所を貫かれてる。かなり危ないと思う」

「そうか……」

来夢の顔は生気がなかった。その傍らには砕けた指輪。恐らく、チエスターだろう。

周りを見渡せば、いつのまにか白の割合の方が黒より多くなっていた。

「あとどれくらいかかる？ この空間はあと4分くらいしかもたないと思うけど」

「来夏は精神的ダメージがひどいけど外傷はないから大丈夫だと思う。それに比べて来夢は傷がひどい。

「一応、応急処置はもう終わるけど……」

「そうか。それじゃあ、ギリギリまで来夢の回復に専念してくれ。」

俺は脱出方法を見つける」

「わかった」

ロリアの返事を聞いたレイルはすぐにこの空間からの脱出方法を探し始めた。

うーん……あとはアレしかないか。防御魔法よりは可能性が高いだろう。

「ロリア、あと2分半だ」

「うん。で、脱出方法は思いついたの？」

「まあ、一応。確實じゃないけど一番可能性は高いと思う」

「そう」

「で、そのために二人を起こすぞ」

そう言ったレイルは早速、来夏を起こしにかかった。

「おい、来夏。さっさと起きろ。死ぬぞー」

そんな気の抜けた声で呼びかけながら頬をぺちぺちと叩く。

「うーん……痛い……」

来夏は思いのほか簡単に目覚めた。意識もハッキリしているようだ。

「今からここを脱出するからな」

「……うん」

「らーいーむー、死ぬぞー。起きろー」

先程と同じように呼びかける。が、同じだったのはそこまで。

レイルは大きく腕を振り上げ、平手をおもいつきり打ちつけた。

「!?!」

来夢は大きく目を見開き涙を流し始めた。叫ぶことも出来ない程に痛かったらしい。

「ちょっと、レイル！傷口が開いたらどうするの!」

「おお、わるいわるい。それはそうと起きたか？ 来夢」

「そりゃあね」

来夢は明らかに機嫌が悪い。まあ、いきなり平手打ちで叩き起こされて、機嫌を損なわない人間はいないだろうが。

「もう時間がない。さっさと立て。脱出方法を説明する」

レイル side out

レイルの導き出した脱出方法とはごく簡単なものだった。

「この空間が崩壊する瞬間に跳ぶ」

ただそれだけだった。

「でも、俺達は誰も飛べないぞ？」

「いや、ほんの一瞬でいいんだ。だから飛行魔法はいらない」

「そうなんだー」

レイルの話によると空間全てが崩壊する訳ではないため、周りの壁に触れていなければ崩壊の影響は受けならしい。

「よし。あと10秒ぐらいだ。ギリギリまで待って跳べ」

「うん」

「了解」

そして各自が心の中でカウントダウンを始める。

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1

「跳べっ……！」

レイルの掛け声で全員一斉に上へ跳ぶ。

「くっ……」

だが、腹部の傷のせいで来夢だけ、跳ぶのが遅れた。

「お兄ちゃん!？」

来夏が咄嗟に手を伸ばすが僅かに届かない。

その直後、来夢を掠めたその腕のすぐ横に別の腕が伸びた。

「来夢! 手!」

来夢はその声に反応し、腕を伸ばす。その腕を声の主であり腕を伸ばした張本人　ロリアが力いっぱい引く。

そのおかげで来夢の体は僅かに浮く。だが、それに対してロリアは来夢に下から引つ張られる形になり一気に降下する。

その瞬間、黒かった空間は完全に白く塗り潰され、周りの壁、床、天井、それら全てが同時に　弾けとんだ。

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t

第22話 脱出！？（後書き）

どうも、カルタスです。

お久しぶりです。

いやー、やっと一段落しましたよ。

学生ゆえの予定が満載でした。具体的には、補習とか補習とか文化祭の準備とか補習とか……

まあ、言い訳つちやあ言い訳ですが。

と、カルタスの近況はこのへんにして。

えーとですね。

とりあえず、この小説は30話ぐらいで完結します。

そして、前にも言いましたがStrikersで続編を書きます。どんな感じにするかはだいたい決まっていますし。

予定では恋愛無しで。

最初から主人公に彼女いますしね。正直ちょっと失敗だったかなと思っっていますが……

それくらいかな？

他にはとくにお知らせすることはないです。……たぶん。

あ、これから完結までは一気に投稿したいと思っています。ので、頑張ります。はい。がんばります。

ではでは

第23話 決戦！そして、小さな別れ……（前書き）

今回はなんとあの人が……！

そして最近、主人公であるはずの来夢よりレイルの方が目立ってる

……

では、ごきげん

第23話 決戦！そして、小さな別れ……

どうなったんだ？ て、こんな事を考えてる時点で結果は決まってるか。

そう、来夢達は見事、全員があの変空間から脱出したのだ。

そして、当然目の前にはハデスの姿が。

「おや。これは驚いた。あの空間から出てくるとはね」

ハデスは微かに笑う。

「まあ、いい。今から死んでもらえばいいのだからな」

言い終えた途端、ハデスが何かのスイッチを押した。すると、天井が開き機械研究員が10体現れる。

「10か……俺がやる」

レイルはダグライトを起動する。

「一人じゃきついよ！」

「いや、おまえらは休んでろ」

来夏が止めるものの、レイルは全く聞く耳を持たない。

「やれ」

それと同時にハデスが研究員に命令を下す。
その命令に従い、研究員が四方八方から襲い掛かってくる。

「ダグ、フォームドライだ」

それを確認したレイルはダグライトをフォームドライ 二刀流の
ダガーの柄同士が魔力の鎖で繋がれた形状 に変型させた。
そして、片方を前に向かって投擲する。それが一体の研究員を貫く。
立て続けに今度は右から突っ込んで来た研究員にもう片方のダガー
を突き刺した。

その動きによって引つ張られた最初のダガーは研究員の体から抜け
る。さらに、抜けたダガーが不規則な軌道を描き左から襲い掛かっ
て来る研究員を切り裂いた。

そうして、レイルは次々に敵を破壊していく。

「うしっ！ こいつで最後だな」

レイルはそう叫びダグライトを持つ手を下げた。
だが、その背後から研究員が飛び掛かって来た。
完全に油断していたレイルは反応が遅れる。

そのとき、鋭く発砲音が響き、研究員が崩れ落ちた。

「油断するなよ」

レイルの後方でデバイスを構えた来夢が声をかける。

「油断しているのは君も同じだろう？」

「!?!」

来夢が声を発した瞬間、今まで黙っていたハデスが薄く笑う。何かを感じ横に飛びのいた来夢の横、つまりロリアと来夏が立っていたその場所に、三角の檻が浮かんでいた。

それは魔法によるものではなく金属で出来た、正真正銘の檻だった。

「二人だけか……まあ、いい」

「くっ……! 二人共、今助ける!」

来夢はその檻に近づく。そして、どうにかそれを壊そうとするが、びくともしない。

「無駄だよ。君達の方ではその檻を壊すことはできない。私を殺さない限りね。まあ、それも無理だろうが」

「そんなのわかんねえだろ!」

叫んだレイルはダグライトを両手に、ハデスに向かって駆けていく。

「ふっ……」

「! レイル!」

レイルが気付かない何かに気付いた来夢は、レイルに向けて一発打ち出した。

その弾が被弾するかしないかの微妙な瞬間、レイルの周囲を突風が吹きすさぶ。

そして、その風が止んだ時、レイルは来夢の横にいた。

「ふう……ほんと助かったぜ」

レイルは肩を触りながら安堵する。

「いや、今の攻撃を避けられないようじゃ、私は倒せない」

レイルの肩からは血がしたたり落ちていた。

「ロリアと来夏は後回しだ。先にあいつを捕まえる」

「わかった」

「どうやら諦めていないようだが、作戦でも決まったのかい？」

ハデスはずいぶん余裕なようで、奇襲をかけようともしない。

「待たせたな」

来夢とレイルも何か、作戦を思いついたらしく、眼に諦めの色はない。

そして、来夢はまたしてもレイルに銃口を突き付け、引き金を引いた。

ムーンside

ムーンは今、ハデスと来夢達がいる広間のさらに奥の部屋にいた。

隣の部屋　　広間からはさまざま音が聞こえてくる。
爆発音。来夢とレイルのうめき声。その二人を嘲笑うハデスの声。
その音を聞きながらムーンは自分に何ができるかと考えを巡らせ始
めた。

説得はした。何度も。あの子達に会った時から何度も説得した。

でも、あの人は聞く耳を持たなかった。

あの子達を殺してはいけない。後悔するからと。だってあの子達は
私達の息子とその友達なのだから。

ムーンがそのことに気付いたのはつい先程、レイルに会った時だっ
た。

来夢からレイルという名前を聞いた時から気になっていたが、それ
までだった。

しかし、先程レイルに会った時その気持ちは『もしかしたら』から
『絶対』に変わったのだった。

でも、あの人にはそんな事は関係ないのかもしれない。

息子と言っても私があの人と関係を持った結果生まれた子供。調べ
た訳ではないからあの人が父親だという証拠もない。

復讐をやめるとは言わない。私も同じ気持ちだから。

でも、あの子達だけは……

そして、ムーンの考えは決意に変わる。

言葉でダメなら。説得できないなら。

自分の体で、命を懸けて止める、と。

一方広間の二人は来夢がレイルに転移弾を打ち、ハデスの間近に転移したレイルが攻撃を当てる、という作戦をとっていた。これにより、少しずつだがハデスの体には傷が刻まれていく。だが、来夢とレイルの体には、その倍の速さで傷が出来ていた。

「はあっ！」

レイルは体を捻り、その回転に乗せてダグライトを振るう。

それはハデスの頬を掠めるが、同時に放たれたハデスの拳はレイルの腹部に深くめり込んだ。

「がはっ……」

レイルはそのまま後ろに飛ばされる。

そして、来夢が瞬時に撃ち出した弾丸もハデスの操作した機械研究員によって軌道がずらされ、掠めるだけに終わる。

さらに、その研究員の指から放たれたレーザーが来夢の左肩を貫いた。

「ぐっ……」

その二人をハデスは見下すように見つめながら、口を開いた。

「このまま続けても君達が負けることは目に見えてるが、私もこれで忙しい身なのでね。そろそろ終わりにしようか」

ハデスはそう言いながら懐から小さなビー玉のような物を取り出した。

『何をする気なんだ？』

『さあな。でも、ヤバそうなのは確かだな』

二人は念話で話し合う。

その時、ハデスがビー玉を放る。

その玉は重力に従いゆっくりと落ちて行き、床に触れた。

その瞬間、玉を中心に巨大な魔法陣が広がっていく。

そして　小さな光が浮き上がり二人に向かって飛んできた。

その時、何者かがレイルと光の間に無理矢理に転移してきた。その直後、来夢と光の間には一体の機械人形が立っていた。そして、ハデスが立っていた場所は、爆発していた。

レイルと光の間に立っていたのは　ムーンだった。

「……………どうして？　あなたは……………」

レイルは心の底から驚いた顔をしていた。来夢も似たような表情だ。

「そんなのはどうでもいいことよ。それより早くここから出なさい」

「どうでもよくない！　それに、俺達はいいつを捕まえなきゃならないんだっ！」

「黙りなさい！」

ムーンは反論するレイルを一喝し、来夏とロリアが入れられている檻の鍵を来夢に渡す。

「それで開けられるわ」

「あ、ああ……」

「あの人はきつと生きてるわ。だから、はや……ぐっ……」

「大丈夫か!？」

レイルを説得していたムーンが突然、顔を歪ませる。そのムーンの体にはどんだん光が入っていく。機械人形も同じ状態だ。

「だ、大丈夫よ。それより早く……」

「おい!」

その時、来夢が何かに気付き、声を上げる。

「あんだ、体が……」

来夢の指摘通り、ムーンの体は崩れていた。まるで砂のように。サラサラと。

レイルは驚きの余り言葉が出てこないようだ。

「これは……何でもないわ。大丈夫」

「んな訳ないだろ!？ それ、まさか体が全部、崩れるんじゃないのか?」

来夢は違つて欲しいと思ひながら自分の考えを口にする。

「……ええ、そうよ」

来夢の願いに反してムーンの口からは肯定の言葉が発せられた。

「そんな……一緒にここを出ましよう。医者に見せれば……」

「無理よ。絶対に助からない」

「でも……もしかしたら……」

ムーンに否定されてもレイルは諦めない。

「ありがとう。そんなに心配してくれて嬉しいわ。そんなあなたに一つ、お願い」

一生懸命に可能性を模索するレイルの言葉を遮りゆつくりと語り始める。

体はもう左腕が崩れ去っているが苦しい顔は全くしていない。

「今のうちにあなたの母親に別れの挨拶をしてあげて。きっともう会えないから」

「え……それって」

ムーンの口からは衝撃の事実が語られる。

「あなたの母親は生きてるわ。でも、もうすぐ死ぬ。だから、ここ

からでもお別れを言ってあげなさい」

「どこに……どこにいるんですか!？」

「それは……わからない」

「そうですね……あ、もしかしたら、ここを出てからでも」

レイルは僅かに残る可能性を次々と口にする。

「間に合わないと思うわ」

だが、ムーンはそれを次々と否定していく。左足もほとんどなくなっていた。

「さあ、早く出なさい」

「わかりました……」

急かすムーンの声にレイルは静かに返事をする。

そして、たった一言、言葉を紡ぎ出した。

「さよなら……母さん」

その一言を聞いたムーンは満足そうに微笑み……砂のように崩れ去った。

第23話 決戦！そして、小さな別れ……（後書き）

どうも、カルタスです。

ああー、何であんなになっちゃったんだ……ラスト。

俺はただムーンに幸せに逝って貰おうと思ったただけなのに……

なんでレイルは気付かないんだ！？

……普通は気付かないか。

まあ、ただ一つ確かな事は俺のテンションが限りなく0に近いということ。

原因は勿論ムーンの死。俺はこのキャラが好きだった。その割りに
は出番すくなかったけど……本名も出してあげられなかったけど……

でも俺は大好きだったんだあああー！！

取り乱してしまった。

ええ、毎回言ってますが、もうすぐ完結です。

俺はムーンの死を乗り越えて頑張ります。

感想や誤字の指摘、読みにくい等の意見、来夢達のこんな話が見たい、などなど、気軽に寄せ下さいね。

それがムーンの死を乗り越える為の力になります。
よろしく願いします。

ではでは

第24話 決着！（前書き）

今回は早いぞじよ。

では、ごんげん

第24話 決着！

ムーンの体が崩れたことによりその場にいた全員が少なからずショックを受けていた。ハデスも決して例外ではなかった。

「……………どうしてだ……………？ 裏切ったのか？ 信用できると思っていたのに」

ハデスは信じられない、と言う顔をしている。

「結局、君もそっちの人間だったという訳か……………アリア」

その小さな呟きが来夢達の耳に届く事はなかった。

「レイル今のうちに逃げよう」

「でも……………」

「あの人の死を無駄にはできない。それにここで死ぬよりは何倍もマシだ」

「……………そうだな」

一度は拒んだレイルだったが、来夢の言葉に小さく頷く。そして、二人は檻に近付き鍵を開けた。

「大丈夫か？」

「うん。なんともないよ」

「私も大丈夫」

「そうか。よかった」

来夢はロリアと来夏の無事を確認し、安堵する。

その時、先程まで黙っていたハデスが突然喋り始めた。

「私は誓ったのだ。管理局に復讐すると。だから、お前らを逃がす訳にはいかない」

ハデスの体はムーンが起こした爆発により、もうボロボロだったが、そんな事は気にするそぶりも見せない。

「これ以上二人を危険な目にあわせる訳にはいかない。来夢」

「おう」

レイルに促された来夢は二人に銃口を向ける。

「え？ でも……」

「大丈夫だ。あ、この銃は借りとくな。チェスターがいないから」

心配のあまり泣きそうなロリアを安心させるように笑う来夢。

そして、ロリアが再び口を開く前に立て続けに二発、引き金を引き、強制的に管理局へ転移させた。

「これで、あいつらは心配いらないな」

「ああ」

「二人を逃がしたか。だが、お前らも逃げられると思わないことだ」
「それはどうか」

ハデスの迫力に気圧されることもなく来夢はレイルと自分に向け、
立て続けに発砲した。

「……!？」

来夢の予定だと自分達は既に管理局にいるはずだった。
それなのに目の前の風景はいつこうに変わらない。

「何で……転移できないんだ？」

「逃がさないと言っただろう？ もつこの広間では転移魔法は使えない」

「てことはさっきまでの作戦も使えないってことか」

レイルは小さく舌打ちをする。

その直後、ハデスの口から信じられない言葉が飛び出した。

「私を裏切ったあの女はあんな兵器ではなく直接手を下したかったものだ」

「!？」

その言葉に来夢の表情が激変する。

「あの人は仲間だったんだろ……？ 何でそんな言い方するんだよ」

「その通り。仲間『だった』女だ。今は違う」

「それでも、そんな言い方しなくてもいいだろ！」

来夢は今までにないような大声で叫ぶ。

「私を裏切ったんだ。当然だろう」

それに対してハデスはさも当たり前だというように、答える。

「あの人はあなたの考えに賛成していたんだろ？」

「信じていたんだがな」

「なら……」

「来夢。もうこいつと話す必要なんて……」

レイルが時間の無駄だと、止めようとするが来夢は構わず続ける。

「それなら……あなたの考えに賛成できなくなったから裏切ったんじゃないのか!？」

「どづいことだ？」

「あの人があなたの元から去った理由はあなた自身にあるんじゃないのかって言うてんだよっ!?!」

ハデス side

「あの人があんたの元から去った理由はあんた自身にあるんじゃないのかって言ってるんだよっ!!」

来夢のその言葉にハデスはかなり動揺していた。

私に原因があるだと？ そんな馬鹿な。

ハデスには心当たりが全くなかった。

「例えば、管理局に復讐するとか言っておいて、全く関係ない俺の妹やお袋を誘拐した事！ そういうところに賛成出来なかったんじゃないのか!!」

「違う!!」

違う。あれは違うんだ。アリアもそれはわかっていた。そこで、ハデスは一つの可能性にたどり着いた。

もしかや……あの時、私が聞く耳を持たなかったからか？

『お願い。あの子達は殺さないで。レイルは私達の息子なのよ』

そう言われた時、ハデスは応じなかった。

私の息子である証拠がどこにある？ もし息子だとしても管理局員を見逃す気などないと、そう言ったのだ。

私が説得に応じなかったからなのか？ 私が悪かったのか？
いや、私は何もしていない。悪くない。

「私は悪くないっ！！」

ハデスは疑念を振り払い叫ぶ。
そして、来夢に向かって駆け出した。

ハデス side out

来夢は向かって来たハデスを避けるべく、横に移動しようとする。
だが、いつのまにか足にかけられていたバインドに気付かず大勢を
崩す。

そのせいでがら空きになっている来夢の腹をハデスは思いっきり蹴
り上げた。

さらに、そのまま後ろに飛ぶはずだった来夢の襟を掴み、顔面を殴
る。

「私は何も悪くない！」

「がっ………！！」

「来夢！」

それによって後ろに倒れ込む来夢をレイルは間一髪のところでは支え
る。

「大丈夫か？」

「ああ……」

「どうすんだ？ あいつ完全にキレてるぜ」

「俺がやる。レイルはバックアップたのむよ」

来夢の顔を見たレイルは何も言わず頷く。

「あんた、わかつたんだろ？」

「何のことだ？」

来夢はハデスに一步近付く。

「ほんとはあの人があんたの元から去った理由がわかつたんだろ？」

「……………」

もう一步。

「気付いたならいいんだ。だが、俺はあんたを許さない。死ぬまでな」

もう一步ハデスに近付き、来夢は銃を突き付ける。

「あんたのことは正直殺したいが、そんなことするわけにはいかな
いからな。あんたには一生牢獄で過ごしてもらおう」

そう締め括り来夢は引き金を引いた。

が、その銃から放たれた弾丸は目標を失い、後ろの壁に当たった。

「確かにあいつが裏切った理由は私にあったようだ。だが、あいつの願いを無視してでも、私は復讐をやり遂げなくてはいけないのでね。捕まる訳にはいかない」

その声は下から聞こえていた。

来夢は咄嗟に下を向くがその時にはハデスの拳が目前に迫っており、避ける事が出来なかった。

しかも、ただの拳ではなく、魔力を纏わせた拳である。普通のパンチとは比べものにならない程の威力だろう。

「くふっ……」

それを受けた来夢はかなり高くまで飛ばされる。

「スモールダガー！」

レイルはハデスに向かって極小のダガーを無数に飛ばし、ハデスがそれに気を取られているうちに落ちてくる来夢を受け止める。

「はあ、はあ……やっぱり、そう簡単には捕まってくれないね」

「当たり前だろ。バカかお前は」

「「!!」」

二人が話しているとスモールダガーを避け切ったハデスが突っ込ん

で来た。

「来夢、やるぞ！」

「了解！」

声を掛け合った二人は同時に跳ぶ。

ハデスがそれを目で追うと来夢が銃を床に向かって連射した。

それに気を取られたハデスは一瞬二人から視線を外してしまい、その隙にレイルはフォルムドライにしたダグライトの片割れを投げつける。

ハデスはそれにもしっかり反応し、体を少しずらすだけで見事に避けて見せる。

だが、それもレイルの計算の内だったのだ。

最初に投げたダガーと僅かに時間をずらしたもう一方のダガーがハデスの目の前にまで迫っていた。

ハデスはそれも間一髪で避ける。

「残念だったね。もう終わりかい？」

「油断するなよっ……」

全ての攻撃を避けきり薄く笑むハデスを見て来夢はニヤリと口元を歪めた。

「!？」

来夢は構えた銃を次々と発砲する。だが、発射された弾丸はハデスから大きく離れたところを通過していった。

その弾丸の先にはレイルが投げたダガー。そして、来夢の狙い通り

弾丸がダガーに直撃する。

そのせいでダガーは様々な方向に弾かれ、軌道が変わる。

そして、その不規則な軌道についていけないハデスはダグライトについた魔力の鎖によって搦め捕られ、そのまま突き進むダガーは壁に突き刺さる。当然、繋がれていたハデスは壁にたたき付けられた。

「来夢、今だ！」

レイルの声を聞いた来夢はハデスに向かって銃を撃つ。

今度はその弾が直撃し、ハデスは何重ものバインドに拘束されたのだった。

C o n t i n u a a l l a p r o s s i m a v o l t

第24話 決着！（後書き）

どうも、カルタスです。

今回はかなり早く書き上がりました。
何でだろう？

まあ、そんなことは置いといて。

ハデスさんが呟いていた「アリア」ってのはムーンの本名です。
ちよい無理矢理つばいけど、どうしても登場させたかったんで。
来夢のお母さんの名前も登場させたかったけど、まだ生きてるから
今じゃなくてもいいかな？って思ったので当分は出ないと思います。

では

感想やリクエスト待ってます。

最終話 とりあえず事件の終わり（前書き）

短いです。

短すぎます。

では、ごんご

最終話 とりあえず事件の終わり

ハデス side

この二人が言った通り、アリアが私の元から去った理由は私自身にあつたようだな……

ハデスは来夢とレイルに捕まり、やっと冷静に思考が出来ていた。

そもそも私は妻と子供を救いたかっただけだった。それなのに、私の目的は救出から復讐に変わり、さらには復讐の対象が管理局全てにまで広がってしまった。

そして、復讐というバカな考えに賛成してくれたアリアの話も聞かず、一人で暴走していたという訳か……

ハデスはそのままで考えを巡らせたところで、一つの衝動にかられた。自分を笑ってやりたい衝動に。

「くっくっ……」

その衝動を抑え切れなくなったハデスはついに笑い始める。自分はなんてバカだったのか、と。

「はっはっはっは……」

「何だ!？」

突然笑い出したハデスに驚く二人。

いまさらだがアリアの願いを叶えてあげよう。

そして、ハデスは二人を逃がすと決めた。アリアが望んだ通りに自分について来てくれた大切な仲間のために。

これがアリアに対してのせめてもの罪滅ぼし。
だが……

「だが、私を捕まえられるとは思わないことだ」

「は？ 何言ってるんだ？ もう捕まってるんだろ」

レイルの反応は当然のものと言えよう。

バインドで縛られている状態でこんなことを言っても負け惜しみ
しか……いや、負け惜しみにすら聞こえない。

だが、ハデスはレイルのそんな言葉を気にする様子もなく、さらに
続ける。

「君達はわかっていない。私を舐めるな」

「……!?」

妻と子供達を残して逝くのは耐えられないが、私はどうせ世間では
犯罪者だ。

生きてても周りのみんなに迷惑をかけるだけだろう。

それなら……私の生きてきた歴史、私の生きた証明と共に死ぬほう
がいい。

そうすれば、私と関係がある人にも迷惑はかからないだろう。

「私は君達とは違うのだよ。死など恐れてはいない」

すまない。

みんなを救う為とはいえ罪を犯したこと。

みんなに挨拶もせず勝手に逝ってしまったこと。

きつとみんなと同じところには 天国にはいけないだろうが。

どうか……どうか、許してくれ。

「逃げられないなら、君達を巻き込んで自爆する。それだけの覚悟が私にはあるということだ」

そして、この二人にも気付かれないように、最後まで私は……悪人でいよう。

「逃げるなら今だぞ?」

そう言ったハデスは自身の魔力を左胸 心臓のあたりに集める。

「来夢！ 逃げるぞ！」

それに反応し二人が駆け出した瞬間。

「みんなを頼んだぞ。来夢、レイル」

ハデスは小さな小さな呟きと共にその命を散らした。

ハデス s i d e o u t

ハデスが行った自爆は大規模なものではなく自分の命を終わらせるのに必要なだけの規模だった。

「……大丈夫だったな」

「ああ……」

二人は完全に拍子抜けという顔をしている。

「これで、今回の事件は解決か？」

「解決と言えるかはわからないけど……」

「一先ず、帰るか」

「そつだな」

こうして、長いようで短かったこの事件が幕を降ろしたのだった。

f i n e

最終話 とりあえず事件の終わり（後書き）

どうも、カルタスです。

読んだのでわかると思いますが、短いです。
こんなに短いのは第1話以来じゃないかな？

まあ、これで一先ず本編は終了です。

この後は来夢、ロリア、来夏、レイル。
それぞれの後日談をお送りします。

それを投稿し終わったら、ほんとに終わりですね。

それにしても飽きっぽい俺がよく最後まで書ききったなあ。と自分
では思ってたります。

えー、次回は来夏の後日談になるかな？
お楽しみにー。

ではでは

感想やリクエストずっと待ってますよー。

番外編 後日談です（前書き）

後日談です。来夏の。

では、どうぞ

番外編 後日談です

あの事件から一ヶ月程たったある日。

来夏は管理局の一室に来ていた。

理由は定期検査である。

『プロジェクト』のアジトから戻ってきた時、来夏は突然に意識を失った。

二週間前、その原因を調べて貰った際、記憶喪失だと告げられたのだ。

それからは週に一度定期検査に訪れているという訳である。

はあ……失った記憶がヒズメ式についてだってことはわかったんだけど理由がまだわからないんだよね……

その記憶を失ったせいでヒズメ式は使えなくなっちゃっし……

心の中で愚痴を零しながら歩いていると、検査室に到着する。

「失礼しまーす」

「あら、来夏ちゃん。早かったわね」

検査のたびに会っているため既に友達感覚の医師に挨拶をし、部屋に入る。

「はい。今日はこの後、行くところがあるんで」

「そうなの？ じゃあ、早速始めましょうか」

「お願いします」

先生に促され、来夏は検査をする機械に横たわる。そして、いつもと同じように目を閉じ、心を落ち着けた。

約10分後

検査は無事終了し来夏も起き上がる。

「もうすぐ結果出るから待っててね」

そう言った医師は何やら機械を操作し始める。

「結果でたわよ」

「どうでしたか？」

「異常なし。検査も今日で終わりでいいわ」

医師は笑顔でそう告げる。

「そうですか。で、原因の方は……」

「ああ。そうだったわね。たぶん、わかったと思っわ」

来夏の問いに対し、医師は微妙な返事をする。

「たぶん？ どういうことですか？」

案の定、来夏は聞き返す。

「私の予想なんだけど、いいかな？」

「はい」

「アジトから帰って来るときに転移したでしょ？」

「はい。まあ、お兄ちゃんが転移魔法をかけてくれたんですけど…」

来夏は少し恥ずかしそうに答える。

「で、そのあと『プロジェクト』のボスが転移魔法が使えないようにした」

「そうらしいです」

「私が思うに転移のタイミングが悪かったんじゃないかしら？」

「タイミング？」

原因がタイミングと言われ納得がいかない御様子の来夏。

「ええ。多分、あなたが転移する瞬間、転移妨害が発動したのよ。でも、一度発動した転移魔法は解けなかった。だから、妨害されながらも無理矢理に転移した。その結果、脳が耐えられず、記憶の一部が欠落した」

「……なるほど」

医師の考察は筋が通っており、それを聞いた来夏は言葉を失う。

「まっ、あくまで私の予想だけだね」

「いえ、ありがとうございます」

「もう来なくていいからね」

「その言い方、ちょっと傷つきますよ」

アルバイトにクビを言い渡す店長のようなセリフに、少し傷ついたような顔の来夏。

「そう？ まあ、いいじゃない」

「いいですけど……じゃあ、行きますね」

「ええ、気をつけてね」

「はい。ありがとうございます」

お互いに微笑み合う。

そして、来夏はその部屋を後にした。

少し話し過ぎちゃったかも。間に合うかな？

来夏は早足で次の目的地へと向かう。

幸いなことに目的地はすぐ近くにあり、急げば多少狂ったスケジユ

ールも修正できるだろう。

「失礼します」

「君か。できてるよ」

その部屋にいた研究員は一度だけ来夏の顔を確認すると何かを投げた。

「それが君のだ。忙しいので出ていってくれるかな」

「はい。ありがとうございます」

研究員の態度はかなり冷たいものだったが、来夏は気にするそぶりも見せず、部屋を出る。

「この子が私の……」

来夏は興奮を抑え、小さく呟く。

「セットアップ」

来夏は先程渡されたネックレスに呼び掛ける。紫の宝石がはめ込んであるものである。

そして、その呼び掛けに対してネックレスが拳銃に変型し声が発せられる。そう、来夏専用のデバイスである。

《はじめまして。マイマスター》

「あ、えと……はじめまして。蹄来夏です」

デバイスの挨拶について敬語で返してしまう。

《あなたは私のマスターなんですから敬語など使わないで下さい》

「あ、そうだね」

《はい。とりあえず、私の名前を決めて頂けると嬉しいのですが》

「そっか、名前かぁ……」

自分のデバイスが持てることに興奮し、名前など全く考えていなかったらしい。

「うーん……………あ、そうだ！」

《決まったのですか？》

「うん！ あなたの名前はアネモネ！」

《アネモネですか》

「うん。アネモネの花言葉は期待。あなたのこと期待してるよって意味を込めて。どうかな？」

《とても気に入りました。では、改めましてよろしくお願いします。マスター来夏》

「こちらこそよろしくね。アネモネ」

こうして主とデバイスの関係は始まった。

出会いから20分後

来夏は迷っていた。

「何で!? こっちであってる筈なのに!」

《マスター、先程の角を左だったのでは?》

「えー!?!」

今度の目的地は陸上警備隊第386部隊の隊舎である。

誰も自分のような目にあわせないために兄である来夢の反対を押し切り捜査官を目指している。

普通は訓練校からなのだが『プロジェクト』のアジトでのこともあり、試験にも合格したため、管理局員になると同時に部隊に配属されたのだ。

そして、今日が初日なのだが……

「わかんないよ」

時間までに到着する気配がまるでない。

《何故、地図を持って来てないんですか!?!》

「だってえ……」

《自業自得です！》

「うう……」

大通りのど真ん中でデバイスに怒られて泣き崩れる女の子が一人。早くも、関係が逆転していた。

その時

「あのお……どうかしましたか？」

突如、声を掛けられた。

「ふえ……？」

「局員みたいですけど……」

「えと……道に迷ってしまって」

来夏は恥ずかしさから俯きぎみに現状を説明する。

「そうですか。よかつたら私達が案内しましょうか？」

陸士部隊の制服を着たオレンジの髪の少女が申し出る。

「え？ いいんですか？」

来夏は女神でも見るような瞳で見上げる。

「私達こちらへんは詳しいですから」

今度は隣に立っていた青い髪の少女が答える。

「ありがとうございます！」

それを聞いた来夏は地面に額を擦り付けんばかりの勢いでお礼を言い始めた。

「い、いえ……」

「大丈夫ですから……」

二人の少女はというと若干引きぎみであった。

「で、どちらまで？」

「陸上警備隊第386部隊です」

「それじゃあ、もしかして……」

「今日から配属されるっていうのは……」

「あ、多分私の事です」

少女達は事前に話を聞いていたようだ。

「私達も同じ部隊なんですよ！」

青い髪の少女が嬉しそうにそのことを伝える。

「そうなんですか！？ よかったあ」

来夏は安心からか涙を浮かべ始めた。

「それじゃあ、隊舎に行く前に新しい仲間にご自己紹介しようよっ」

「そうね」

青い髪の少女の提案にオレンジの髪の少女も賛同する。

「じゃあ、私から。スバル・ナカジマ三等陸士です。歳も同じくらいみたいだしスバルって呼んでよ」

「次は私ね。ティアナ・ランスター三等陸士です。私のことはティアアでいいわ。こいつもそう呼んでるし」

二人が自己紹介を終えると来夏が急いで立ち上がる。

「ほ、本日より配属になりました、蹄来夏二等陸士です！ 私のことも名前で呼んでね」

「うん。よろしく、来夏」

「よろしく」

「よろしくね。スバル、ティア」

こうして、二人の少女と共に来夏の新しい生活が始まった。

f
i
n
e

番外編 後日談です（後書き）

どうも、カルタスです。

今回は来夏の後日談です。

ちょっと詰め込んだ感じになっちゃったかな？
楽しんで貰えれば幸いです。

最後には、あの二人も登場しましたし。

で、他に俺が言いたいことはただ一つ。

なんかデバイスのネーミングセンスなくね？ てこと。

チェスターにしるアネモネにしる。

人間としてはいいんだけど、デバイスとしてはどうだろう？

レイジングハートやバルディッシュみたいなカッコイイ名前をつけてあげたい。

ま、考えても考えても思いつかないから今後もこんな感じだろうけど……

あ、言いたい事もう一つありました。

感想とかリクエストとか待ってまーす。

今回はレイルの後日談！

ではでは

番外編 後日談だぜ！（前書き）

ちょっとシリアス風味。

では、ごんぞ

番外編 後日談だぜ！

あの事件の後、レイルの日常にあまり変化はなかった。

事件が起きて、捜査して、解決して。毎日その繰り返しである。

だが、ただ一つ、レイルにも変化があった。決して良い変化ではないが、変化にはかわりないだろう。

その変化とは、階級の降格である。

理由は一般人（来夏）を捜査に関わらせた、ということ。

普通はそんなことをした場合、降格では済まないのだが、無事に事件を解決したことで来夏本人の弁護があったため降格だけで済んだのだ。

そのため、今ではモコと同じく一等陸士だ。

そして、今日もレイルはモコと共に事件解決の為駆け回っていた。

「モコ、事件の詳細資料とってくれ」

「どっぞ」

「捜査長、証拠が見つかったそうです」

「そうか。じゃあ、俺は現場行ってくるから。おまえはモコと休んでろ」

「俺も行きますー！」

「いや、おまえらずっと働いてるからな。休め」

「わかりました」

上司に休憩を言い渡され、二人は食堂に向かう。

「あああ、疲れたあ……………」

「そうですね……………」

無人の食堂に着き、二人は適当な席に座る。

「何で俺は捜査官なんかになったんだろうな……………」

レイルはあまりの忙しさから、愚痴を零し始めた。

「『プロジェクト』みたいな組織を全て壊滅させるためでしょう？」

「まあ、そうなんだけど……………？ それにしても忙し過ぎるだろ……………」

「……………」

「しょうがないですよ。私達は捜査官なんですから」

律義にもレイルの零す愚痴一つ一つにちゃんと返答するモコ。

「でも、俺さ、仕事がこんなに忙しいって感じたの、最近になってからかもしれない」

「そうなんですか？ 私はずっと感じてますけど……………」

モコは不思議そうな顔でレイルを見つめる。

「と、いうより、辛いつて感じたのが最近になってからなんだ」

「仕事が、ですか？」

「そう」

何かいつものレイルと違う雰囲気を感じ取ったのか、モコは黙って先を促した。

「モコは知ってると思うけど、俺は管理局に復讐するつもりだった。だから内部のことを知るため、管理局に入ったんだ」

「はい。聞きました」

「目的を達成するために死に物狂いで仕事をした。だからかな？辛い、きついつて感じた事がないんだ」

それを聞いたモコは俯いてしまう。

「でも、『プロジェクト』の捜査でモコに会って、来夢やロリア、来夏に会って、仕事以外に楽しさを感じ始めた」

「……………」

「それからだ。仕事がキツイ、早く休みたい、みんなと喋りたいって思うようになったのは」

「そうですか……………」

モコは俯きながらも、返事だけはする。

それを見たレイルが微かに笑いながらモコに問う。

「なあ、モコ。何で俺が復讐を止めたか知ってるか？」

「え？ それは、来夢さんと話して『プロジェクト』が悪い組織だ
ってわかったからじゃ……」

「それは『プロジェクト』を抜けようと思ったきっかけ」

「じゃあ……」

モコは他に思い当たらない、という表情。

「実は、管理局への復讐を止めようと思ったのは来夢に会う前なん
だ」

「前……ですか？」

「ああ。復讐を止めようと思った理由。それはモコ。おまえとの出
会いだ」

「私との、出会い？」

「そう。自分と同年の局員に会ったのは初めてだった。で、こん
なかわいい子も局員なんだって知った」

「か、かわいくなんて……」

驚いていたモコの顔は、みるみる赤くなっていく。

「その時、やっとわかった。管理局を潰すってことはこの子の命も
奪うってことなんだってな。組織の上を狙えば下とも戦うことにな

る

「だから、止めたんですか？」

「ああ」

「そうですか。そろそろ仕事に戻りますか」

話が終わったと判断したモコが、席を立つ。

「いや、もう少しだけ……話、聞いてくんないかな？」

レイルは歩き出そうとするモコを引き止める。

「いいですけど」

そして、再び席についたモコを確認し口を開いた。

「最近思つんだ。俺は管理局を辞めるべきなんじゃないかって」

「なんでですか？」

「治安を守るはずの管理局に犯罪者がいたらまずいだろ」

「犯罪者!?!」

「ああ。今は違つたとしても俺は『プロジェクト』に手を貸した」

「違います!! 確かに手を貸してたかもしれないですけど、今は

……違います……」

モコの顔は今にも泣き出しそうだ。

「だけど、俺が手を貸したことによって命を失った人がいるんだ！」

「それなら、もっとたくさんの人を救えばいいじゃないですか」

「そんなことしても！ 犠牲になった人は！」

レイルはついに席を立ち、涙を零し始める。

それに対して、モコはレイルの目を見据え、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「確かに犠牲になった人は帰って来ません。でも、ここで辞めたら逃げるのと同じです！」

「この前の捜査で、捕らえられてた子供を助けた。そしたらその子は俺に『ありがとう』って言ったんだ。俺にそんなこと言われる資格なんてないのに……！」

レイルは次々に溜め込んでいた気持ちを吐き出していく。

それを聞き、目の前に座っていたモコは立ち上がり、レイルに近づく。

「それは違います。お礼を言われるのに資格なんて必要ありません。もしあるなら、その資格とはお礼を言われるような事をしたかどうかです。レイルくんはその子を助けました。その時点でレイルくんにはその資格があったってことです」

「でも、俺は、感謝される、事よりも、恨まれる、事をしてきた」

「だから」

モコは涙で顔をぐしゃぐしゃにしたレイルに近付き、その小さな身体で抱きしめた。

「!?!」

「だから、それ以上に、自分がした悪いことよりたくさん、いいことをすればいいんです」

「そう……なのか?」

「はい。そうです」

「そう……なのか」

「だから、レイルくんは管理局にいなきゃダメなんですよ」

モコはそう言ってレイルから離れる。

「じゃあ、俺、辞めないよ」

「はい」

レイルの言葉を聞いて、モコは嬉しそうに微笑む。

そして、その笑顔に心えるように涙で濡れた顔を綻ばせ、レイルは告げた。

「ありがとう」

f
i
n
e

番外編 後日談だぜ！（後書き）

どうも、カルタスです。

レイルの後日談はシリアスでした。

前半と後半のシリアス度の差が……

後半はちよつと重くなってしまったかも……

まあ、あのレイルも悩むってことです。

それにしても、モコはいい子だなあ。

この二人、結構いい雰囲気だし。

でも、きつと何も進展しないんだ……

しかも、モコの出番はこれが最後かも。

俺が無性に出したくなるか、読者の皆様から「モコを出してあげて！！」って言われたら出すかもしれないけど。

今回話したい事はこれだけ。

次回はロリアです。

感想、リクエスト待ってます。

では

番外編 後日談 (前書き)

今回、短めです。

では、ごっごー

番外編 後日談

ある日の陸士108部隊隊舎前の訓練スペース。
そこにロリアはいた。

服装は訓練着。両手には【インスイエーメ】によって生成された拳銃型のデバイス。

見ての通り、訓練中のようだ。

だが、いつも一緒にいると言っても過言ではない来夢の姿がそこにはなかった。

よしっ！ 訓練ぐらい一人でできるもんっ！

ロリアは心の中で一度気合いを入れる。

そして、銃を構えた。

既に、少し先にはターゲットが用意されているようだ。

パンッ！ パンッ！

ロリアの両手に納まる二丁の銃は乾いた音を響かせ、カートリッジを撃ち出す。

それは、目にも止まらぬ速さで直進していき、見事ターゲットの中心を撃ち抜いた。

「やったあ」

ロリアはターゲットを撃ち抜いた喜びを体全体で表している。

「もう一回……」

「ロリア」

再度ロリアはターゲットに狙いを定め、銃を構えた。その時、後ろから聞き慣れた声が掛かる。

「ギンガ？ どうしたの？」

「一緒にお昼食べない？」

「え！？ もうそんな時間なの？」

「うん。普通より遅いくらいだよ」

結構早くからやっていたロリアだが、あまりに集中していたせいで時間の感覚が狂ったようだ。

「まだ、基礎練しかやってないのに……」

「お昼食べてからにしたら？」

「……………そうする」

訓練をとるか、昼食をとるか、大分悩んだ後呟くように返事をした。

場所は食堂。

二人は空いてる席を見つけ、向かい合って座る。

「来夢くんはノアさんの所に行ってるんだっけ？」

「うん。あの事件でチェスターが粉々になっちゃったからね」

「そっか。そういえば、ロリアも自分のデバイスを作ってもらって
言ってたよね？ デバイスはいらないうんじゃなかったの？ 【イ
ンスイエーメ】があるから」

「うん。まあ、いろいろ特別なのをね。詳しくは見てからのお楽し
み」

「気になるなあ」

そんなことを話している間にもギンガは昼食を食べ進めていたらし
く、話が一段落した頃には食べ終えていた。

「私、仕事に戻るね。ロリアは午後も訓練？」

「うん、そのつもり」

「そう。頑張り過ぎないようにね」

「ありがと。じゃあ、また後でね」

ギンガが立ち去ると、ロリアは残っていた昼食を口に運び始める。
そして、最後の一口を飲み込んで席を立ち、訓練場に向かって歩き
出した。

「よーし、やるぞー」

ロリアは気合いを入れ、ターゲットに向け銃を構える。だが、その声にはどこか力がない。さらに、放ったカートリッジはターゲットの中心を大きく外れてしまふ。

「はあ………」

ダメだなあ……

一週間来夢に会ってないだけで調子が出ないなんて。

ロリアはその場に座り込み大きなため息をはいた。

せつかくデバイスとして登録されてたのを普通の局員として登録してもらったのに……

前より来夢の役に立てると思ったのに……

もうデバイスじゃないから常に来夢と一緒にいられるということもなくなっちゃう。

ロリアはそんなことを考え、涙が零れそうになるが、それを袖口で拭いその考えを頭の隅に追いやると、勢いよく立ち上がる。

「よし！ やるぞっ！」

再び上げた声は空元気だったかもしれないが確実にいつもの明るさが戻っていた。

そして、再び銃を構える。

その時、またしても後ろから声を掛けられた。

「ロリア」

ギンガの時と全く同じ言葉だが、それはギンガの声ではなかった。その声に反応し振り向くとそこにはロリアが一番会いたかった人。蹄来夢が立っていた。

「ただいま、ロリア」

「お、お帰りなさい」

少し前まで来夢のことを考えていたせいか、顔が赤くなる。

「どうした？ 顔赤いけど」

「な、なんでもないっ！」

「そうか？ 熱とかあるんじゃない？」

来夢は心配そうにロリアの額に触れる。

「大丈夫だってばあ！」

触れられた瞬間、ロリアはさらに顔を真っ赤にして来夢の手をはらった。

「あ、ごめん。嫌だったか……」

「え、ちが……」

いつもは普通に喋れるのになんか今日は緊張して目も見れないよ……

「それにしても、珍しいな。一人で訓練なんて。そもそも、ロリアが訓練してること自体珍しいけど」

「べつにいいじゃん。みんな忙しかったし」

緊張からかいつもとは正反対の態度をとってしまっロリア。

「まあ、いいけど。で、まだ続けるのか？」

「えっと……」

「もし続けないんだったら俺の部屋で話でもしないか？　べつに嫌ならいいけど」

そう言った来夢は不意に自分の手をロリアの頭にのせる。

「その……一週間も会ってなかったからロリア不足だし……って、うわあ、恥ずかし……」

来夢は自分で言うておいて、あまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にして、目を逸らす。

一方ロリアは突然頭に手をのせられたことに驚いた様子。だが、そんなことよりも来夢が自分と同じ気持ちだったことに、たった一週間で自分と同じ気持ちになっていたことに驚いていた。それと同時に嬉しさも込み上げてくる。

「どうすんだよ」

来夢は顔を赤くしたまま俯きがちに聞いてくる。

それを見たロリアは先程とは打って変わって満面の笑み。
今までとは違い、いつもと全く同じ調子でその問いに答えた。

「まあ、来夢は私がいないとダメだな　　きつと部屋までもた
ないだろうから、今ここで補充してあげるっ」

そう宣言したロリアは来夢に補充してあげるため　いや、自分が
来夢成分を補充するべく、軽い助走付きで思いつきり来夢に飛び付
いた。

f i n a

番外編 後日談 (後書き)

どうも、カルタスです。

どうだったでしょうか？

本当は終始、ロリアが来夢とイチヤイチャするただ甘な話の予定だったんですが、なぜか前半があんなになった……

まあ、後半は多少甘かったんじゃないかな？と。

そして、大変気になるロリアのデバイスですが、登場は次回作です。それも、割と後の方の予定。

気長に待ってて下さいね。

あ、それと、来夢が言った「ロリア不足」っていうのはアッチじゃないですからね？

夜の方じゃないですからね？

はい。では、次回は今作全体としての最終話。

我らが主人公、来夢の後日談になります。

できるだけ早く投稿しますので。

では

番外編 後日談だよ（前書き）

今回はちっちゃいあの子が登場！

では、ごんご

番外編 後日談だよ

来夢の生活サイクルはこうだ。

7時頃起床。

そして、朝食。

その後、書類整理などの事務仕事に取り掛かる。

12時前後には当然、昼食。

昼食を終えると、再び事務仕事に戻る。

続いて、訓練をしたり、休憩したり。

そして、夕食を済ませ就寝。

日によって、多少の違いはあるものの、だいたいこういうサイクルである。

だが、その日だけはそのサイクルが狂った。

ある目的のために。

そんな来夢のいつもとは違う一日のお話

現在午前5時。

部隊員のみなさんも少しずつ活動し始める時間帯。

この時間、いつもなら来夢は爆睡している時間である。

しかし、この日だけはそうではなかった。

「ふあゝ、ねむ。こんな時間に起きたのいつぶりだ？」

なんと、朝が弱いはずの来夢が起きて、着替えていた。

まさか、こんなことになるとは……

着替え終え、ぼーっとしていると通信が入る。

『来夢、起きてる？』

「起きてるよ。おはよう、フェイト姉さん」

その通信の相手。それはフェイトだった。

『おはよう。今から迎えに行くからね』

「わかった」

『じゃあ、後でね』

その声を聞き、来夢は通信を閉じる。

そして、眠さで重い腰をなんとか持ち上げふらふらとした足取りで部屋を出た。

「お待たせ」

来夢が隊舎前に出て来てから15分後。

もう少しで再び深い眠りに落ちてしまふところだった来夢に声が掛かる。

「あ、姉さん」

「早く乗って。遅れそうだから」

来夢は立ち上がりフェイトの車に乗り込もうとする。その足取りは今だふらふら。

「まあ、遅れそうな原因は姉さんだけだね」

「もうっ！ そんなこと言わないでいいから」

フェイトは恥ずかしさから僅かに頬を染め、いきなりアクセルを踏む。

「うべっ！」

そのせいで来夢は体勢を崩し、頭をぶつけた。

「いったぁ……」

「間に合うかなあ……？」

「……無視ですか」

フェイトは来夢のことなど全く気にせず時間ばかり気にしている。

「ところで何で俺も一緒なの？ 親子……いや、姉妹か？ まあ、水入らずで過ごせばいいじゃん」

「うーん、あの子同じくらいの歳の子と接したことがないんだ」

「でも、仕事はしてるんでしょ？」

「うん。人と接するのは前に比べて得意になったからね」

「ふーん。心配し過ぎだと思っけどなあ。もう一人の子と会わせてみたら？」

「うーん……」

そんなことを話していると、今回の目的地である駅に到着する。ちょうどレールウェイがホームに入ってきたところのようだ。フェイトは人の波にもまれながらもキョロキョロと周りを見回す。

「あっ！」

フェイトは小さく声を上げ、ひとごみを掻き分けながら前進していく。

それと同時に、少し離れたところでも同じような声上がり九歳ぐらいの子供が懸命に前に進んでいた。

「久しぶり！ キャロ！」

「お久しぶりです。フェイトさん」

会った瞬間、フェイトはピンク色の髪をした少女　キャロを抱きしめる。

「大丈夫だった？　迷わなかった？」

「はい。大丈夫です」

フェイトの少々過保護気味な質問に苦笑しながら答えるキャラ。そこに来夢が割って入ってきた。

「あー、俺空気……」

「あ、来夢」

「えーと、この方は……」

来夢の登場にキャラは少し警戒気味だ。

「私の弟みたいな人かな」

「蹄来夢です。よろしくね」

フェイトに促され緊張しながらも来夢が自己紹介をする。

「はじめまして。キャラ・ル・ルシエです」

キャラはもっと緊張しているようだ。

「えっと……キャラでいいかな？」

「はい」

「自己紹介も終わったし、行こうか」

フェイトはキャラの手を引きながら歩き出す。

「行くつてどこへ？」

来夢はフェイトに対して疑問をぶつけるが、気付いてないのか、無視しているのか答えない。

はあ………やっぱ俺がいる意味ないんじゃない………

そう感じながらも来夢は二人の後を追ったのだった。

もう12時近いということもあり、三人はとあるレストランに来ていた。

「お仕事はどう？」

「はい、みなさん優しくて頑張れそうです」

「そう。よかった」

フェイトとキャラロが楽しそうに話している中、来夢はどう会話に入っていけばいいか、その方法を模索していた。

キャラロのこと、何も知らないからな。何か質問してみるか。

そして、こんな感じの答えにたどり着いた来夢はキャラロに質問をぶつけてみようかと口を開きかける。

その時、来夢の目に信じられないものが映った。

キャラロのバッグが動いている!？

「ねえ、キャラ」

「はい？」

「キャラのバッグはもしかして……生きてるの？」

「……なんともバカな質問である。

生き物が入ってるだとか、そういう考えをすっ飛ばして鞆が生きているという考えに行き着いてしまったらしい。

まったく残念な脳みそだ。

「はい？」

聞かれたキャラも思わず聞き返してしまう。

「何言ってるの……？」

フェイトでさえも少し引いていた。

その反応を見た来夢は必死に弁解を始める。

「あの、そのバッグが動いてたから」

「あっ！」

来夢の話聞いたキャラが突然声を上げる。

そして、バッグを開けて中に両手を突っ込んだ。

その手をバッグから出した時、両手には何か白いものが収まっていた。

「なんだ？」

来夢はそれがなんなのか見当もつかないらしく、よく見ようと近づく。

「竜……か？」

ようやくその正体があったらしい来夢はまだ半信半疑、という眩きを漏らした。

「はい。フリードです」

「キョクル」

「もしかして、ずっとその竜がバッグに入ってたのか？」

「すっかり忘れちゃってました。ごめんね、フリード」

「キョク」

うっかりでバッグに閉じ込められるなんて洒落にならんよ。

「よろしくな、フリード」

来夢がフリードに挨拶したところで、注文した料理が運ばれてきた。それと同時にフェイトに通信が入る。

「あ、なのはだ。ちょっと出てくるね。先に食べてていいから」

そう言ったフェイトは出入り口の方へパタパタと駆けて行った。
そうならば当然来夢はキャラと二人つきりになるわけで。

ああ、なんか気まずい……

「ええと、姉さんもああ言ってたことだし、先に食べようか」

「はい……」

そんな来夢の問い掛けに対するキャラの返事は先程までの明るいものではなかった。

「どうかした？」

来夢もその違いに気付いたようで心配そうに声を掛ける。

「たいしたことじゃないんですけど……」

「ん？」

「なんで来夢さんはフェイトさんのことを姉さんって呼んでるんだろって」

「へ？」

キャラの疑問は声のトーンとは裏腹に本当にたいしたことのないものだった。

そのせいで来夢も素っ頓狂な声を上げてしまう。

「す、すいません」

「いや、いいけどそんな質問されるとは思わなかったから……」

来夢は質問の答えを考え、フリードを触りながら語り始めた。

「別にたいした理由はないんだよね。ただ、姉さんがそう呼んでいいよって言ったから。それだけ」

「本当にそれだけなんですか？」

「うん」

「恥ずかしくないんですか？姉さんって呼ぶの」

「うーん、最初は気恥ずかしかったけど、今は慣れた。元々、姉さんって言うのは慣れてたし」

来夢はフリードを叩きながら笑う。

「お姉さんがいるんですか？」

「うん。いってえ……」

フリードが来夢に反撃する。

「あの……フェイトは私のお母さんなんですよね、一応」

「そっらしいね」

「なんでフェイトさんは私の保護責任者になってくれたんでしょう」

「さあ？ それは直接聞いた方がいいよ。まあ、一つ確かな事は姉さんはなりたいたいと思ったからキャラの保護責任者になったってこと」
来夢は急に真剣な顔になって話す。

「大事なものは血縁関係じゃないよ」

きつと、この時来夢の頭には義理の姉　なのはの顔が浮かんでいたことだろう。

「でも、私、迷惑じゃないでしょうか……？」

「俺もつい気にしちゃうんだけど、大丈夫じゃないかな？ 心配しなくてもいいと思うよ。キャラはフェイト姉さんの家族でしょ」

「ふふっ……」

いつのまにか重い感じになっていた空気の中でキャラが小さく笑った。

「どした？」

「なんだか来夢さん、お兄さんみたいだなんて」

「まあ、妹もいるしな」

「私の悩みを聞いてくれて、一緒にご飯食べて」

「それなら、フェイト姉さんもお姉ちゃんじゃん」

「そうですね。お母さんというよりはお姉さんです」

「じゃあ、俺のこと兄ちゃんって呼んでいいぞ」

「へ？」

突然の来夢の提案に戸惑うキヤロ。

来夢はフェイトに初めて会った時に言われたことを真似ているのだろう。

「フェイト姉さんの家族ってことは俺の家族だろ？」

「そ、そうですね。それなら……」

「ありゃ？」

来夢はきつと冗談のつもりだったのだろう。

しかし、それを聞いたキヤロは赤い顔で深呼吸をしている。

「……お兄ちゃん」

「ぐはあ！」

恥じらいながら、お兄ちゃんと呟くキヤロを見た来夢は不覚にも「かわいい」と思ってしまった。

割りと本気で。

この場にロリアがいたら顔を真っ赤にして怒っていたことであろう。

「大丈夫ですか!？」

「ああ……これで俺とキャラは家族だ……そしてフリード、おまえは俺のペットだ！」

「キョクル〜！」

来夢がそんなバカなことを言っていると、フェイトが戻ってきた。

「何やってるの……？」

またしても、引かれた。

来夢がお姉さんに嫌われる日も近いかも？

「あ、姉さん。今、俺とキャラが家族になったところなんだ」

「家族！？ キャロに何したの！？」

その言葉を聞いたフェイトは何を勘違いしたのか来夢の肩を掴んで、前後に大きく揺らす。

「な、なにして、悩みを……」

「来夢だからって許さないからねっ！！」

「うっ……ご飯食べたばっか……」

「分かった！？ 分かったの！？ 返事は！！」

「ひゃ、ひゃい……」

来夢の言葉なんて完璧に無視である。

「ふふっ」

そんな二人を見て微笑むキヤロ。

その日は一日中こんな感じだった。

来夢のいつもとは大幅に異なる騒がしくも楽しい一日は新しい出会い、そして繋がりを心に刻み、終わりを迎えた。

f i n e

番外編 後日談だよ（後書き）

どうも、カルタスです。

今回、我らが主人公に妹ができました。

他の作者さんの作品よりお兄ちゃんって呼ばれるのが早いんですね。かなり。

それにしても、なんかどんどん家族の輪が広がっていくな……

でも、キャラにはお兄ちゃんをつくってあげたかった。

もちろんエリオにも。

はい。今回で本当に完結です。

やったー！ 最後まで書き抜いたぞー！！

そういえば……

完全に話はかわりますが、この作品のオリジナルキャラで誰が人気なんだろう？

授業中にふと思いました。

個人的にはロリア大好きですが……

暇だったら教えてほしいですね。

では、次回作の予告です。

作品名は、

魔法少女リリカルなのはINSIEME Strikers

まあ、普通ですね。

内容は原作にオリジナルキャラが割り込むだけです。
いや、それだけじゃないけど……
でも、ストーリーの大きな変化はないと思います。
あと、レイルは出るかわかりませんねえ……
個人的には出したいけど、大人の事情で出なくなるかも。

そうそう、第1話の投稿は早くて一週間後、遅いと二週間後ぐらい
になると思います。
Strikersを最初から見直さないといけないので……
なるべく早く投稿するので楽しみにしてて下さいね。

ではでは、次回作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565/>

魔法少女リリカルなのはINSIEME

2011年4月8日16時19分発行